ISSN　2424-0478

国際言語文化学会

日本学研究

第８号

Japanology

Eighth issue

論文

江戸期から現代までの日本社会における登山の動機
―高尾山・筑波山を事例とし、観光の観点から―
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　堀口朋亨・村山弘太郎・影浦亮平

1860 年代後半の日米間における武器移転をめぐって
―南北戦争から戊辰戦争へ―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　布施　将夫

日本語の配慮表現の機能について
―品詞をはじめとする形式分類から―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　辻　周吾

外国人留学生における日本語の発音の問題について・・・・・・・・・・・・・　山﨑　誠

日本語学習者を対象とした自己紹介シートの作成
―オンラインツールの利用の試み―・・・・・・・・・・・・・・・　佐古恵里香・山内信幸

中国人留学生の就職活動に関する考察
―日本語の自己 PR 文の特徴について―・・・・・・・・・・・・・・・・・　戸田　あゆみ

日本語・日本語教育研究会　カルチュラルスタディーズ研究会　2023

『国際言語文化学会　日本学研究』第 8 号巻頭言

「京都外国語大学日本語・日本語教育研究会」と「京都外国語大学カルチュラル・スタディーズ研究会」の活動が始まって 10 年が経ちました。2013 年、学校法人京都外国語大学にて設立された「国際言語文化学会」の下部組織として二つの研究会が生まれ、毎年多くの研究会を開催してきました。その成果としてまとめられてきた本研究会誌も今年で第 8 号となります。

新型コロナ感染症の蔓延がようやく終焉を迎えようとしている 2023 年現在、教育業界や学問研究は元に戻るのではなくて、どのように前に進んでいけるのかを考える必要があるでしょう。コロナ禍でのオンラインによる様々な活動は、国際的なコミュニケーションをますます拡大させたと言えます。そのような中で気付かされたのは、語学や語学教育、そして文化といった事柄が、実はいつも社会の中心にあって、私たちの将来を担う政治的、経済的な問題解決に不可欠な要素だということです。

歴史、文化の理解や語学教育なくして、戦争やあらゆる社会問題の解決、また SDGs の達成は不可能だと考えています。「京都外国語大学日本語・日本語教育研究会」と「京都外国語大学カルチュラル・スタディーズ研究会」の領域を越えた学際的な交流は、他の学会などではなかなか見ることのできない言語文化研究のあるべき姿だと自負しておりますが、このような地道な研究活動が、日常の様々な問題解決の大きな一歩となることを祈るばかりです。

10 年の研究活動と 8 年間の会誌発行を可能にしたのは、ご支援をくださった研究発表者の皆様、京都外国語大学国際言語平和研究所をはじめとした大学関係者の皆様、その他多くの方々に深く感謝申し上げます。これからも学術性を高めながら、本研究会誌が未来の研究や現実の問題解決に役立てることができるよう、今後も邁進していく所存です。

カルチュラル・スタディーズ研究会　会長
「国際言語文化学会　日本学研究」編集委員　辰巳　遼

国際言語文化学会日本学研究第 8 号
目次

江戸期から現代までの日本社会における登山の動機
―高尾山・筑波山を事例とし、観光の観点から―
…… 堀口朋亨・村山弘太郎・影浦亮平 …… 1

1860 年代後半の日米間における武器移転をめぐって
―南北戦争から戊辰戦争へ―
…… 布施　将夫 …… 17

日本語の配慮表現の機能について
―品詞をはじめとする形式分類から―
…… 辻　周吾 …… 33

外国人留学生における日本語の発音の問題について
…… 山崎　誠 …… 51

日本語学習者を対象とした自己紹介シートの作成
―オンラインツールの利用の試み―
…… 佐古恵里香・山内信幸 …… 61

中国人留学生の就職活動に関する考察
―日本語の自己 PR 文の特徴について―
…… 戸田　あゆみ …… 75

International Society of Language and Culture
Japanology　Eighth issue

Motives for Mountain Climbing in Japanese Society from the Edo Period to the Present Day:
The Case of Mt. Takao and Mt. Tsukuba from the Perspective of Tourism
…… Tomonaga HORIGUCHI・Kotaro MURAYAMA・Ryohei KAGEURA …… 1

Global Weapons Trade Between the United States and Japan:
From the Civil War to the Boshin War
…… Masao FUSE …… 17

The Function of Japanese Expressions of Consideration:
From the Viewpoint of Formal Classification with Parts of Speech
…… Shugo TSUJI …… 33

Some Issues in Japanese Pronunciation of Foreign Students
…… Makoto YAMAZAKI …… 51

Creating a Self-Introduction Sheet for Learners of Japanese:
An attempt to make use of online tools
…… Erika SAKO・Nobuyuki YAMAUCHI …… 61

A Study on the Job Hunting of Chinese Students
-About the characteristics of self-PR sentences in Japanese-
…… Ayumi TODA …… 75

江戸期から現代までの日本社会における登山の動機
－高尾山・筑波山を事例とし、観光の観点から－

Motives for Mountain Climbing in Japanese Society from the Edo Period to the Present Day:
The Case of Mt. Takao and Mt. Tsukuba from the Perspective of Tourism

堀口　朋亨
村山　弘太郎
影浦　亮平

Summary

Mountaineering based on mountain worship has long been practiced in Japan. For example, in 1751 through 1763, approximately 200,000 people visited Mount Oyama every year with both religious and recreational purposes. Mountaineering in the Edo period was conducted through the continuous involvement religious groups called 'Ko'. Small shrines (Yashiro) are placed at the summits of some mountains in Japan. In addition, some mountains have temples and shrines at their foot. Mountains are not just a place to enjoy the scenery. After the Meiji Restoration, the Wonder Vogel culture was introduced to Japan from Germany. It was active in Europe before World War II, but in Japan it spread after the War. This is one of the reasons why many university students from the 1960s to the 1980s were mountaineering enthusiasts. Mountaineering in Edo period and mountaineering in the Wonder Vogel culture after the World War II were ideologically different. In Japan, however, they have been consumed as the same purpose.

From this perspective, this paper examines mountaineering tourism, using the case studies of climbing Mt Takao and Mt Tsukuba as examples.

【キーワード】観光、登山、講、人間観、ワンダーフォーゲル

1.　はじめに

日本においては山岳信仰に基づいた登山が古くから行われていた。江戸時代には、相模国の大山、駿河国・甲斐国の富士に対して人々が「講」を組織して登山を行っている。たとえば、大山講では、「宝暦年間（1751 年から 1763 年）には、主に関東各地

から信仰と行楽を兼ねた人々が年間 20 万人ほども参詣した」[1] とされている。江戸期の登山は、信仰を介在とした「講」と呼ばれる集団に対して人々が継続的に関与をすることで行われていた。日本人の登山文化は、明治維新以降に急に発現したものではなく、このような歴史の延長線上にあることを忘れてはならない。我が国では名山と評価され、観光客が訪れる山々の多くには、麓や山中に寺社が存在し、山頂には社が存在しているのである。我が国においては、山は、単に風光を愛でるだけの存在ではないのである。この歴史的蓄積に加えて、明治維新後は、ドイツからワンダーフォーゲル文化が流入し、「部」や「サークル」や「会」という集団を結成した人々が登山を行うようになった。ワンダーフォーゲル活動は、欧州においては第二次世界大戦以前に活発であったが、我が国においては戦後に広がっていったのである。これが、60 年代（団塊の世代[2]）から 80 年代に大学生であった世代の人たちに登山を愛好する人が多くいることの背景の一つであるといえる。とすると、戦後の登山ブームには思想的背景も内包されているといって良いであろう。

本論文はこのような視角に立ち、人々が登山観光を行う動機に着目して、高尾山と筑波山への登山観光を事例として取り上げながら考察を進める。

2. 近年における登山の動向

近年は登山ブームのただなかにあると言われている。しかし、時系列データを眺めていくと、登山者数は大きく増減を繰り返している。日本生産性本部の『レジャー白書』に依れば、1990 年代から 2002 年ごろまでは、800～900 万人の付近であったものが、2003 年から 600 万代に落ち込み、2006 年から 2008 年までは、500 万人代後半にまで減少してしまう。それが 2009 年ごろからの「山ガール」ブームによって、2009 年には 1230 万人に増加し、2010 年には 1070 万人を数えるようになる。「山ガール」とは、登山に最適化された服装に拘らず、ファッションを楽しむためにトレッキングや近隣の登山を楽しむ女性を指す言葉であり、以前の常識では考えられなかった登山時にスカートを履くことさえもあった。このブームの背景を、萩原浩司[3]氏が日刊 SPA の

---

1 神奈川県「大山魅力再発見「平成大山講」プロジェクト　体感！悠久の歴史・安らぎの霊峰大山」
https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ph7/cnt/f7631/p1202565.html（2023 年 1 月 30 日閲覧）

2 内閣府によると、昭和 22（1947）年～24（1949 年）年生まれの世代。
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2008/zenbun/html/s1-1-6-01.html
（2023 年 1 月 30 日閲覧）

3 山と溪谷社『ROCK&SNOW』編集長（2015 年当時、現在は特別編集主幹、公益社団法人日本山岳会常務理事）

記事で、

> *山ガールのトレードマークといえるアイテムが、山スカート。これを広めたのがアウトドア・スタイルクリエイターの四角友里さんです。彼女が山スカートと出合ったのは 2004 年。ニュージーランドでのトレッキング中、スカートをはいた女性が、器用に着替えをする姿を見かけたそうです。かわいらしい見た目もさることながら、サポートタイツを下にはけば、歩きやすくトイレや着替え時に便利で、体形もカバーできるなど、女性にとっては利便性が高い。次第に雑誌に取り上げられるようになると、山スカートをはく女性が増え、登山者たちにとっては徐々に見慣れた光景になっていきました。2009 年頃、ついに山道具店にもスカートが並び始め、女性向け登山誌も相次いで創刊。この年に登山者以外にも一気に山ガールが認知されたといえそうです。*[4]

と説明している。登山人口の急激な増加を促した「山ガール」は、2010 年のユーキャン新語・流行語大賞の候補 60 語に選出されている[5]。しかし、登山という行為は肉体的な試練を伴うものであり、単なるファッションを楽しみたい人にとっては、過大な負担であったがためにブームは終焉し、その終焉と共に登山人口は 650 万人程度のそれ以前のトレンド線の延長上の数字に戻ることとなった。

「山ガール」現象は一時的なものに過ぎないが、時系列データの実数から傾向を見出すと、2000 年ごろまでは 850 万人前後が登山を楽しんでいたが、2010 年付近になると 200 万人近く減少してしまったということが分かる。これは、ある時点に突然、時間やお金を消費する対象として、多くの選択肢の中から登山が選好されなくなったと言えなくもない。この疑問点を解明するために、登山を促す要因となり得る登山ブームについて検討してみたい。

登山ブームは、「山ガール」以前にも何度か起きており、山形俊之の整理によると、所説はあるが表 1 に示す通り 3 度ほど起きていたとのことである。しかし、3 名の分類に共通しているのが、60 年代に一つのブームがあったという事である。60～70 年代に成人を迎えていた世代と言えば、団塊の世代と言われる世代である。

---

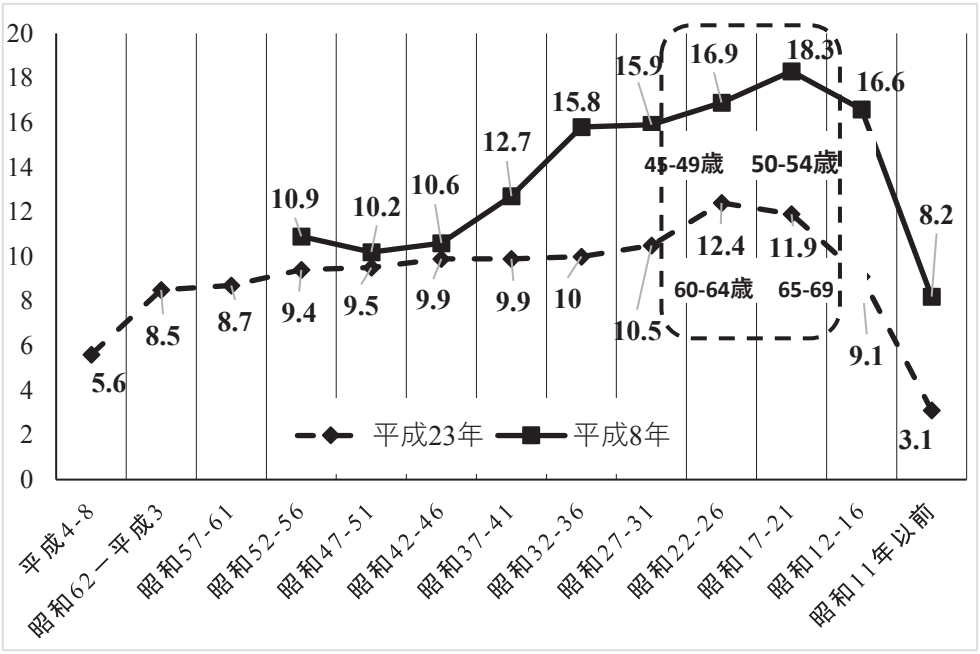
[4] 日刊 SPA「増える「〇〇女子」。ブームの裏には企業努力も」（2015 年 6 月 13 日）
https://nikkan-spa.jp/869531（2023 年 1 月 30 日閲覧）
[5] 自由国民社「第 27 回 2010 年 授賞語」
https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00027（2023 年 1 月 30 日閲覧）

表１：登山ブームの諸説

羽根田治説（フリーライラー）	
第 1 次ブーム	1920 年頃（1921 年　槇有恒がアイガー東山稜初登攀） ～1938 年（国家総動員法公布）
第 2 次ブーム	1950 年代（1956 年　日本山岳会隊がマナスル初登頂） ～1970 年代
第 3 次ブーム	1980 年代後半または 90 年代初頭～現在
菊池俊朗説（毎日新聞社記者）	
第 1 次ブーム	1950 年頃～1960 年頃　戦後登山ブーム
第 2 次ブーム	1963 年～1970 年頃　大衆登山時代
第 3 次ブーム	1990 年代初頭～現在
神谷有二説（『山と渓谷』編集長）	
第 1 次ブーム	1960 年頃　日本山岳会隊がマナスル初登頂
第 2 次ブーム	1994 年頃　テレビ番組による中高年日本百名山ブーム
第 3 次ブーム	2007 年頃～現在　マスコミが格好良く登山を取り上げ始めた

出所：山形俊之（2013, p.191）より作成

図 1：出生年別「登山・ハイキング」の行動者率（平成 8 年、23 年）



出所：総務省「統計トピックス No.96」（2016,　p.3）[6]

[6] 総務省「統計トピックス No.96」

表 2：年齢 5 歳階級別スポーツの種目の行動者率の順位（平成 23 年）

	一位	二位	三位	四位	五位
15～19 歳	ボウリング	ウォーキング・軽い体操	ジョギング・マラソン	バスケットボール	サッカー
20～24 歳	ボウリング	ウォーキング・軽い体操	ジョギング・マラソン	野球	サッカー
25～29 歳	ウォーキング・軽い体操	ボウリング	ジョギング・マラソン	器具を使ったトレーニング	スキー・スノーボード
30～34 歳	ウォーキング・軽い体操	ボウリング	ジョギング・マラソン	水泳	サイクリング
35～39 歳	ウォーキング・軽い体操	ボウリング	水泳	サイクリング	つり
40～44 歳	ウォーキング・軽い体操	ボウリング	水泳	サイクリング	つり
45～49 歳	ウォーキング・軽い体操	ボウリング	器具を使ったトレーニング	サイクリング	**登山・ハイキング**
50～54 歳	ウォーキング・軽い体操	ゴルフ	器具を使ったトレーニング	**登山・ハイキング**	ボウリング
55～59 歳	ウォーキング・軽い体操	ゴルフ	**登山・ハイキング**	器具を使ったトレーニング	つり
60～64 歳	ウォーキング・軽い体操	**登山・ハイキング**	ゴルフ	器具を使ったトレーニング	つり
65～69 歳	ウォーキング・軽い体操	**登山・ハイキング**	ゴルフ	器具を使ったトレーニング	つり
70～74 歳	ウォーキング・軽い体操	**登山・ハイキング**	器具を使ったトレーニング	ゴルフ	サイクリング
75 歳以上	ウォーキング・軽い体操	器具を使ったトレーニング	**登山・ハイキング**	ゴルフ	ゲートボール

出所：総務省「統計トピックス No.96」（2016,　p.3）[7]

https://www.stat.go.jp/data/shakai/topics/pdf/topics96.pdf（2023 年 2 月 10 日閲覧）

[7] 総務省「統計トピックス No.96」
https://www.stat.go.jp/data/shakai/topics/pdf/topics96.pdf（2023 年 2 月 10 日閲覧）

図 1 および表 2 を見ると、明らかに団塊の世代とその直後の世代が登山を好んでいることが分かる。登山は、基礎代謝を改善するのと同時に心肺機能を高めるような健康上の効能があるが、同時に肉体を酷使する身体的行為でもある。年齢を重ねれば重ねるほど、その実行には肉体面での困難が伴う。それでもそれを実行するという事は、登山をすることの効能が充分大きくなくてはならない。そしてそれは、前で示唆したように今日の健康ブームによる健康増進を直接的な動機としたものだけではないはずである。何故ならば、もし健康増進だけが目的なら、肉体を酷使しない、より効率的な運動（例えばウォーキング、水泳など）が存在しており、それを選択すればよいからである。この事実から新たな疑問が生まれてくる。すなわち、なぜ、特定の世代で登山を好む人が多いのか。その世代は何らかの経験や出来事から影響を受けているのであろうか。そして、それらからどのような動機が生まれているのかという疑問である。それらを次章で考察していく。

3. 登山動機の検討

我々は「山ガール」や三氏による登山ブームの検討から類推が可能なように、登山のスタイルは多様であり、峻険な山を山小屋などの宿泊施設を活用して登るものもあれば、日帰りで比較的低い山を登るものもある。日帰り登山の場合、大都市から近いケーブルカーやリフトの整備がなされている山々の方が観光登山客に対する求心力がある。登山のスタイルが多様になれば、登山する動機にも多様性が広がると考えるが、本論文は、登山観光に焦点を当てているので、大衆化された登山行為を促す動機について注目していきたい。

3-1 史的経験からの検討

日本における大衆化された登山ブームは、第二次世界大戦の終結以降に初めて発現した事象ではない。大衆化社会という用語の定義は多くの論者[8]が議論を重ねているので、ここでは深入りをしない。しかし、本論文で「大衆化」という用語を使用するからには定義を示しておくことが必要だと考えるので、以下のように定義をしたい。つまり、大衆化社会とは、属している社会階層特有の意思に引きずられることなく、得た収入の一部を類似した傾向で支出する人がそれなりの数に達した状態であると考える。この定義から日本史を概観すると、大衆化された登山ブームは、明治維新以前の

8 例えば、オルテガ・イ・ガセットが『大衆の反逆』で描写した社会である。

江戸期において既に始まっている。

徳川家康による開幕とそれ以降、数度の例外を除いた平和な世の中は、階級に関係なく、人々に余暇を楽しむゆとりを与えることとなった。余暇で消費される財・サービスは多様であったが、なかでも旅行が非常に盛んとなった。例えば、伊勢神宮への参詣旅行は「お蔭参り」と称され、江戸期を通じて爆発的ブームが周期的に発生していた。三重県環境生活部文化振興課県史編さん班は、

> *山田三方会合所の記録や本居宣長の『玉勝間』によれば、宝永 2 年の群参は 50 日間で 362 万人に達し、京都から起こった群参の波は、東は江戸、西は現在の広島県や徳島県にまで及ぶほどでした。次の明和 8 年の「おかげまいり」の総人数は、不明確ですが、宮川の渡し人数から見ても 200 万人以上に達し、東北地方を除く全国に及んだと言われています。さらに、文政 13 年の場合は、約 500 万人が伊勢へ伊勢へと押し寄せています*[9]

と解説している。この旅行ブームが当時の日本社会において大きなインパクトを持つことは、総人口と参拝者数を対比すれば瞭然である。当時の人口については、いくつかの推計が存在しているが、内閣府の白書[10]は、鬼頭宏説の約 3100～3300 万人を採用している。「お蔭参り」は最も多くの人々が参加した旅行であったが、他の地域・地点の訪問・参詣を目標とした旅行も盛んであった。多くの人が参加したものでは、「富士参り」「大山参り」などを例として挙げることができよう。先に論じたように「大山参り」の基盤となった「大山講」には、宝暦年間で年間、20 万人も参加していたのである。「富士参り」「大山参り」はともに、登山を伴う自社の参詣を軸とした旅行であった。登山の動機の史的背景を検討するに相応しい対象だといえよう。

江戸期の登山は、「講」と呼ばれる宗教的な要素を持った組織体を基盤としていた。それは、例えば富士登山であれば、「「江戸八百八講、講中八万人」と称されるほど、江戸市中には数多くの富士講」（松井、卯田 2015、p.896）が存在していたのである。富士は、古代から信仰の対象であったが、角行藤仏（1541－1646）の 5 代目月行の弟

9 三重県環境生活部文化振興課県史編さん班「多くの民衆伊勢へ「おかげまいり」」 https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/kenshi/asp/arekore/detail.asp?record=85（2023 年 2 月 15 日閲覧）

10 内閣府「平成 16 年版　少子化社会白書」 https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2004/pdf_h/pdf/g1010100.pdf（2023 年 2 月 15 日閲覧）

子である食行身禄（1671－1733）によって教義が固められ『三十一日之巻』という経典が形成された（奥村 2006)。この信仰は、仏教でも神道でもない独自の教義を持っていたとされ（奥村 2006)、当時の幕府政権から統治上、歓迎されたものではなかった。それは加持祈祷だけではない「新たな実践倫理道徳」（温 2016）を持っていたからである。富士講は行事によって、人々の生活の中で規範化され、夏には構成員が登山する富士登拝と定期的に講員が集まる月拝みがあった（川合 2001)。富士山への登山では、御師と呼ばれる案内や宿泊施設を運営し、札を配る宗教者が構成員の支援を行っていた（川合 2001)。この富士講と呼ばれる組織は長らく維持され、数は減ったといえども平成 28 年においても、遠く離れた伊勢地方で講による登山が組織され、実施されている（松田 2018)。ただし注意が必要なのは、この行為が純粋な信仰心からのみ為されたものではなかったという点である。谷釜が「富士山と大山の「セット化」の背景には、信仰という側面だけでは説明しきれない複合的な要素が働いており、そこに娯楽性が見え隠れしていた」（谷釜 2019, p.7）と指摘しているように、実際旅程には娯楽の要素もあり、まさに観光旅行の一形態とみなすことが可能な内容であった。そもそも、信仰のみが動機であれば、異なった教義を持つ宗教的象徴への参詣のセット化などはあり得ないはずである。そこで、谷釜が旅程で異なった宗教的対象がセット化された事例として挙げていた、大山登山を目的とした「大山講」も検証していきたい。

相模国に所在する大山も富士と同じように古来から崇拝の対象となっていた。良弁により神宮寺として雨降山大山寺が建立され、鎌倉期においては、幕府から阿夫利神社が寺領をあたえられており（菅根 2004)、時の政権から尊崇されうる力を持っていた。以降も、大きな宗教的影響力を持っていたが、徳川家康が、「(大山寺）定[11]」を公布し、真言宗の僧以外を下山させるなどして真言宗寺院としての山門改革を行い、100石の寺領が与えられるなど時の政権と深い関係を維持し続けていた。

大山山麓には「御師」と呼ばれる人々が居を構えており、そこが参拝者の宿泊所と

11 『大山寺定』（慶長十四年、1609 年）
（『慶長十四年八月　大住郡大山寺別当八大坊寺中結界につき定書』、『徳川家康掟書』）
http://musictown2000.sub.jp/history/ooyamaderasadame.htm（2023 年 2 月 15 日閲覧）

定
一　　従前不動上者、永代清掃結界之地堅可相守事、
一　　以前妻帯并山伏在家居住之屋敷者、別当八大坊清僧之分申付事、
一　　十二坊ニ自前ゝ（ママ）付来諸檀那并山林諸堂散銭等、一物無相違可為
　　清僧進退事、
　　右守此旨、向後偏可有仏法興隆者也、
　　慶長拾四年八月廿八日（家康国印）

なっていた。江戸時代後期になると、参詣者の増加に伴い 166 人もの御師がいたとされる（田中 1982)。御師は、札を配り、土産（薬、杓子、箸）を渡し（菅根 2004)、参詣の手助けをしたのである。その道中は、古典落語の「大山詣り」に描かれるほど人気を博し、「山野の茶店はその地の産物をだして商ふ『東海道名所図会』(1797 年刊)」（田中 1982, p.158）という盛況ぶりであった。ここでも、信仰だけではない観光的要素の存在がうかがわれるのである。

我が国では、何らかの目的のもと人が集まり「講」が組織されたのは歴史が示す通りであるが、参詣登山を目的とした「講」は、信仰心だけではなく、太平の世を満喫するための方便として活用していたともいえよう。「講」は、町や村の共同体の中に結成されたものであり、その共同体が生み出した慣習の中で運営されていたことも注意が必要であろう。

3-2　人間観からの検討

戦後の登山ブームは、GHQ の指示による大学教育における体育科目の正課化と関連しているといえよう。なぜならば、正課化により登山の体験を持つ人々が急激に増えたからである。GHQ の指示は、都市部に所在する多くの学生を抱える私立大学において、担当教員の不足や科目編成上の課題を生じさせた。それらの問題の克服策として、大人数に一括して講義を受講させることが可能なワンダーフォーゲルが活用されたのである。具体的事例を紹介すると、明治大学では、体育実技の一単位を履修時間として 45 時間と定めていたが、ワンダーフォーゲル科目を活用すると、5 泊 6 日の野外実習（1 日 6 時間、計 30 時間）と教室での講義（15 時間）と組み合わせることで単位認定が可能であった（城山 2015)。日本におけるワンダーフォーゲルの爆発的拡大はこのような背景があったのである。

ワンダーフォーゲルはルソー主義的であって、高度に発展した近代社会に対する批判を内包しているとされる。ルソー自身、山登り好きであり、とりわけ彼の『新エロイーズ』の山岳描写は、ヨーロッパのひとびとの山岳に対するイメージをポジティブなものに変える要因のひとつになったことは知られている。そして、こうした登山愛好は決して彼の単なる趣味ではなく、彼の理論的な思想との結びつきがある。『社会契約論』の中で、彼はホッブズに始まる社会契約論の枠組み、すなわち自然状態と社会状態という思考枠組みを踏襲しつつ、自然状態を、人間が最も自由である状態だとして理想の状態と考えた（ルソー 2008)。社会状態においては、逆に他人との関係の中で拘束され不自由となり、苦しみを感じることになる。ただし、自然状態に戻れず、

社会状態の中にいるしかないという前提に立って、社会状態の中の人間にある新しいタイプの自由とは何なのかというのがルソーの基本的な関心である(そしてそれが「一般意志」と呼ばれるものである)。しかしながら、ルソーの後世の読者たちには、自然状態にこそ人間の理想的な状態があるという発想のほうが好まれ共感され、ルソーの思想と言えば「自然に帰れ」であると要約されていることになる。そして、人が本来あるべき姿に立ち返ることを目指す思想が欧州で広く共感を集め、それがドイツ文化圏において、人工的なものに対して「自然であること」により大きな価値を置くLebensreform（生改革運動）（南 2017）になったのである。生改革運動は、⑴自然療法、⑵菜食主義、⑶身体への関心へとつながり、それが「自然＝美しい身体＝痩身、反自然＝醜い身体＝肥満」（南 2017, p.39）という考えにつながり、体を鍛えていくことを美徳と考えるようになる。それの具現化が、ワンダーフォーゲルである。開始された直後のワンダーフォーゲル活動は、短いもので2週間、長いものでひと月に及ぶ徒歩旅行であったとされる（小川 2002)。しかしながら、我が国ではその思想が必ずしも移植されたわけではない。ワンダーフォーゲルの先駆けは内務省の外郭団体である「奨健歩行会」であるとされるが、それはドイツロマンにあこがれる人々による「借名」（城山 2015, p.10）に過ぎないという指摘がある。それは、ワンダーフォーゲルが山岳部のように険峻な山々を人が「征服」「克服」することを目的とせずに、ハイキングのように楽しむことに主眼が置かれていたからである。実際、大学の部活動において、山岳部とワンダーフォーゲル部には方向性の相違がみられる。例えば、戦後の京都大学山岳部では、山岳派、冒険派、ワンダーフォーゲル派の対立があり、山岳部から後者二つが独立して各々創部している。京都大学ワンダーフォーゲル部の結成趣意書には、「・・・山登り、スキーは、現に山岳部およびスキー部があるが、これはスポーツ登山であり、スポーツスキーである。本部が意図するものは、レクレーションとしての登山でありスキーであり徒歩旅行である。」（城山 2015, p.92）とある。つまり、我が国におけるワンダーフォールゲルは、登山という行動を通じて人と交流することを目指した運動であったのである。特に部活よりも制約の小さなサークルでの活動が本格化して以降、ワンダーフォーゲルサークルは、男女の出会いの場としても機能していたのである。つまり、我が国では、ドイツのそれとは反対の性格を持った、人間集団の中で形成される一般意思を前提とした活動であるといえる。

ワンダーフォーゲル活動は、一般意思、特殊意志のどちらが作用して人が行為に及んでいるのかという視角に立つと、前節で説明した「講」というコミュニティが基盤となった登山と本質的には近いのではないのか。登山という行為という同一性だけで

はなく、コミュニティの総和を反映という同一性もあると考える。つまり、登山という行為が身体的なメリットをもたらすだけではなく、コミュニティの成員としてのメリットを享受しているのではないかと想起できるのである。そうすると、特定の年代の人々にとっては、自身の経験から登山がコミュニティの一員としてアイデンティティを確立する機能を保持し続けているのではないであろうか。

4.　事例研究

登山ブームをもたらしたものの一つとして深田久弥の『日本 100 名山』(1964) がある。深田は、克服が困難ではあるが、美しい景色が広がっている山々を紹介し、多くの登山愛好家を生んだ。この数年間、NHK で「グレートトラバース 1、2、3」という番組名で放送されている[12]アドベンチャーレーサーの田中陽希による約 3 年半にわたる日本の合計 301 座の人力のみの移動（約 1 万キロ）・登山は、どちらかというとドイツのワンダーフォーゲル活動の流れをくむものとみなすことができる。しかしながら、我が国で行われている登山の多くは、江戸期から行われている旅行を楽しみ人と交流のきっかけとしての登山である。その証拠となるが、安近短の 3 拍子がそろった山への登山が人気を博していることである。関東圏で登山者が非常に多い山と知られているのが、高尾山と筑波山である。登山地図 GPS アプリ「YAMAP」を運営する株式会社ヤマップが発表した 2021 年の登山ランキングでは、1 位：高尾山、2 位：塔ノ岳、3 位：筑波山、4 位：大山、5 位：御岳山となった[13]。ヤマップの調査では、興味があり、経験もある登山の一位に「日帰り登山」、二位に「低山登山」、三位に「初心者でも登りやすい登山」が入っており[14]、ここでも自然を克服して肉体を鍛え上げる登山とは異なったスタイルの人気が高いことがわかる。そこで、事例研究では、東京から近く、日帰り登山のできる高尾山と筑波山を取り上げたい。

4-1　高尾山

高尾山の観光入込客数は、正確な資料が存在しないが、約 250 万人[15]から約 350 万

12　日本百名山一筆書き
https://www.greattraverse.com/（2023 年 2 月 15 日閲覧）
13　株式会社ヤマップ、プレスリリース（2021.12.27）
https://corporate.yamap.co.jp/news/2021-12-27/（2023 年 2 月 15 日閲覧）
14　株式会社ヤマップ、「ビッグデータの分析からみた現代の未組織登山者の志向と動向」
https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/Portals/0/images/contents/syusai/2022/tozankensyu/1-1matsimoto.pdf（2023 年 2 月 15 日閲覧）
15　八王子市『(仮称) 高尾の里拠点施設基本計画』(平成 17 年)
https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kankobunka/006/p003199_d/fil/takaonosato_plan2.pdf（2023 年 2 月 15

人[16]であると推定される。都会の新宿駅から最寄り駅の高尾山口駅まで約 50 分である。

図 2：高尾山薬王院有喜寺（左）と高尾山冨士浅間社（右）



出所：筆者撮影

高尾山は古くから信仰の対象とされていた。行基による開基が天平 16 年（744 年）とされるが、興隆し始めていくのは、北条氏康が高尾山に寺領を寄進したことに代表される、有力豪族が大檀越として後ろ盾になった 16 世紀後半になってからである（外山 2011）。江戸期は、庶民からの信仰だけではなく、紀州徳川家、尾張徳川家、大名、旗本とも関係を結ぶことにも成功している。

高尾山の飯縄大権現は、江戸期から「別してハ開運 火防 息災 延命を司り給う神なり（高尾山薬王院明細書付）」（外山 2011, p43）とされ、現在でも開運・厄除・病気平癒・学問成就などの現世利益をもたらすとされる。富士や大山への旅程に、高尾山が組み込まれることもあったのである（谷釜 2019）。

日閲覧）

16 高尾山の入り込み数の推移を京王電鉄及び高尾ビジターセンターの来館者数で見ると、270 万人から 280 万人程度で推移していた京王高尾山口駅の乗降者数は、平成 19 年に 300 万人を越え、平成 23 年の約 350 万人まで増加している。高尾ビジターセンターの来館者数も、平成 18 年の約 2.9 万人から平成 19 年は 16 万人と 5 倍以上増加しており、平成 23 年では 30 万人を越えている。（平成 24 年度総合的山岳環境保全対策推進事業実施業務報告書 p.75）
https://www.env.go.jp/content/900493564.pdf（2023 年 2 月 15 日閲覧）

現在の高尾山への登山は、観光的要素を強めており、ケーブルカーやリフトで登山し、ほとんど苦労なく山頂に至ることができる。ケーブルカーは、片道 490 円で、6 分おきに運航され、標高 472m の高尾山駅まで一気に登る[17]。薬王院の標高は約 500m、高尾山頂の標高は 599m であるので、かなりの距離をスキップすることができる。実際、ケーブルカーの高尾山駅から薬王院まで 20 分、薬王院から山頂まで 30 分しかかからない[18]。途中、お茶屋が複数あるので、食事をとることも、休むことも可能である。そのような快適な登山であるので、軽装の観光客が多数訪れているのである。調査で現地を訪れた際も、友人と共に登山している女性の観光客が多数いたのが目についた。山頂までの旅程は、数時間はかかるので、友情をさらに深めるには十分な時間となり、時間が長すぎないことで衝突する危険性も少ない。新宿から高尾山口まで京王線を用いれば、往復 780 円、ケーブルカーは往復割引で 950 円、つまり 2000 円以下で肉体的負担が小さく、歴史がある、自然豊かな登山を味わうことができるのである。これが高尾山人気の背景であろう。

4-2　筑波山

筑波山の観光入込客数は、平成 27 年が約 197 万人、平成 28 年が約 222 万人、平成 29 年が約 236 万人、平成 30 年が約 269 万人、令和元年が約 246 万人、令和 2 年が約 197 万人であった[19]。筑波山は都会からやや離れている。秋葉原駅からつくば駅まで約 45 分、そこからシャトルバスで約 35 分かかる。料金は、ケーブルカー代金も含まれた「つくば切符」を用いれば 4380 円である。

女体山と男体山をご神体とする筑波山神社は『延喜式』に記述がある歴史ある神社であり、徳川家康が寺領 500 石を寄進している（猪股他 2018）。大山などと違い、「講」組織が発達しなかったのは、「西の富士、東の筑波」と称されるような有力な霊山ではあるが近隣が開けている山であった為だとされる（西海 1979）。さらには「門前町に一般客相手の遊女屋や旅龍が盛んに商いをしていた」（猪股他 2018 p.186）とあり、江戸期から観光的要素が強かったのが見てとれる。

---

17 高尾山登山鉄道
https://www.takaotozan.co.jp/timeprice/（2023 年 2 月 15 日閲覧）
18 高尾山マガジン
https://mttakaomagazine.com/trails/1st（2023 年 2 月 15 日閲覧）
19 つくば市『第 3 次つくば市観光基本計画』2022 年 4 月、p.28
https://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/017/814/dai3jikankoukihonkeikaku.pdf（2023 年 2 月 15 日閲覧）

図 3：筑波山神社男体山御本殿（左）と筑波山登山道入り口（右）



出所：筆者撮影

筑波山は、深田が選定した日本 100 名山にも選ばれており、麓から登山するとかなり険峻な登山道も存在する。しかしながら、筑波山の山頂である女体山（標高 877m）と男体山（標高 871m）の標高であるところ、ケーブルカーの筑波山頂駅の標高が約 800m[20]であるため、たった 15 分程度で山頂に達してしまう。途中、高尾山と同じく飲食のできる茶屋があるので、体力がない人でもゆっくり登山をすることができるのである。実際、現地調査をしていた折には、子供を含む家族連れや高齢者のグループ登山客がたくさん訪れていた。多くの登山客にとって、筑波山の登山は、高尾山の登山と同じく、肉体を鍛えるというよりは、コミュニケーションを楽しむ観光登山といえよう。

5. さいごに

人が何らかの行為をなす原動力としては、各種の「欲望」が挙げられることが多いが、それが最初に挙げられるのは、現代社会では、資本主義が社会に根付いていてお

[20] 筑波観光鉄道株式会社
http://www.mt-tsukuba.com/（2023 年 2 月 15 日閲覧）

り、「欲望」がその仕組みを動かす動力になっているからである。しかし、人類社会においては、資本主義はたかが約 200 年の歴史を持つにすぎない。産業革命以前の社会においては、人類を突き動かす有力な原動力として、「信仰」や「思想」も大きな力を持っていたことは言うまでもない。さらには、人の意志は、社会に形成されている諸集団の中で形成されたものと、自然界の一要素として形成されたものがあり、それらが個々の行為にどのような影響を及ぼしているかについての検討も必要であろう。これらの視角を前提とするのであれば、登山観光という人の行為の中にも、意識的・無意識的にこれらが起因となっており、史的側面、人の意志の形成の側面から登山観光を検討することは大きな意味を持つであろう。本研究は、そのような視角からの研究として、第一歩としての意味を持つ。

謝辞

本研究は、京都外国語大学学内共同研究に採択された研究課題「商人・企業の CSR 活動の史的解釈－変革期の地域や祭に対する貢献に注目して－」の研究費を使用している。京都外国語大学の支援に謝意を表します。

参考文献

猪股泰広, 曽斌丹, 岡田浩平, 加藤ゆかり, 喜馬佳也乃, 松村健太郎, 山本純, 劉博文, 松井圭介 (2018)「筑波山における観光空間の形成と変容 : 山麓門前町の地域変化に着目して」『地域研究年報』40, pp.181-218, 筑波大学人文地理学・地誌学研究会.

大城純男 (2010)「日本百名山と観光」『札幌大学総合研究』1, pp.121-129, 札幌大学.

小川哲哉 (2002)「ドイツ青年運動とロマン主義思想ーフレーベルの教育思想との関連性」『人間教育の探究』15, pp.37-54, 日本ペスタロッチー・フレーベル学会.

奥村南 (2007)「富士講の歴史と地域展開：東京都練馬区小竹町茅原浅間神社江古田富士」『大東アジア学論集』7, pp.103-106, 大東文化大学大学院アジア地域研究科.

温莉莉 (2016)「富士信仰の大衆化に対する一考察 : 江戸時代における富士講を中心に」『東アジア文化研究』63, pp.143-162, 國學院大學大学院文学研究科.

川合泰代 (2001)「富士講からみた聖地富士山の風景」『地理学評論』4 (6), pp.349-366, 日本地理学会.

城島紀夫 (2015)『ワンダーフォーゲル活動のあゆみ』同成社.

菅根幸裕 (2004)「近世・近代の東総における相模大山信仰--参詣講の再編成をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』115, pp. 299-323, 国立歴史民俗博物館.

田中宣一 (1982)「相州大山講の御師と檀家 : 江戸末期の檀廻と夏山登拝をめぐって」『日本常民文化紀要』8 (2), pp.157-191, 成城大学文芸学部.

谷釜尋徳 (2019)「近世後期における江戸庶民の富士詣の実際－富士講登山に着目して－」『スポーツ健康科学紀要』16, pp.1-14, 東洋大学スポーツ健康科学委員会.

外山徹 (2011)『武州高尾山の歴史と信仰』古今書院.

西海賢二（1979）「筑波山信仰の展開とダイドウ講」宮田登・宮本袈裟雄編『日光山と関東の修験道』pp.242-263, 名著出版.

松井圭介, 卯田卓矢 (2015)「近世期における富士山信仰とツーリズム」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』124 (6), pp.895-915, 東京地学協会.

松田香代子 (2018)「伊勢湾沿岸部における富士山信仰の諸相－三重県伊勢市東豊浜町土路の富士講の富士参り－」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』63, pp.75-86, 愛知大学綜合郷土研究所.

南直人 (2017)「一九／二〇世紀転換期ドイツにおける食改革運動と身体イメージ」『女性歴史文化研究所紀要』25, pp.29-40, 京都橘女子大学女性歴史文化研究所.

ルソー, ジャン＝ジャック（2008）中山元訳『社会契約論／ジュネーヴ草稿』光文社

山形俊之 (2013)「平成登山ブームに関する一考察」『湘北紀要』34, pp.189-204, 湘北短期大学総合ビジネス学科.

1860 年代後半の日米間における武器移転をめぐって
―南北戦争から戊辰戦争へ―
Global Weapons Trade Between the United States and Japan: From the Civil War to the Boshin War

布施将夫

Summary

This article tries to examine global weapons trade between the United States and Japan in the late 1860s. The first half of it, Chapter 1, introduces Japanese recent studies and explains the kinds and numbers of western style rifles brought into Japan in the Meiji Restoration. The second half, Chapter 2, considers a German recent Japanology (Japanologie), "The Global Weapons Trade and the Meiji Restoration: Dispersion of Means of Violence in a World of Emerging Nation-States" written by Harald Fuess. As a result of it, Chap. 2 unravels a part of the flow of western arms within Japan at that time. The remaining subject is to unravel the whole picture of global arms transfer flows and to bridge the gap between global history and national histories.

はじめに

冒頭から私事で恐縮だが、2022 年 2 月上旬に NHK 大阪放送局歴史班の U 氏から番組取材の依頼をうけた。当時の同局は、約半年後に『NHK スペシャル　シリーズ幕末―グローバル国家の興亡―』（仮題）という番組の放送を予定していた。その番組内容の一環として、幕末・維新期の日本をアメリカがどう見ていたかを彼は調査中であったのだ。非常に興味深い企画であると思い、2 月 8 日に筆者の研究室でちょっとした勉強会を開いた。寒い折ではあったが、2～3 時間はかかった充実した話し合いであったように記憶する。彼が今後調査していきたいと具体的に伝えてくれたのは次の２点であった。

・南北戦争（1861-1865 年）後のアメリカ政府が持っていた東アジア戦略
・南北戦争後の余剰兵器が戊辰戦争中（1868-1869 年）の日本へ輸出された経緯

これらのうち前者についてはすでに他所で取材済みで、日米関係史のある研究者の話によると、戊辰戦争期は日米関係史研究が比較的少ない分野である、ということであった。確かにアメリカ史の一般的な概説でも、戊辰戦争期はアメリカの南部再建期（1865-1877 年）の初期にあたる。南北戦争で荒廃しきった南部（元アメリカ連合国）を再建し始めたアメリカ合衆国が、東アジア戦略までもう虎視眈々と練っているとは少し考えにくい時期でもあった。戊辰戦争末期の 1869 年 5 月になると、アメリカで最初の大陸横断鉄道が開通し、東アジア、特に中国との綿花交易を合衆国も具体的に考え始めたかもしれないが[1]。これとて日本とも戦略とも結びつき難い類推と言える。

そのため後者の項目に会話の焦点が移っていった。南北戦争と戊辰戦争の時間的な前後関係を考えるといかにもあり得そうなことだと思ったが、南北両軍の武器がどう払い下げられたのか、それらが世界にどう流通したのか、等については不覚にも何も弁えなかった。それゆえ研究室にあった和書や洋書を調べつつ、二人で検討を重ねたのである。たとえば、鈴木眞哉『鉄砲と日本人 「鉄砲神話」が隠してきたこと』洋泉社、1997 年や藤田昌雄『日本陸軍の基礎知識＜明治の兵器編＞』潮書房光人新社、2021 年、Robert Hellyer and Harald Fuess (eds), *The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation,* Cambridge: Cambridge University Press, 2020（『明治維新―グローバルな国家としての日本』）などを参照した[2]。

筆者が驚いたことに、U 氏は大きな荷物のなかに筆者の拙著ばかりか、この洋書も持参してくれていた。なお筆者が例示した二冊の和書も、いわゆる一般書でありながら、1860 年代の日本に輸入された洋式銃の種類や特徴、予想挺数などを示しており、かなり有益なものであった。ただ、これらの洋式銃、たとえばアメリカ製のスペンサーライフル銃（施条銃）がどう流通したかなどについては、この洋書のなかの第 4 章が一番くわしそうだということで二人の意見は一致した。共編者のうちの一人で、ドイツのハイデルベルク大学の歴史学教授ハラルト・フュスが執筆した論文、The Global Weapons Trade and the Meiji Restoration: Dispersion of Means of Violence in a World of Emerging Nation-States（「グローバルな武器貿易と明治維新―国民国家出現中の世界における暴力手段の拡散―」）のことである。

そこで本稿では、前述の和書の概要を簡潔にまとめ、幕末・維新期の日本における洋式銃の基本的な知識を前半部でまず確認していく。その上で本稿後半では、フュス論文をより詳細に紹介して論評しつつ、最新の日本学研究の成果がどこまで到達しているのかを評価したい。このような手法を取ることで、日本では接することが少ないと思われるドイツの日本学研究（Japanologie, ヤパノロギー）を考察できれば、本誌

『日本学研究』のレーゾン・デートル（存在意義）にも適うのではなかろうか。

「はじめに」の最後に、冒頭で触れた NHK の番組企画のその後について報告しておこう。企画は 2 月以後順調に進んだと見えて、2022 年 10 月中旬から、NHK スペシャル　ドキュメンタリードラマ「新・幕末史　グローバル・ヒストリー」（全２回）が無事放送された。それらのうち「第１集　幕府 VS 列強　全面戦争の危機」は 10 月 16 日 21 時から、「第２集　戊辰戦争　狙われた日本」は同月 23 日 21 時から放映されたのである。南北戦争や武器については第２集で取り上げられていた。世界史と日本史をつなげて新たな歴史を紡ぎだす「グローバル・ヒストリー」に関心のある方は、ぜひ参考にしていただきたい[3]。

１．幕末・維新期の日本における洋式銃

１－１　洋式銃の種類と挺数

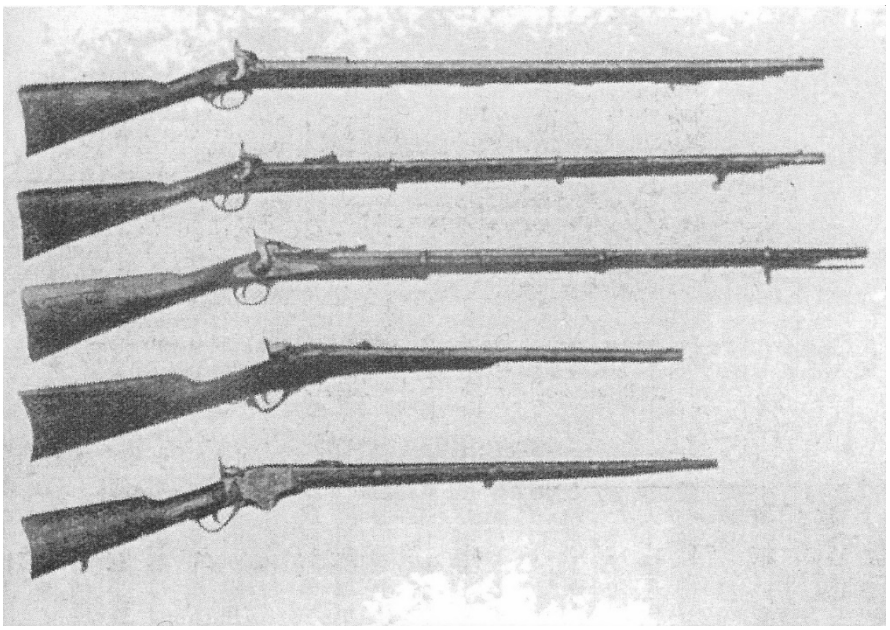
幕末・維新期の日本における洋式銃の名称は、たとえまったく同じ銃でも、時代や人物によって異なる場合が多い。以下では概ね、鈴木眞哉著『鉄砲と日本人　「鉄砲神話」が隠してきたこと』洋泉社、1997 年における表記に従いたい。当時の洋式銃を認識するうえで、現代では最も一般的な呼称を採用していると思われるからである。

当時の日本にあった洋式銃の種類としては、古いものから 1777 年式のゲベール銃（Gewehr）やヤーゲル銃（Jagtgewehr）（燧石式の前装滑腔銃）などがあった。戦国時代の火縄銃の火縄部分が火打ち石に変わったものだが、丸い弾丸を銃口から詰めて銃身内が滑らかである点は火縄銃と変わらない。19 世紀半ばになると、ミニエー銃がフランスで発明され（1846 年創始）、日本に持ち込まれた。この革新的な銃は、椎の実型の弾丸を火薬で発射する前装施条式のライフル銃である。弾丸を銃口から詰める点は変わらないが、銃身内にらせん状の溝が切られた（ライフリングされた）点と弾丸の形状が従来の銃と異なる。性能面では射程距離が伸びて、命中精度も上がった。1853 年にはミニエー銃を改良したものの、前装式のままのエンフィールド銃が、イギリスで現われた。ただしアメリカ南北戦争（1861-1865 年）中の南北両軍とも、この銃をイギリスから何十万挺も購入したため、日本に来たエンフィールド銃はアメリカ経由のものもありうると考えられる[4]。

前装式であったエンフィールド銃を、銃尾から弾丸を詰める後装式に改めたスナイドル銃も、当時の日本にもたらされた。後装式のライフル銃としてはほかに、1866 年に制式化されたフランスのシャスポー銃（後の村田銃の原型）や、ベルギーの制式銃であったアルビニー銃、ドイツで特許をえたドライゼ銃などが日本に導入された。

これらの後装銃の利点は、速射が可能になったことである。たとえば、南北戦争中に一番よく使用された前装式のスプリングフィールド銃の場合、訓練を受けた兵士でも一分間に 3 発しか打てなかった。ところが、同じ南北戦争中の後装式のシャープス銃の場合、狙撃兵なら一分間に 8 発から 10 発も打てたのである[5]。つまり、後装式ライフル銃は、火縄銃とくらべると、射程が長く、命中精度も上がり、発射速度まで速くなっていたのであった。戦場の兵士にとっては、伏せたまま発砲し、弾丸を再び装填できるようになったという点も、安全面で大きな利点になった[6]。

アメリカから日本が輸入したアメリカ製の銃も確認しておこう。まず、1858 年に創作、販売された元込式（後装式の別称）単発騎銃のスタール銃があげられる。この銃より有名なものとしては、1860 年に発明、開発されたスペンサー銃があった。同銃は後装施条（弾倉）式の七連発銃で、日本は短い小銃を騎銃として輸入したとされる。なお、南北戦争の末期に北部の補給局（the U.S. Quartermaster's Cops: ウェブ上の訳ではアメリカ陸軍需品科）は、75,000 挺以上のスペンサー銃を購入していた。ほかにも 1859 年に発売された前述のシャープス銃があり、これは、元込式（後装式）の単発騎銃であった。日本には 1859 年式と 1863 年式のものが輸入され、南北戦争中は狙撃兵用の最も正確な銃とされた[7]。アメリカから日本に持ち込まれたライフル銃は、故国での用途にかかわらず、すべて騎兵用の銃として活用された。



写真：上からミニエー銃、エンフィールド銃、スナイドル銃、シャープス銃、スペンサー銃。上の二種類は、外観が酷似しているため当時から混同された[8]。

なおアメリカが、スペンサー七連発銃や後述のガトリング機関砲のような速射式の武器の改良と生産の中心になったのは、次のような社会事情に基づくと考えられる。それは、ヨーロッパとくらべると軍事改革に反対する確固たる軍事階級がなく、工業化に反対する熟練の武器職人といった確固たる階級もなかったことであった[9]。

以上のように多様性に富んだ洋式銃はどれくらい日本に輸入されたのであろうか。正確な挺数は不明だが、鈴木が依拠した先行研究は、1863 年から 1869 年までの間に 58 万 2 千挺から 60 万挺程度、その前の 1855 年から 1862 年の間にも 10 万挺以上、合計 70 数万挺の輸入銃が日本に入ったと推測している[10]。一方、明治七年（1874 年）まで「武庫司」（東京砲兵工廠の前身）は、その当時の陸軍保有の小銃を本格的に調査した。その結果、計 18 万 1 千挺、39 種類の小銃があったとされる。すでに輸入銃が激減しているように思われるが、その後の「陸軍小銃制式」では次の銃が選出された。歩兵銃としてはアルビニー銃やスナイドル銃、シャスポー銃、エンフィールド銃が、騎兵銃としてはスペンサー銃やスタール銃、シャープス銃（3 種ともアメリカ製）が選ばれたのである[11]。なお 1875 年に訪日したアメリカ人将校エモリー・アプトンは、政府軍がエンフィールド銃やスナイドル銃で武装し、東京の兵器廠で前装式滑腔銃がアルビニー型後装銃へ急遽改造中であったことを実際に観察している[12]。

１－２　各藩における洋式銃の概数―戊辰戦争の場合

戊辰戦争とは、1868 年（戊辰の年）から 1869 年まで続いた新政府軍（討幕派）と旧幕府側（佐幕派）との戦いの総称である。そのなかには京都南郊の鳥羽伏見の戦いや彰義隊の戦い（上野戦争）、越後長岡藩との北越戦争、会津藩との会津戦争、榎本武揚政権との箱館戦争などが含まれる。新政府軍では、薩長土肥と略称された薩摩藩や長州藩、土佐藩、肥前佐賀藩の軍が中心となった。一方旧幕府側では、幕府軍のほかに奥羽越列藩同盟の諸藩、たとえば会津藩や仙台藩、庄内藩、越後長岡藩などの軍が中心となる。ではこれら諸藩の軍は、戊辰戦争期に洋式銃をどれほど保持していたのであろうか。以下ではその概数を把握していきたい。

洋式銃を「持てる藩」とされた討幕派の諸藩にまず注目してみよう。周防と長門の防長二州からなる長州藩は、戊辰戦争の勃発までに施条銃（ミニエー銃）13,300 挺とゲベール銃 4,000 挺を購入していた。新政府最大の雄藩である薩摩藩は、戊辰戦争の翌 1870 年度の兵部省への届け出によれば、次のような銃を保有していた。施条銃（エンフィールド銃）16,015 挺や撃針銃（シャスポー銃）4,267 挺、スペンサー七連発銃

1,050 挺である。薩摩藩の場合、前装式ライフル銃から後装式ライフル銃への移行の努力がうかがわれる。洋式化に最も熱心だったとされる肥前佐賀藩は、1868 年に会津若松城を攻撃した時、スペンサー七連発銃 2,000 挺やエンフィールド銃 1,300 挺、（アメリカの）レミントン銃 300 挺を有していた[13]。同藩の場合、上野戦争でアームストロング式後装砲も活用したとされる。ただ、洋式銃を「持てる」討幕諸藩といえども、洋式銃を数十万挺までは装備できず、数万挺以下の規模で有していたのであった。

一方、佐幕派のなかでも代表的な会津藩は、1868 年の若松城の開城時、前装式燧石銃が主体の洋式銃を 1,170 挺、和銃（火縄銃）を 1,811 挺、新政府側に引き渡した。盛岡の南部藩も降伏時に、火縄銃を主とし、ゲベール銃が次に多く、後装式に改良されたミニエー銃を若干含むという 6,638 挺を引き渡した。庄内藩も降伏時に和洋銃 4,900 挺を渡したが、洋式銃の内訳は、ミニエー銃やエンフィールド銃など前装式の施条銃が多かったとされる。奥羽越列藩同盟のなかでは装備の良さで庄内藩と双璧の越後長岡藩は、エンフィールド銃主体の銃隊を編成した。同藩は、アメリカ製のガトリング機関砲 2 門や施条砲を含む大砲約 30 門も保有し、北越戦争で活用している。幕府の場合、伝習隊は後装式のシャスポー銃で武装し、その他の兵士もミニエー銃を装備していたが、挺数は判然としない。大藩の仙台藩でも、降伏時に差し出した武器は施条銃 1,100 挺、四斤施条砲 4 門というものであった[14]。つまり、洋式銃を「持たざる」佐幕派の場合、多くとも数千挺の規模でしか洋式銃を持てなかったようだ。

以上、討幕派・佐幕派両派が有する洋式銃の挺数を比較すると、やはり討幕派が、佐幕派よりも一桁多い洋式銃を備えていたことがわかる。なかでも、アメリカのスペンサー銃など最新の後装式ライフル銃に注目すると、討幕派が 7,000 挺以上、佐幕派は若干という大差がつく。この傾向、つまり討幕派を引き継いだ明治政府軍が、地方組織の軍よりも数多くの洋式銃を備えられた傾向は、以後どうなったのであろうか。時代はやや下るが、1877 年（明治十年）の西南戦争を事例として、洋式銃の装備をめぐる傾向の変化を瞥見しておきたい。

１－３　中央と地方の洋式銃の概数―西南戦争の場合

西南戦争（西南の役）とは、明治政府に対する不平士族の反乱のなかでも、最大で最後のものである。征韓論を唱えた西郷隆盛は、政府内での論争に敗れて職を辞し、鹿児島に私学校を設立した。私学校の生徒が中心となった反乱軍（薩軍）は、1877 年 2 月に鹿児島で挙兵したが、熊本城を攻略できないうちに政府軍の反撃が始まる。熊本で田原坂の戦いなどの激戦が展開されたのち、反乱軍は鹿児島へ敗退していく。

そして同年 9 月に城山で西郷が自決して、西南戦争は終結した。概ねこうした経緯の西南戦争では、反乱軍の主力が薩摩藩の流れをくむ薩軍であったため、反乱軍も洋式銃を多数装備していた可能性が考えられる。そこで以下では、政府軍と反乱軍が備えていた小銃の概数を確認し、比較検討してみよう。

西南戦争に参戦した政府軍の総人員は 54,138 名で、計 45,281 挺（12 種類）の小銃を使用した。なかでも主なものは、エンフィールド銃 24,480 挺やスナイドル銃 8,287 挺、アルビニー銃 3,485 挺、ドライゼ銃 3,533 挺、イギリス製で後装式のヘンリー・マルチニー銃 2,902 挺、アメリカ製の長スペンサー銃 1,000 挺であった[15]。前装式のエンフィールド銃が過半を占めるが、スナイドル銃以下 5 種類の後装式ライフル銃が計二万挺弱もあったことが注目される。幕末・維新期とくらべると、最新式の小銃の導入が政府軍で著しく進んでいたことがわかる。

一方、政府軍が鹵獲した薩軍の小銃は、「取交（とりまぜ）小銃」（分類不能な雑多な銃）6,282 挺やエンフィールド銃 3,469 挺、スナイドル銃 165 挺、和銃 1,039 挺であった。ほかにもシャスポー銃やスペンサー銃、アルビニー銃といった新鋭銃や古いゲベール銃が若干あったが、政府軍から奪ったものである可能性もある[16]。ともあれ一万数千人規模であった薩軍の場合、半数以下しか洋式銃をもてず、最新式の銃は百数十人程しかもてなかった。政府軍とくらべると薩軍は、洋式銃を一桁少なく、新鋭銃を二桁少なく備えていたに過ぎないことになる。意外なほど少ない薩軍の小銃保有から、中央政府の軍が地方組織の軍よりも洋式銃を多数装備できた傾向は、維新後も続き、むしろ格差拡大の傾向であったことが判明した。

２．幕末・維新期の武器貿易―ドイツの日本学研究に注目して

本稿後半では、幕末・維新期の対日武器貿易を、グローバルな視点からローカルな視点まで幅広い視野をもちつつ検討していこう。具体的には、ドイツ人日本史研究者ハラルト・フュスの最近の論文「グローバルな武器貿易と明治維新」を手がかりに、検討を進めたい。この英文論文は、日米独の研究者たちが寄稿した文字通り国際的な論文集 *The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation* (2020)に掲載された労作だが、日本では書評も翻訳もまだ見当たらないからである。外国人の研究者が日本史をどう考えているかを点検することで、「客観的」で「相対的」な日本史の捉え方を紹介してみたい。

この論文の冒頭では、明治維新が「無血革命（a “bloodless revolution”）」と呼ばれたという 1868 年当時の表現にいきなり驚かされる。世界に目を向けると、1860 年代

前半のアメリカの南北戦争では 50 万人（通説では 62 万人）以上が死亡し、中国の太平天国の乱（1851-1864 年）では 200 万人以上の命が犠牲になっていた。一方日本では 1863 年の薩英戦争、1864 年の四国艦隊下関砲撃事件や禁門の変、1866 年の第二次長州征伐などを経て、1868 年以降の戊辰戦争や 1877 年の西南戦争が生じた。幕末の戦いよりも激しかった戊辰戦争や西南戦争においてさえ、死者数は数千人から 1 万人台の規模で推移したのである。ゆえに 19 世紀の世界の戦争の基準からすれば、死傷者数が圧倒的に少ない日本の内戦は、当時から「無血革命」に映ったのであろう。加えてフュス論文や同書の各章は、1864 年の第一次長州征伐から 1877 年の西南戦争（Satsuma Rebellion）までを、内戦の広い時期として捉えている[17]。明治維新の軍事的な評価や期間に関し、日本人の一般的なイメージとは少し異なる像が得られよう。

２－１　日本での軍拡競争とグローバルな武器貿易

前述のような 1860 年代のいくつかの戦いで、ライフル銃の火力が、マスケット銃（火縄銃等の滑腔銃）の火力や従来の刀槍よりはるかに有効であることが判明した。しかし武士階級（侍）は、この新式ライフル銃を「卑怯者の武器」として忌避しがちであった。そこで佐幕・討幕の両派とも、武士の代わりに農民を兵士として軍に入隊させ始めることとなる。討幕派の有名な例としては、長州の奇兵隊があげられよう。その結果、日本社会における士農工商という身分制度が瓦解していくことになった。このように輸入された洋式ライフル銃は、日本の軍事的、社会的、政治的な変化にとって極めて重要な役割を果たした。ところが、これらの洋式銃に関する国際的な貿易ルートについては、いまだに研究が乏しいままである[18]。先行研究に関するこのようなフュス論文の問題意識は、本稿でも共有するものである。

日本向けの武器貿易の主役は西洋商人であったが、彼らは、日本の苦境から私利を貪る銃砲の密輸人、いわゆる「死の商人」として否定的に評価されるのが一般的だ。その例外的存在は長崎のトーマス・グラバーで、ハリー・パークス駐日イギリス公使の暗黙の支持のもと、グラバーは西南雄藩に洋式兵器を供給した。彼の貢献もあって可能になった薩長土肥の洋式ライフル銃部隊の迅速な組織化は、1866 年以降の内戦で決定的な有利をもたらした。一方、レオン・ロッシュ駐日フランス公使に支援された幕府側の軍事改革は、1867 年のフランス軍事顧問団の到着に結実したのみであった。しかしこれは、以後の戦場で効果を出すには遅すぎたのである[19]。このフランス軍事顧問団の目的は、多様な兵科の戦術や規則を幕府軍に教えることであった。ところが同顧問団はこの仕事をほとんど始められないまま、1868 年の明治維新の結果を受けて、

本国フランスに召喚されたのである[20]。

２－２　国内の需要と世界からの供給

幕府の軍事改革はほとんど始まりもせずに終わったが、幕府は、洋式兵器の入手を怠っていたわけではなかった。それどころか、1858 年の「安政の五ヵ国条約」で幕府は軍艦や銃砲の購入を独占していたのである。しかし幕府は、各藩の武装に用心していたにもかかわらず、幕府以外に対する輸入禁止措置をなぜか解く。1860 年の幕府の布告により、諸大名や陪臣にも「開港場」の「運上所」（税関）を通して「各国舶来之武器類」の輸入が許されたのである[21]。とはいえ幕府は武器の売買を監視し続け、非合法な武器が長州に流れた疑いがあれば、外国の外交官に密輸禁止を依頼していた。ところがイギリスの外交官は、密輸業者を捕えずに警告しただけで応じたのである。その後 1866 年の第二次長州征伐以降、武器需要が特に高騰し、1867 年に国内の政治的緊張がいっそう高まると、小火器が日本の最重要の輸入品になった。その結果、次の表のように 1863 年から 1869 年までの小火器輸入の記録総計は 50 万挺以上となり、1867 年にそのピークを迎えたのである[22]。この数値、1863 年から 1869 年までに 57 万挺弱が日本全体で輸入されたという記録は、同時期に 58 万 2 千挺から 60 万挺程度が日本に輸入されたという前述の鈴木著の数値と近似している（１－１末尾参照)。

年	横浜	長崎	神戸	日本
1863	5,817			5,817
1864	11,568			11,568
1865	56,843	25,850		82,693
1866	53,000（推計）	21,620		74,620
1867	102,333	65,367		167,700
1868	106,036	36,514		142,550
1869	58,613	19,163	7,120	84,896
合計	394,210	168,514	7,120	569,844

表１：港湾ごとに輸入された小火器、1863 年～1869 年

横浜の税関の火事のため、1866 年の数値は推計による。前後の年を考えると、やや控えめな数字である。

長崎港での武器輸入が西南雄藩のみに供給し、横浜の貿易が佐幕派だけを強化したと考えるのは、当時の状況を単純化しすぎであろう。しかし、表 1 の横浜の輸入量の多さ、従来有名であった長崎の輸入の二倍以上もの輸入量を考えると、関東平野では西日本の二倍の洋式銃をもてたと推定される。少なくとも関東諸藩、特に徳川家は、武器の洋式化の点で辺境の諸藩より強化されたはずであった。しかも 1867 年には、前述のフランス軍事顧問団が日本に到着したのである。その結果、徳川幕府が日本に対するいっそう強い支配力をもち、中央集権的なフランス式の方法で日本を改造する恐れまで発生してきた。しかしながら当時のスコットランド人ジャーナリスト、J・ブラックの報告によると、「幕府には 30 万挺ものライフル銃があるが、それを使える人員は 1 万人しかいない」という噂もあった[23]。この問題、新式の道具は豊富にあるがそれを活かせる人材が足りないという問題は、古今東西を問わず、新技術を実際に活用する際の主要な問題と言える。

表 1 の 2 年後にあたる 1871 年の廃藩置県の頃､明治政府は各藩の装備を調査した。小銃は計 37 万挺という結果で、80%以上がエンフィールド銃やミニエー銃のような前装式ライフル銃、8%以下が後装式ライフル銃、燧石式マスケット銃など古い銃もあるという内訳であった。この 37 万挺という数は、表 1 の輸入総数とくらべても約 20 万挺足りない。こうした激減の一因として、戊辰戦争後に洋式銃が日本から海外に再売却されたことがあげられる[24]。廃藩置県の 3 年後の 1874 年に「武庫司」が小銃を調査した時には、1 － 1 末尾で前述のように、計 18 万挺強しか陸軍にはなかった。おおよそ 2、3 年に約 20 万挺のペースで、日本国内から小銃が消え続けていたことがわかる。ノエル・ペリンではないが､「鉄砲を捨てた日本人」とでも言いたくなるような状況であった。

なお、フュスが参照する南坊平造の推計によれば、幕府と佐幕派の諸藩が合計で約 7 万 5 千挺の小銃を所有し、薩長が各々2 万挺以上をもち、薩長土肥が計 6 万挺以上を有していた。後装式ライフル銃に限定すると、幕府は長州の二倍もの挺数を有していたとも推定される。一方会津藩の場合、1868 年 11 月に若松城で降伏した時、2,845 挺以上の小銃を引き渡したとされる[25]。 1 － 2 で前述した鈴木の計算とくらべると、洋式銃の保有における幕府の存在感がより大きく感じ取れる評価であった。

２－３　長崎・横浜における西洋の武器商人

ここでは、1866 年の後半から 1867 年までの長崎における主な小火器輸入者と彼らによる輸入挺数を次の表でまず示しておく。

貿易業者	国籍	1866（半年分）	1867 年	合計（挺）
1 グラバー	イギリス	685	12,140	12,825
2 クニフラー	ドイツ	3,100	1,901	5,001
3 オールト	イギリス	250	2,829	3,079
4 ヒューズ	イギリス		1,810	1,810
5 ロウレイロ	ポルトガル(米)		1,780	1,780
6 レーマン	ドイツ	926	526	1,452
7 ボードイン	オランダ	1,000	300	1,300
8 カイマンス	フランス		1,120	1,120
9 フレンチ	アメリカ	500	366	866
10 ボーレン	ドイツ	268	500	768

表 2　長崎での主要な小火器輸入者、1866～1867 年

極めて少ないアメリカのシェア。計約 3 万挺中、多く見ても 2,600 挺ほど(5, 9 で)。なお、ポルトガル商館員だったロウレイロと共に活躍したアメリカ企業があった[26]。

このように長崎では、アメリカやフランスの武器商の活躍は限られたものであったが、横浜では、両国の商人はもう少し大きな役割を果たしていた。アメリカの場合、ロバート・プリュイン公使が、3 隻の軍艦を回航すると 1863 年までに契約し、幕府から 63 万 7 千ドル相当の巨額の銀貨を獲得したのだ。その結果 1868 年には、元南部海軍のストーンウォール号（フランス製）が横浜に回航されてきたのである。しかし同号を幕府が受け取るには時すでに遅く、新政府がそれを甲鉄と改名し、旧幕府側の榎本艦隊と戦わせるため 1869 年 5 月に箱館戦争へ派遣した。この皮肉なエピソードは、前述の NHK の番組でも取り上げられている（「はじめに」の末尾参照）。なお、1868 年春以降、東北諸藩はイギリス製のライフル銃に加え、アメリカ製のスプリングフィールド銃やシャープス銃を横浜市場で活発に購入した[27]。

一方、フランスに対して幕府は、後装式ライフル銃で最新のシャスポー銃 4 万挺と

野砲 300 門を 1867 年の夏までに注文した。このためフランスからの輸入額は、1865 年からの 2 年間で 10 倍以上も高騰したのである。ただし、1867 年の末までに江戸に着いたシャスポー銃はせいぜい 3,000 挺で、しかもそれらは戦闘では使われなかった。加えて、アメリカ製騎兵銃の取引を幕府と成立させたスイス総領事のカスパー・ブレンヴァルトでも、スイス製の後装式ライフル銃の注文取り付けには失敗した。最新の後装式ライフル銃の訓練を幕兵がまだ受けていなかったため、幕軍の方が注文を控えたからである[28]。新式の道具を活かせる人材不足、いわゆる「宝の持ち腐れ」という新技術にまつわる前述の大問題を、幕府は実際に抱えていたのであった。

２－４　グローバルな武器市場の動向―アメリカに注目して

ここまでの検討で、幕末・維新期の日本が横浜や長崎港で大量の洋式銃を輸入していたこと、アメリカ製の武器の輸入は長崎より横浜で比較的活発であったことなどがうかがえた。ではそのアメリカの企業や政府は、全世界ではどのような武器販売実績をもっていたのであろうか。欧州や中米、中東の諸国にも軍装備品を実際に売却していたとされるアメリカの実績の一部をここから紹介しよう。たとえば、1865 年からの五年間でアメリカは、中東のオスマン帝国に 150 万挺以上のライフル銃を輸出した。またアメリカ国内最大の民間の武器製造業者であるレミントン社は、一社だけで 50 万挺以上輸出したとされ、中国や日本にも後装式ライフル銃を輸出していた。中国には 114,500 挺を売却したが、日本への売却数は不明である。そして、1868 年 8 月にスカイラー・ハートリー＆グラハム社は、銃剣付スペンサーライフル銃 200 挺や銃剣付オーストリア滑腔銃 200 挺、300 本の銃剣と鞘などを日本に送り届けた[29]。後者の企業のようにアメリカの武器商人は、他国製品の仲介業も引き受けていたようだ。

自国製品を仲介した事例としては、アメリカのオーガスティン・ハード株式会社があげられる。1868 年夏に A・ハード社は、「日本人に最もよく知られている」後装式のスペンサーライフル銃をサンフランシスコから入手し、横浜のスイス商ファーブル・ブラントに売却した。加えて同社は、機敏な日本市場に期待して、カートリッジ付きスミス＆ウェッソンリボルバー拳銃もボストンから購入した。ただし同社は、1868 年 7 月に到着したフランス製シャスポー銃 1,000 挺の売却を持て余し、1869 年 4 月にようやく売却できたのである[30]。アメリカ企業が日本に小銃を売却した数は、数百挺レベルまでは判明するものの、それ以上の規模ではなかなかはっきりしない。隔靴掻痒の感が残るが、これが現状である。

おわりに

では最後に、本稿で検討してきたことをアメリカに注目しつつ概観していこう。

幕末・維新期の日本における洋式銃、なかでもスペンサー銃やシャープス銃など、アメリカ製の兵器がどこにあったのかに関しては、最近の日本の文献で相当明らかになった。たとえば、戊辰戦争期には薩摩藩や佐賀藩にスペンサー銃やレミントン銃があったし、長岡藩ではガトリング砲が使用された。明治初期の「陸軍小銃制式」では、選出された騎兵銃が三種類ともすべてアメリカ製であった。そして西南戦争では政府軍、反乱軍の両者がスペンサー銃を使用したが、前者が後者より多数を有していた。すなわち幕末・維新期には一貫して、討幕派やそれを継いだ政府軍が、アメリカ製の小銃を敵軍より大量に所有し、活用していたのである。

加えて、日本の研究も用いたドイツの日本学研究では、長崎よりも横浜からの方が輸入量の多かった意外な史実や、アメリカのハード社を含む各国商社別の輸入挺数が紹介された。新式ライフル銃を揃えるためには新技術を活かせる人材の確保が不可欠だが、幕府にはそれが難しかったという論点も示される。その幕府や東北諸藩でも、元南軍の軍艦やスプリングフィールド銃、シャープス銃などアメリカ製の小銃を横浜市場で急遽購入したことが判明した。しかし佐幕側による新式兵器の購入は、討幕側より遅く、いわゆる「泥縄式」であったため、効果を発揮するどころか敵軍を利することさえあった。軍艦甲鉄がその好例である。

以上の結果、1868 年の戊辰戦争の勃発までに薩摩藩や佐賀藩が、それ以降は旧幕府軍や東北諸藩がアメリカ製の武器を購入したと推定される。アメリカ側からすれば、これは一見、節操のない売却である。武器を高く販売できそうな相手に都合よく売りつけたように映るからだ。では、アメリカ政府や企業は何のためにこれらを売ったのか。やはり南北戦争で生じた余剰兵器の単なる処理のためだったのであろうか。あるいは日本の内乱を長引かせ、なるべく多くの武器を売ろうという魂胆であったのか。こうした問題を考えるためには、本稿冒頭で箇条書きした問題の一つ目、つまり南北戦争後のアメリカ政府の東アジア戦略が、今後の研究課題として残るであろう[31]。

[付記]本稿は、次の学会発表をもとに執筆したものである。布施将夫「1860 年代後半の日米間における武器移転をめぐって―南北戦争から戊辰戦争へ―」(国際言語文化学会第 10 回大会、2023 年 1 月 21 日に対面で開催)。記して謝意を表したい。

参考文献

秋田茂・桃木至朗編著『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版会、2016 年。

宇田川武久編『鉄砲伝来の日本史　火縄銃からライフル銃まで』吉川弘文館、2007 年。

鈴木眞哉『鉄砲と日本人　「鉄砲神話」が隠してきたこと』洋泉社、1997 年。

ナイバーグ、マイケル・S『戦争の世界史』稲野強訳、ミネルヴァ書房、2022 年。

ピーラー、G・カート『アメリカは戦争をこう記憶する』島田眞杉（監訳）布施将夫・岩本修・藤岡真樹・森山貴仁・金子典生訳、松籟社、2013 年。

藤田昌雄『日本陸軍の基礎知識＜明治の兵器編＞』潮書房光人新社、2021 年。

布施将夫『補給戦と合衆国』松籟社、2014 年。

布施将夫『近代世界における広義の軍事史――米欧日の教育・交流・政治――』晃洋書房、2020 年。

Hellyer, Robert, Fuess, Harald(eds). *The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation*, Cambridge: Cambridge University Press, 2020.

Hughes, Mark. *The New Civil War Handbook: Facts and Photos for Readers of All Ages*, NY: Savas Beatie, 2009.

Piehler, G. Kurt. *Remembering War the American Way*, Washington D.C.: Smithsonian Books, 1995.

Upton, Emory. *The Armies of Europe & Asia: Embracing Official Reports on the Armies of Japan, China, India, Persia, Italy, Russia, Austria, Germany, France, and England,* Portsmouth: Griffin & Co., 1878.

註

1 布施将夫『補給戦と合衆国』松籟社、2014 年、100 頁。

2 鈴木著は、ちくま学芸文庫として 2000 年に補訂・刊行された（2006 年第 3 刷）。

3 2022 年度から、高校の新科目として「歴史総合」が導入されるなど、世界史と日本史をつなげた「グローバル・ヒストリー」は注目を集めつつあるので。

4 鈴木眞哉『鉄砲と日本人　「鉄砲神話」が隠してきたこと』洋泉社、1997 年、218 頁。Mark Hughes, *The New Civil War Handbook: Facts and Photos for Readers of All Ages*, NY: Savas Beatie, 2009, p.57. 椎の実型の弾丸は底が空洞になっているので、火薬が爆発すると膨張した空気で弾丸の底の円周が膨らみ、銃身の溝にはまる。そのため弾丸はスピンしつつ銃口を飛び出し、長距離を飛翔できるようになった。

5 鈴木、前掲書、218 頁。Hughes, *op.cit.*, pp.57-58.

6 マイケル・S・ナイバーグ『戦争の世界史』稲野強訳、ミネルヴァ書房、2022 年、

99 頁。
[7] 鈴木、前掲書、218 頁。Hughes, *op.cit.*, p.58. 藤田昌雄『日本陸軍の基礎知識＜明治の兵器編＞』潮書房光人新社、2021 年、12、17、32-33 頁。
[8] 同上、15-16 頁。これらは、戊辰戦争で佐賀藩が用いた主要小銃とされる。
[9] ナイバーグ、前掲書、100 頁。
[10] 洞富雄『鉄砲―伝来とその影響』思文閣出版、1991 年のこと。鈴木、前掲書、247 頁に基づく。
[11] 藤田、前掲書、21-22 頁。なお、明治初期のこの調査については、研究者によって記述が多少異なる。宇田川武久編『鉄砲伝来の日本史　火縄銃からライフル銃まで』吉川弘文館、2007 年、238 頁で荒木康彦は、1873 年に「武器司」で管理された小銃が調査され、「ツンナール」銃（撃針銃、ドライゼ銃含む）を「豫備銃と（ママ）為ス」と論じた。一方、同上、242 頁の木村益雄論文によると、1872 年に「武庫司」の保管する 18 万挺の小銃の調査と選別作業がフランス陸軍ルボン大尉に依頼された。彼は、39 種の銃種のなかから、金属薬莢を使うイギリス製「スナイドル銃」とそれに改造可能なイギリス製「エンピール銃」など 4 種を新生陸軍の制式銃として選定した。つまり、「武器司」と「武庫司」の違いや調査時期の違いなどが散見されるのである。そこで本稿では、最大公約数的な結論をひとまず提示した。
[12] 布施将夫『近代世界における広義の軍事史――米欧日の教育・交流・政治――』晃洋書房、2020 年、115 頁。以後、布施、『近代世界』と略記する。布施の記述は、Emory Upton, *The Armies of Europe & Asia: Embracing Official Reports on the Armies of Japan, China, India, Persia, Italy, Russia, Austria, Germany, France, and England,* Portsmouth: Griffin & Co., 1878, pp.10-11 に基づく。拙著では「アルビーニ型」と記していたが、本稿では「アルビニー型」と表記を直した。
[13] 鈴木、前掲書、220-221 頁。同書 219 頁の「洋式銃を持てる藩と持たざる藩」という表現は、20 世紀転換期の「植民地を持てる国と持たざる国」という表現から借用したものだと推察される。世界史を意識した趣深い表現ゆえ、本稿でもそれに倣った。
[14] 同上、221-223、234 頁。
[15] 同上、258-259 頁。秋田茂・桃木至朗編著『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版会、2016 年、189 頁では、「マルティニ・ヘンリー銃」がイギリス製後装レバー作動式であったことに言及されている。
[16] 鈴木、前掲書、261 頁。
[17] Robert Hellyer, Harald Fuess (eds), *The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation*, Cambridge: Cambridge University Press, 2020, pp.83-85. 南北戦争の兵士の犠牲者数は、100 万人以上だとする先行研究もある。G. Kurt Piehler, *Remembering War the American Way*, Washington D.C.: Smithsonian Books, 1995, p.47 を参照。ただし拙訳では通説を採用し、当該の数字を 62 万人余りと訳すことにした。G・カート・ピーラー『アメリカは戦争をこう記憶する』島田眞杉（監訳）布施将夫・岩本修・藤岡真樹・森山貴仁・金子典生訳、松籟社、2013 年、73 頁参照（第二章の訳を布施が担当）。
[18] Hellyer, Fuess (eds), *op.cit.,* p.86.
[19] *Ibid.,* pp.86-87.
[20] 布施、『近代世界』、98 頁。Upton, *op.cit.,* p.1. この（第一次）フランス軍事顧問団の構成は次のとおり。司令官の参謀大尉 1 名、工兵大尉 1 名、砲兵大尉 1 名、歩兵中尉 2 名、騎兵中尉 1 名、下士官 15 名である。
[21] 宇田川編、前掲書、218 頁。
[22] Hellyer, Fuess (eds), *op.cit.,* pp.87-89. この表をフュスは、保谷徹『戊辰戦争』吉川弘文館、2007 年、99 頁から作成したと注記している。

[23] Hellyer, Fuess (eds), *op.cit.,* pp.88-90.
[24] *Ibid.*, pp.90-91. フュス論文はここで、南坊平造「明治維新全国諸藩の銃砲戦力」『軍事史学』第 31 巻第 1 号、軍事史学会、1977 年、77-102 頁を引用している。
[25] Hellyer, Fuess (eds), *op.cit.,* p.91.
[26] *Ibid.*, pp.91-93. アメリカ企業の例として、ジョン・ウォルシュ社があげられる。なお宇田川編、前掲書、222-223 頁によると、表 2 の 6 のカール・レーマンは、1866 年後半から 1867 年前半にかけて、計 1,374 挺の小銃を輸入して、諸藩に売却した。長崎運上所の史料に基づく荒木康彦論文を参照。表 2 の数値よりはやや少ないが、1867 年後半のデータがないためであろうか。また、当時の史料におけるエンフィールド銃の表記のブレにも注目される。

表 3　幕末期におけるレーマンによる小銃輸入（計 1,374 挺）

年月日	小銃の種類	数量（挺）	金額（両）
1866/7/16	極上ライフル	500	6,500
1866/7/30	インフィールトライフル	100	1,325
1866/8/24	エンヒルト	200	2,500
1866/8/31	エンヒールライフル	46	1,435
1867/2/27	小銃	28	377
1867/5/11	エンヒールト	500	7,875

[27] Hellyer, Fuess (eds), *op.cit.,* pp.93-95. プリュインは、タウンゼント・ハリスの後任の公使である。
[28] *Ibid.*, p.94.
[29] *Ibid.*, p.95.
[30] *Ibid.*, pp.95-96.
[31] 南北戦争期のアメリカは、主力商品の一つである綿花を、イギリスで販売しにくくなる状況を予測していた。布施、『近代世界』、81、90 頁参照。ゆえに綿花に代わりうる商品として余剰兵器を捉え、近代化しつつある諸国への銃器販売に力を注ぎ始めた可能性は考えられよう。

日本語の配慮表現の機能について
―品詞をはじめとする形式分類から―
The Function of Japanese Expressions of Consideration: From the Viewpoint of Formal Classification with Parts of Speech

辻　周吾

Summary

The purpose of this study is to clarify the functions of the Japanese language based on formal classifications, including parts of speech, and then present these functions to native speakers and foreign learners of Japanese. The results show that Japanese expressions of consideration exist across each form. Furthermore, as multiple functions can be identified for a single form, they have complex features. This paper presents a list of functions for each form category, which can be helpful for native speakers of Japanese and foreign learners of Japanese to systematically understand the features of expressions of consideration.

１. 研究背景

1. 1. 配慮表現の定義

日本語の配慮表現については、その形式や機能にかかわる先行研究が確認できる。

配慮表現を定義づける上で、しばしば取り上げられるのが、ポライトネスの理論である。高見（2019）によると、ポライトネス理論を、「人間関係構築のための言語ストラテジーである。実際の言語使用場面において対人関係を言語によって調節する機能、つまり『心地よいかどうか』という『実際の人の気持ち』を重視したポライトネスをいい、普遍的な理論である」（p. 189）と説明している。そして、ポライトネスの理論における、フェイス（面子とも訳される）には、「積極的フェイス（positive face)」と「消極的フェイス（negative face)」がある。これらについて、「『積極的フェイス』は、相手に良く思われたい、認められたい、評価されたい、という欲求である。『消極的フェイス』は、相手に邪魔されたくない、自分の領域に踏み込まれたくない、という欲求である」（p. 190）と説明している。先行研究における配慮表現の定義も、このポライトネス理論を参考にしている場合が多い。まず、この点を押さえておきたい。

以下、本研究を行う上で、配慮表現とは何なのか、その定義について確認していきたい。

彭（2005）は、配慮表現について、「相手の心が傷つかないように、また自分が相手に好ましい印象を与えるように配慮する対人関係の表現を指すもの」（p. 3）と述べている。彭氏の配慮表現は、相手に対する悪い感情だけでなく、好ましい感情も扱っている点が特徴的である。配慮表現として、幅広い領域を有していると言える。

野田（2014）は、配慮表現について、「聞き手や読み手に悪い感情を持たれないようにするために使う表現」（p.3）であると述べている。野田氏の配慮表現は、相手に対する悪い感情のみを扱っている。また、読み手に対する文章も範囲に含めている。

山岡（2015）は、配慮表現の定義を、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」（p.318）としている。山岡他（2010）の配慮表現を再定義したものであり、新たに「一定程度以上に慣習化された」という内容が追加されている[1)]。これは、「ちょっと」や「かもしれない」のように、原義を離れて配慮機能に慣習化した表現のことである。また、山岡氏の配慮表現が、重視するところとなっている。

これらの定義を踏まえた上で、本研究における「配慮表現」を、「対人関係を良好に保つために、コミュニケーション上で用いられる表現である。相手に悪い感情を持たれないように、また、相手に良い感情を持たれるようにする」と定義づける。これは、彭氏の配慮表現を、再定義したものである。また、先のポライトネスの理論で言うところの、消極的フェイスと積極的フェイスの両方を意識したものとなっている。

1.2. 配慮表現の分類

続いて、日本語の配慮表現の分類にかかわる先行文献を確認していく。

彭（2005）は、配慮表現について、①緩和表現、②受益表現、③プラス価値付加表現、④心地よい気分表現、の四領域を提唱している。また、⑤αとして、今後の研究の進展によって新たな領域も十分に考えられるということから、「四領域＋α」としている。同分類は、彭氏が収集した豊富な配慮表現の例から分類されたものである。また、配慮表現の機能に重きを置いた分類であると言える。

野田（2014）は、「形式から見た配慮表現の種類」として、①敬語、②文末のモダリティ表現、③間接的な表現、④前置き表現、⑤音声、⑥記号・顔文字・絵文字、に分類している。また、「機能から見た配慮表現の種類」として、①上位待遇、②断定緩和、③共感表明、④負担表明、⑤謝罪、⑥理由説明、に分類している。同分類は、「形式」と「機能」とに分けて分類しているのが特徴である。

山岡（2019）は、先行研究を参考にし、多様な表現群を幅広く収められる分類を提案している。形式分類として、①副詞、②副詞句、③形容詞・形容詞句、④接尾語・補助動詞、⑤文末表現、⑥慣用文、⑦文法形式の交替、に分類している。また、機能分類として、Ⅰ利益表現、Ⅱ負担表現、Ⅲ緩和表現、Ⅳ賞賛表現、Ⅴ謙遜表現、Ⅵ賛同表現、Ⅶ共感表現、に分類している。同分類は、先行文献で挙げられてきた複数の例を、形式分類／機能分類の枠組みにおさめている。

以上のように、先行文献から、配慮表現の分類を確認してきた。配慮表現の分類には、主に、「形式分類」と「機能分類」の二種類が存在する。本研究における配慮表現の分類は、前者の形式分類にあたる。配慮表現には、品詞だけでなく、連語による表現も多く存在する。

そのため、本研究の形式分類は、品詞より上位の言語表現も含めたものとしている。また、先行研究では、各形式において、配慮表現の例のみが示されている。しかし、名詞なら名詞、副詞なら副詞で、形式内の複数の例に共通する何かしらの機能が存在するものと考えられる。

２．研究目的、研究意義

本研究のリサーチクエスチョンは、「日本語の配慮表現は、品詞によって、その機能が異なるのではないか」というものである。そして、本研究の目的は、「品詞をはじめとする形式分類から、日本語の配慮表現の機能を分析する。そして、これらの分析をまとめ、配慮表現の体系的な特徴を明らかにする」ことである。

このことから、日本語学の学術面からの意義があるものと考えられる。

配慮表現は、縦・横の幅広い関係において、対人コミュニケーションに用いられる。また、日常生活の場面に限らず、ビジネスの場面でも求められる。日本語母語話者はもとより、外国人日本語学習者も身につけるべき表現であると言える。本稿のまとめで示す、形式分類のリストは、彼らが配慮表現を身につける上での参考となるだろう。日本語学や日本語教育学の実践面からの意義もあると考えられる。

３．研究方法

まず、品詞をはじめとする形式ごとに、配慮表現の機能を分析していく。形式によって、曖昧性や緩和性など、何かしらの機能が確認できるものと考えられる。

品詞の分類については、日本語教育文法を基本としたい。その際に、原沢（2010）の分類を参考にする。日本語教育文法は、外国人学習者を対象につくられており、文法の体系がシステマチックである。配慮表現の機能について、たとえば、国文法の助動詞よりも、日本語教育文法のテンスやムードの方が、分析しやすいものと言える。ただし、より細かく分析するために、一部は国文法の考えを採り入れている[2)]。

また、配慮表現の例ついては、彭（2005）に取り上げられているものを参考とする。このような意味では、本研究は、彭氏が大量に収集した配慮表現の例をもとに、形式分類を行ったものとも言える。形式分類を行う上で不足している例やその機能に関しては、筆者が補うこととした[3)]。

そして、まとめで、配慮表現の形式分類をリストとして示す。その上で、配慮表現の体系的な特徴について言及したい。

４.形式ごとの分析

以下、形式ごとに配慮表現の機能について分析していく。

4.1.配慮表現における動詞

まず、動詞全体では、間接的な意味の動詞がある。たとえば、「死ぬ」、「死亡する」という

言葉は、直接的なマイナスの意味を持つため、「亡くなる」という和語動詞や、「他界する」という漢語動詞が使われることが多い。また、「拒絶する」よりも「断る」、「助言する」、「忠告する」よりも「アドバイスする」という外来語動詞の方が、やわらかく感じられる。そして、「細かいことは分かりません」よりも「細かいことは把握していません」などの例が挙げられる。なお、一部は、「考えておきます」、「検討しておきます」のように、連語の形として慣習的な表現で用いられるものもある。配慮表現における動詞は全体的に、直接的な意味で伝えることを避け、間接的な意味を持つ動詞を選択することで、聞き手の気分を害さない。なおかつ、話し手の品格を保っている。

また、そのうちの自動詞・他動詞では、自動詞への形式の切り替えがある。たとえば、「お風呂を沸かしました」（沸かす）よりも、「お風呂が沸きました」（沸く）の方が、ニュアンスがやわらかくなる。また、「お茶を入れましたよ」（入れる）よりも、「お茶が入りましたよ」（入る）の方がやわらかい。他動詞から自動詞に切り替えることで、事柄が自然に起こったことを表し、聞き手に気遣いを感じさせない。

4.2. 配慮表現における形容詞

属性形容詞からは、間接的な、或いは具体的な意味を持つ形容詞がある[4)]。たとえば、聞き手に否定的な態度を示す場合、「悪い」や「無理だ」といった直接的な言葉よりも、「微妙だ」、「独特だ」、「慎重だ」や、「きびしい」、「むずかしい」、「ややこしい」、「困難だ」などの言葉の方が、ニュアンスがやわらかい。

また、肯定的な態度を示す場合、「良い」、「すごい」といった簡易的な言葉よりも、「さすがだ」、「立派だ」、「お見事だ」、「素敵だ」、「有望だ」、「手頃だ」などの言葉は、工夫されたものであると言える。また、「オーバーだ」、「ナンセンスだ」、または「スマートだ」、「ユニークだ」などの外来語の形容詞にも同様のことが言える。属性形容詞の面からみると、人物や事柄について述べる場合など、間接的な意味を持つ形容詞を用いることで、聞き手に心理的な負担を感じさせない。または、具体的な意味を持つ形容詞を用いることで、聞き手の気分を心地よくさせる。

また、感情形容詞からは、話し手の同情にかかわる形容詞がある。話し手の判断を下す場合など、たとえば、「惜しい」、「もったいない」、「意外だ」、「気の毒だ」、「残念だ」、「遺憾だ」などの表現は、相手の身の上になって、その感情をともにするといった、同情を示すニュアンスが感じられる。また、「きつい」、「つらい」、「まずい」、「大変だ」、「迷惑だ」などの表現は、逆に、身の上のことを伝え、同情を誘うニュアンスが感じられる。ただし、この場合、聞き手が話し手の意思や意図を察する必要がある。これらの違いは、聞き手の心情に近づくか、逆に聞き手の心情を近づけるかである。また、一部は、「すみません」（すまない）、「申し訳ございません」(申し訳ない)のように、後述する挨拶表現の範疇にも入るものと言える。

感情形容詞の面からみると、事柄への判断を下す場合など、話し手の感情を表す形容詞を用いることで、聞き手に同情を示している。または、聞き手からの同情を誘っている。

4.3.配慮表現における名詞

まず、普通名詞からは、間接的な意味の名詞がある。たとえば、「老人」という言葉よりも、「年寄り」、「お年寄り」という和語名詞や、「シニア」、「シルバー」という外来語名詞の方が、語義がやわらかい。また、「便所」よりも、「手洗い」、「トイレ」、「化粧室」などの名詞が使われることが多い。これら以外にも、「劣等感」より「コンプレックス」、「取り消し」より「キャンセル」、「もめごと」より「トラブル」の方が、語義がやわらかい。

この特徴を強く表しているのが、「外人」から「外国人」のような、差別用語の言い換えであると言える。たとえば、「後進国」から「開発途上国」、「浮浪者」から「ホームレス」、「スチュワーデス」から「客室乗務員」、「看護婦」から「看護師」などの言葉がある。普通名詞では、直接的な意味を伝えることを避け、間接的な意味を持つ名詞を選択することで、聞き手の気分を害さない。なおかつ、話し手の品格を保っている。これは、先の動詞の特徴と同じである。なお、「障害者」から「障がい者」のように、「害」（または碍）という漢字の持つイメージの悪さから、文字の表記のみを変更する場合も確認できる。

固有名詞からは、名称の命名がある。たとえば、「花王」、「資生堂」、「帝人」、「サントリー」、「パナソニック」、「KIRIN」、「YKK」などの社名命名が挙げられる。また、社名に限らず、商品名や施設名などの命名にもみられる。社名命名など、漢字やカタカナなどの語種を活用し、固有名詞を造ることで、聞き手に親しみを感じさせる。ただし、固有名詞として、国語辞典には記載されていないものが大多数である。他の形式の配慮表現と異なり、新たな言葉を創造するという特徴がある。

形式名詞からは、指し示すものを曖昧にするものがある。たとえば、「お荷物、お預かりします」よりも、「お荷物のほう、お預かりします」という表現の方が、ニュアンスがやわらかくなる。また、「ご指導のほどよろしく」、「お忙しいところを」にも同じことが言える。なお、「お忙しいところ恐縮ですが」のように、前置き表現の形として慣習的な表現として用いられるものもある。「名詞＋の」の後ろに形式名詞「ほう」「ほど」「ところ」を付けることで、指し示すことを曖昧にし、聞き手に直接的なニュアンスを感じさせない。

代名詞からは、事柄を示さない指示代名詞がある [5)]。日本語のコミュニケーションでは、「それはあれだから」、「あの件、どうなった？」のように、話題となった事柄を指し示し、具体的な内容まで、わざわざ述べないことがある。この場合、聞き手が話し手の真意や意図を察する必要がある。指示代名詞により、すでに知っていると思われる事柄を示さないことで、コミュニケーション上、聞き手にわずらわしさを感じさせない。

4.4.配慮表現における副詞

主に、情態副詞からは、確実性や度合いの意味を加える副詞がある。たとえば、話し手の判断において、「点検しておきます」よりも「一応点検しておきます」という表現の方が、ニュアンスがやわらかくなる。また、「“ノー”ということで」よりも、「とりあえず“ノー”ということで」の方がやわらかい。一方で、「なんとかやってみます」、「どうにか大学に受かっ

た」なども、副詞を添加することで、やわらかくなる。情態副詞の面からみると、動作における確実性や程度を表す副詞を添加することで、気軽さなど、聞き手に重要性を感じさせない。

主に、情態副詞と程度副詞からは、程度や数量の意味を加える副詞がある。たとえば、話し手の判断において、「分からない」よりも「ちょっと分からない」、「ひどい」よりも「ちょっとひどい」という表現の方が、ニュアンスがやわらかくなる[6)]。また、「うまくいっています」よりも「まあまあ、うまくいっています」の方がやわらかい。これら以外にも、「大体できたと思う」、「ほとんど終わりました」、「いささか自信があります」、「少々お待ちください」などが挙げられる。

また、相手に対する称賛などで、「いいアイディアです」よりも「なかなかいいアイディアです」という表現の方が、聞き手に心地よいニュアンスとなる。これ以外にも、「とてもおもしろい」、「たいへんお世話になりました」、「かなり上手だ」などが挙げられる

情態副詞・程度副詞の面からは、動作や状態の程度・数量を表す副詞を添加することで、大したことではないとして、聞き手に甚だしさを感じさせない。または、プラスの評価など、聞き手の気分をより心地よいものにする。

主に、陳述副詞と評価の副詞からは、話し手の気持ちを表す副詞がある。たとえば、打消しにおける「これはあまりよくないことだ」（あまり～ない）、推量における「たぶん来るでしょう」（たぶん～だろう）、仮定における「もしだめでなければ」（もし～なら）、願望における「今度はぜひ誘ってください」（ぜひ～ください）、また、「幸いうまくいきました」、「ただ今あいにく切らしています」などが挙げられる。なお、限定副詞の「むしろ前より良くなった」のような表現も、聞き手のミスをフォローする場面などでみられる。陳述副詞をはじめ、配慮の諸相が確認できる。また、これらの副詞は、後述するムードとも関係している。陳述副詞・評価の副詞の面からは、話し手の気持ちを表す副詞を添加することで、さまざまな面で、聞き手の心情に配慮している。

4.5. 配慮表現における接続詞

接続詞全体では、その特徴から、続く会話への抵抗感を軽減させる接続詞がある。話し手と聞き手双方のコミュニケーションを円滑に進めるためのものである。たとえば、話題を転換する際の「ところで、今年の夏休みはどうするの」、「さて、話は変わりますが」、「それでは、私から発言しましょう」などが挙げられる。「転換」の接続詞を用いることで、聞き手に唐突さを感じられないようにしている。

これ以外では、たとえば、説明する際の「なお、定員になり次第、締め切ります」、「ちなみに、一冊三千円です」などが挙げられる。「補足」の接続詞を添加することで、聞き手に重く感じられないようにしている。また、意見を述べる際の「例えば、貿易なんかどうですか」などの表現も、「説明」の接続詞として、同じような特徴を持っている。これらの接続詞も、配慮表現の範疇に入るものと考えられる。

話題転換の接続詞「ところで」「さて」などを用いることで、話題を変えることを示唆し、話し手の会話における唐突さを感じさせない。また、補足の接続詞「なお」「ちなみに」や、説明の接続詞「例えば」を用いることで、あくまでも補足事項や事例であるとし、聞き手に内容の絶対性を感じさせない。

4.6. 配慮表現における助詞

まず、格助詞では、配慮表現の用法は確認できなかった。あえて言えば、「千円からお預かりいたします」、「千円から代価をいただくために、お預かりします」などの表現が挙げられる。「から」で、その発端を示すことで、値段を直接的に言うことを避けている。ただし、この表現は誤用であるとも言われており、本研究では扱わないこととする。

副助詞では、範囲や程度の曖昧さを表す副助詞がある。たとえば、「お茶でも飲もうか」、「日曜日でも大丈夫？」、「アルバイトなどしています」、「わたくしなども同感です」、「友達になり相談したら」、「飲み物なり持って来ましょうか」などの表現が挙げられる。例示の形になることで、聞き手に強いニュアンスとならない。また、「一時間ばかり待ってください」、「千円ばかり貸してくれない」、「二つほどください」、「十五分ほど休憩します」、「一週間くらいかかります」、「三千円くらいかな」などが挙げられる。ここでは、おおよその程度を表すことで、強いニュアンスとならない。

また、話し手における不確実な判断を表すものがある。たとえば、「ご無理だと思います」より「ご無理かと思います」、「難しいと存じます」より「難しいかと存じます」、「お楽しみいただけると思います」より「お楽しみいただけるかと思います」という表現の方が、ニュアンスがやわらかくなる。ここでは、話し手による不確かな気持ちを添えることで、後続する「～と思う」と共起し、より事柄の不確実性を増している。範囲や程度の曖昧さを表す副助詞「でも」「など」「なり」「ばかり」「ほど」「くらい」などを付けることで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。その結果、ニュアンスがやわらぐ。または、不確実を表す副助詞「か」を添加することで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。

接続助詞では、主に、後文を省略させる接続助詞がある。たとえば、「いいと思いますが」、「基本的には賛成なのですが」、「ちょっと分からないけど」、「そろそろ時間ですけど」などの前置き・逆説の用法、「急用ができましまして」、「たいへん遅くなりまして」などの継起の用法が挙げられる。後文にくる、聞き手にとってのマイナスの内容を省略している。そして、聞き手が話し手の真意や意図を察する必要がある。このような特徴は、「そのようなことはできませんので」、「まだ来ていませんので」などの原因・理由の用法にも言える。なお、この場合、「から」よりもニュアンスがやわらかくなる。「から」が主観的であるのに対し、「ので」が客観的であるからだと考えられる。また、丁寧さによるところもあると言える。これ以外では、「天気がよければ」、「説明会があれば」、「この仕事が完成したら」、「会議が終わったら」など、順接・仮定の用法が挙げられる。以上のような用法により、後文を省略することで、聞き手に重く受け取られないようにしている。

そして、「手紙なんか書いたりして」、「音楽を聴いたりしています」などの並列の用法が挙げられる。これは、並列による例示を表しており、上記の副助詞の「でも」、「など」、「なり」と同じ特徴であると言える。接続助詞の前置き・逆説「が」「けど」、継起「て」、原因・理由「ので」、順接・仮定「ば」「たら」などを用いて後文を省略することで、その内容を示唆にとどめ、聞き手に重く受け取られないようしている。または、並列の「たり」を用いて範囲による曖昧さを表すことで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。

終助詞では、話し手のさまざまな気持ちを表すものがある。たとえば、「よかったですね」、「かわいそうにね」、「ご立派なご主人さまですね」などの表現が挙げられる。同意や確認の意味を表し、聞き手との間で同調する関係を築こうとしている。

これ以外にも、「すごいなあ」、「花火、きれいだなあ」などの表現は、話し手の詠嘆・驚きの気持ちを表し、より心地よいニュアンスを与えている。また、「君は行かないの？」、「それ高いの？」などの表現は疑問の気持ちを表し、「外は風が冷たいよ」、「ここがあなたの教室ですよ」などの表現は軽い判断を表し、柔らかいニュアンスとなる。「の」と「よ」は、親しい間柄しか使うことができず、聞き手との親密性を表すものと言える。また、「の」と「よ」は、女性に用いられる傾向があると言える。いずれの終助詞も配慮表現の範疇に入るものと考えられる。同意・確認を表す終助詞「ね」を用いることで、聞き手に同調を求めている。また、詠嘆・驚きを表す終助詞「なあ」を用いることで、聞き手の気分をより心地よいものにしている。そして、疑問や軽い判断を表す終助詞「の」「よ」を用いることで、聞き手に親密性を感じさせる。

さらに、助詞全体において、直截的な表現をやわらげる助詞の省略がみられる。たとえば、「新聞（を）読む？」、「はさみ（を）借りていい」、「鍵（が）かかっている」、「うどん（が）食べたい」などの表現がある。それぞれ、格助詞の「を」、「が」を省いている。

また、「私（は）行かない」、「私（は）山田ではありません」、「君（は）どう思う？」などの表現では、副助詞の「は」を省略している。格助詞「を」「が」や、副助詞「は」を省略することで、聞き手に直截的なニュアンスを感じさせない。

4.7. 配慮表現におけるヴォイス・アスペクト・ムード

ヴォイスについては、恩恵や利益を表す授受表現がある。たとえば、「いつも心配してくれる」、「私の話をちゃんと聞いてくれる」、「中国のお茶を出してもらった」、「お父さんに買ってもらった鞄です」などの表現が挙げられる。これらは、授受表現における恩恵の授受である。また、実際のコミュニケーションでは、「なんとかしてくれませんか」、「ペンを貸してもらえませんか」、「してくれると助かります」、「してもらえると助かります」などの形で使われている。なお、「書いてくださる」（てくれる）、「書いていただく」（てもらう）の形は、後述する敬語の範疇にも入るものである。恩恵や利益を表す授受表現「てくれる」「てもらう」を用いることで、その親切心や厚意に対する、聞き手への感謝の気持ちを表している。

アスペクトについては、動作・出来事の変化や期間を表すものがある。たとえば、「記念式

典が開催されないことになりました」、「結婚することになった」、「今度、東京本社に行くことになりました」などの表現が挙げられる。ここでは、自然に出来事が実現したことを表し、聞き手に強いニュアンスとならない。

また、たとえば、「この資料、作っておいてください」、「英語の文、チェックしておきます」、「その方に会っておきたいです」、「話しておきたいです」などが挙げられる [7)]。ここでは、動作を表す語に「ておく」をともない [8)]、時間的な猶予を表すことで、聞き手に強いニュアンスとならない。アスペクトで、「ことになる」として、出来事の状態への変化を表すことで、聞き手に意思的なニュアンスを感じさせない。または、アスペクトで、「ておく」として、動作における時間的なゆとりを表すことで、聞き手に心理的な余裕を感じさせる。

ムードにおける、対事的ムードでは、以下のような文型が確認できる。たとえば、「来ないらしい」、「そうみたい」、「この説は正しいようだ」、「ちょっと雨が降りそうだ」などの表現は、話し手の推量により、ニュアンスがやわらかくなる。また、「よくないと思う」、「私はちょっと違うと思う」、「彼は来ないだろう（でしょう）」、「たぶん平日は少ないだろう（でしょう）」などの表現は、話し手の非断定により、ニュアンスがやわらかくなる。また、「一理あるかもしれませんが」、「私が勘違いをしたのかもしれませんが」、「荷物になっておじゃまかもしれませんが」などは、可能性の示唆により、ニュアンスがやわらかくなる。対事的ムードでは、「ようだ」（推量）、「だろう（でしょう）」（非断定）、「かもしれない」（可能性）など、コトの内容を不確実なものと捉えることで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。また、確信がある内容であっても断言せず、話し手の言葉への責任を回避させている。

また、対人的ムードでは、たとえば、「お茶でも飲みませんか」、「一度、食べに行きませんか」、「ちょっと休憩しましょう」、「ぼつぼつ（ぼちぼち）行きましょう」、「どういたしましょうか」、「一度、検討しましょうか」などの表現では、軽い勧誘・提案により、ニュアンスがやわらかくなる。また、「少々お待ちいただけませんか」、「なんとかなりませんか」などの表現では、軽い依頼により、ニュアンスがやわらかくなる。そして、「食べてもいいですか」、「入ってもいいですか」、「この本を借りてもいい？」などの表現は許可により、「このような見方もあるのではないか」、「まあ、いいじゃないですか」、「準備で疲れたんじゃないですか」などの表現は確認により、ニュアンスがやわらくなる。

上記のように、主に、聞き手に判断をゆだねる形で、聞き手の心理的な余裕を生みだしている。また、対人的な働きかけでもあるため、「です・ます」形として、後述する敬語の丁寧語の範疇にも入っている。対人的なムードでは、「ませんか」「ましょう」（勧誘・提案）、「ませんか」（軽い依頼）、「てもいい」（許可）、「ではないか」（確認）など、コトの内容の問いかけという形にすることで、その判断に余裕を持たせ、聞き手に強制的なニュアンスを感じさせない。

4.8. 配慮表現における諸表現

ここでは、品詞ではなく、表現としての内容を扱うこととする。その際に、挨拶表現、応

答表現、前置き表現、慣用句（イディオム）、連語（コロケーション）の五つに分類をした[9)]。

まず、挨拶表現では、「こんにちは」、「おはようございます」、「こんばんは」、「さようなら」、「失礼します」、「ご無事で」、「お元気で」、「お大事に」、「ありがとうございます」、「どうも」、「ごめんなさい」、「すみません」、「申し訳ない」、「勘弁してください」、「お世話になっています」、「よろしく」、「どうぞよろしくお願いします」、「お疲れ様です」、「ご無沙汰しております」、「おめでとう」、「おめでとうございます」などの表現が挙げられる。儀礼的な挨拶表現を用いることで、話し手の好意など、聞き手に親近感を感じさせる。

また、応答表現では、「はい」、「ええ」、「うん」、「まあ」、「そうですか」、「そうなんですか」、「そうだよね」、「そうですね」、「そのとおりです」、「道理で」、「よかったですね」、「よかったね」、「なるほど」、「わかります」、「お察しします」、「いいえ」、「いや」、「ううん」などの表現が挙げられる。あいづちや受け答えをすることで、聞き手との間に同調の関係を築く。また、話し手と聞き手双方のコミュニケーションを円滑にする。

前置き表現では、「おかげさまで」、「すみませんが」、「申し訳ございませんが」、「恐縮ですが」、「失礼ですが」、「よろしかったら」、「お忙しいところ」、「つまらないものですが」、「僭越ながら」、「自慢じゃないけど」、「お差し支えなければ」、「お手数をおかけしますが」などの表現が挙げられる。前置き表現を用いることで、聞き手に対し、続く話し手の発話における唐突さを感じさせない。

慣用句では、「腹をこわす」、「手が離せない」、「頭が痛い」、「頭を冷やす」、「骨が折れる」、「手を焼く」、「長い目で見る」、「足が出る」、「目を引く」、「馬が合う」、「気が置けない」などの表現が挙げられる。比喩的な特徴（暗喩）のある慣用句を用いることで、直接的な意味を避け、聞き手に心理的な負担を感じさせない。

連語では、「考えておきましょう（考えておく）」、「検討を重ねてまいりましたが（検討を重ねる）」、「いい勉強になりました（勉強になる）」、「いい参考になりました（参考になる）」、「お力になれなくて（力になる）」、「ちょっと都合が悪いのですが（都合が悪い）」、「どこか具合でも悪いの（具合が悪い）」、「あいにく持ち合わせがなくて（持ち合わせがない）」、「貴重な人材を失った（人材を失う）」、「今回は採用を見送らせていただきます（採用を見送る）」、「役者としての素質にも恵まれていた（素質に恵まれる）」、「どうか事情をお汲みとりください（事情を汲み取る）」などの表現が挙げられる。本研究における連語とは、慣用句を含まない、文脈によらず一定の意味を持つ一連の語である。また、コロケーションとして、二つ以上の単語の結びつきが強いものである。慣習化している連語を用いることで、直接的な意味を避け、聞き手に心理的な負担を感じさせない。

4.9. 配慮表現における敬語

先行研究でも、敬語は配慮表現として扱われている[10)]。敬語は相手を敬う特徴から、主に、目上と目下という縦の関係に用いられる。それに対し、配慮表現は、横や下の関係にも用いられる。敬語は、配慮表現としての使用範囲が限られていると言える。以下、敬語の分

類を確認した上で[11)]、その配慮的な機能を分析する。

尊敬語では、「いらっしゃる」（行く・来る・いる）、「おっしゃる」（言う）、「なさる」（する）、「召し上がる」（食べる）、「下さる」（くれる）、「見える」（来る）のような特定形、「お読みになる」、「お出かけになる」、「ご利用になる」、「ご出席になる」のような「お（ご）～になる」の一般形、「読まれる」、「利用される」、「始められる」、「来られる」のような一般形などが挙げられる。また、「お名前」、「ご住所」のような名詞の尊敬語、「お忙しい」、「ご立派」のような形容詞などの尊敬語が挙げられる。

謙譲語では、「伺う」（訪ねる・尋ねる・聞く）、「申し上げる」（言う）、「存じ上げる」（知る）、差し上げる（あげる）、「いただく」（もらう）、お目にかかる（会う）、「拝見する」（見る）のような特定形、「お届けする」、「ご案内する」のような「お（ご）～する」の一般形などが挙げられる。そして、謙譲語Ⅱ、いわゆる丁重語では、「参る」（行く・来る）、「申す」（言う）、「いたす」（する）、「おる」（いる）、「存じる」（知る・思う）などの特定形が挙げられる。

尊敬語や謙譲語により、話題の対象への敬意を表すことで、程よい距離感を保ち、聞き手にとって好ましい印象を与える。また、聞き手の面子を保っている。これは、コミュニケーションにおいて、人間関係を円滑にする目的でもある。

丁寧語では、「読みます」、「食べます」、「高いです」、「静かです」、「学生です」のような「です・ます」型などが挙げられる。「です・ます」型は、配慮表現において、聞き手を誘う際の「ませんか」、「ましょう」、「ましょうか」、「いかがですか」など、決まった形で用いられることが多い。丁寧語により、丁寧な言い方をすることで、聞き手への敬意を表し、聞き手に好ましい印象を与えている。

そして、美化語では、「お酒」、「お料理」、「お化粧」、「ご祝儀」のような「お」と「御」（ご）、いわゆる、接頭語が挙げられる。物事を美化して述べるものであり、聞き手に対して敬意を表しているわけではない。この点で、上記の丁寧語と区別される。また、女性が使用する傾向があると言える。美化語により、上品に美しく表現することで、聞き手に良い印象を与えている。また、話し手の品格を保っている。

4. 10. 配慮表現におけるその他の形式

以上の分類に入らないものを、その他の形式として扱うこととする。

その一例として、接尾辞の「的」がある。接尾辞の「的」は、漢語名詞に付くことで、形容動詞となる。たとえば、「理想の状態」、「時間の問題」、「初歩のミス」という言い切りの表現よりも、「理想的な状態」、「時間的な問題」、「初歩的なミス」の方が、ニュアンスがやわらかくなる。ここでは、間接的に「～の性質を持っている」という意味を持たせている。

また、「個人は」、「一般は」、「基本は」、「将来は」という言い切りの表現よりも、「個人的には」、「一般的には」、「基本的には」、「将来的には」の方が、ニュアンスがやわらかくなる。ここでは、間接的に「～の立場で」という意味を持たせ、「～は」という直接的な表現を避け

ている。前述の形式名詞の「ほう」などと、同じ特徴を持っていると言える。接尾辞「的」を付けて間接的な意味を持たせることで、聞き手に直接的なニュアンスを感じさせない。なお、若者言葉とも言える「私的には」という表現は、本研究では扱わないこととする。

５．まとめ

以上のように、品詞をはじめとする形式分類から、日本語の配慮表現の機能を分析してきた。ここでは、これまでの分析をまとめ、配慮表現の体系的な特徴を明らかにする。以下、本研究における形式分類を示す。図表中の（　）は、機能の基となる形式である。

①動詞

・間接的な意味を持つ動詞を選択することで、聞き手の気分を害さない。また、話し手の品格を保つ。 （動詞全体）	死ぬ、死亡する→亡くなる、他界する／拒絶する→断る／助言する、忠告する→アドバイスする／分からない→把握していない
・他動詞から自動詞に切り替えることで、聞き手に気遣いを感じさせない。 （自動詞・他動詞）	お風呂を沸かしました（沸かす） →お風呂が沸きました（沸く） お茶を入れましたよ（入れる） →お茶が入りましたよ（入る）

②形容詞

・間接的な意味を持つ形容詞を用いることで、聞き手に心理的な負担を感じさせない。 （属性形容詞）	きびしい、むずかしい、ややこしい、困難だ、慎重だ、独特だ、微妙だ、オーバーだ、ナンセンスだ
・具体的な意味を持つ形容詞を用いることで、聞き手の気分を心地よくさせる。 （属性形容詞）	お見事だ、さすがだ、素敵だ、立派だ、手頃だ、有望だ、スマートだ、ユニークだ
・話し手の感情を表す形容詞を用いることで、聞き手に同情を示す。 （感情形容詞）	惜しい、もったいない、意外だ、気の毒だ、残念だ、遺憾だ
・話し手の感情を表す形容詞を用いることで、聞き手からの同情を誘う。 （感情形容詞）	きつい、つらい、まずい、大変だ、迷惑だ

③名詞

・間接的な意味を持つ名詞を選択することで、聞き手の気分を害さない。また、話し手の品格を保つ。 （普通名詞）	老人→年寄り、お年寄り、シニア、シルバー／便所→手洗い、トイレ、化粧室／劣等感→コンプレックス／取り消し→キャンセル／もめごと→トラブル
・語種を活用し、固有名詞を造ることで、聞き手に親しみを感じさせる。 （固有名詞）	花王、資生堂、帝人、サントリー、パナソニック、KIRIN、YKK
・「名詞＋の」の後ろに形式名詞を付けることで、聞き手に直接的なニュアンスを感じさせない。 （形式名詞）	お荷物のほう、お預かりします ご指導のほどよろしく お忙しいところを
・すでに知っていると思われる事柄を示さないことで、聞き手にわずらわしさを感じさせない。 （指示代名詞）	それはあれだから あの件、どうなった？

④副詞

・動作の確実性や程度を表す副詞を添加することで、聞き手に重要性を感じさせない。 （情態副詞）	一応点検しておきます とりあえず“ノー”ということで なんとかやってみます どうにか大学に受かった
・動作や状態の程度・数量を表す副詞を添加することで、聞き手に甚だしさを感じさせない。 （情態副詞・程度副詞）	ちょっと、わからない まあまあ、うまくいっています 大体できたと思う 少々お待ちください
・動作や状態の程度・数量を表す副詞を添加することで、聞き手の気分をより心地よいものにする。 （情態副詞・程度副詞）	なかなかいいアイディアです とてもおもしろい たいへんお世話になりました かなり上手だ
・話し手の気持ちを表す副詞を添加することで、さまざまな面で、聞き手の心情に配慮する。 （陳述副詞・評価の副詞）	これはあまりよくないことだ たぶん来るでしょう 今度はぜひ誘ってください ただ今あいにく切らしています 幸いうまくいきました

⑤接続詞

・話題を転換する接続詞を用いることで、話し手の会話における唐突さを感じさせない。 （接続詞）	ところで、夏休みはどうするの さて、話は変わりますが それでは、私から発言しましょう
・補足や説明をする接続詞を用いることで、聞き手に内容の絶対性を感じさせない。 （接続詞）	なお、定員になり次第、締め切ります ちなみに、一冊三千円です 例えば、貿易なんかどうですか

⑥助詞

・範囲や程度の曖昧さを表す副助詞を付けることで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。 （副助詞）	お茶でも飲もうか アルバイトなどしています 友達になり相談したら 一時間ばかり待ってください 二つほどください
・不確実を表す副助詞を添加することで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。 （副助詞）	ご無理かと思います 難しいかと存じます お楽しみいただけるかと思います
・接続助詞を用いて後文を省略することで、聞き手に重く受け取られないようにする。 （接続助詞）	いいと思いますが ちょっと分からないけど 急用ができまして まだ来ていませんので この仕事が完成したら
・接続助詞を用いて範囲の曖昧さを表すことで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。 （接続助詞）	手紙なんか書いたりして 音楽を聴いたりしています
・同意・確認を表す終助詞を用いることで、聞き手に同調を求めている。 （終助詞）	よかったですね かわいそうにね ご立派なご主人さまですね
・詠嘆・驚きを表す終助詞を用いることで、聞き手の気分をより心地よいものにする。 （終助詞）	すごいなあ 花火、きれいだなあ
・疑問・軽い判断を表す終助詞を用いることで、聞き手に親密性を感じさせる。 （終助詞）	君は行かないの？ 外は風が冷たいですよ

・格助詞や副助詞を省略することで、聞き手に直截的なニュアンスを感じさせない。 （助詞の省略）	新聞（を）読む？ はさみ（を）借りていい 鍵（が）かかっている 君（は）どう思う？

⑦ヴォイス・アスペクト・ムード

・恩恵や利益を表す授受表現を用いることで、聞き手に感謝の気持ちを示す。 （授受表現）	いつも心配してくれる 中国のお茶を出してもらった なんとかしてくれませんか ペンを貸してもらえませんか
・アスペクトで、出来事の状態への変化を表すことで、聞き手に意思的なニュアンスを感じさせない。 （アスペクト）	式典が開催されることになりました 結婚することになった 東京本社に行くことになりました
・アスペクトで、動作における時間的なゆとりを表すことで、聞き手に心理的な余裕を感じさせる。 （アスペクト）	この資料、作っておいてください 英語の文、チェックしておきます その方に会っておきたいです 話しておきたいです
・コトの内容を不確実なものと捉えることで、聞き手に断定的なニュアンスを感じさせない。また、話し手の言葉への責任を回避する。 （対事的ムード）	この説は正しいようだ ちょっと雨が降りそうだ よくないと思う 彼は来ないだろう（でしょう） 一理あるかもしれませんが
・コトの内容の問いかけという形にすることで、聞き手に強制的なニュアンスを感じさせない。 （対人的ムード）	一度、食べに行きませんか ちょっと休憩しましょう 少々お待ちいただけませんか 食べてもいいですか このような見方もあるのではないか

⑧表現

・儀礼的な挨拶表現を用いることで、聞き手に親近感を感じさせる。 （挨拶表現）	こんにちは、さようなら、お元気で、ありがとうございます、すみません、お世話になっています、よろしくお願いします、お疲れ様です、おめでとうございます

・あいづちや受け答えをすることで、聞き手との間に同調の関係を築く。 （応答表現）	はい、ええ、そうですか、そうですね、道理で、なるほど、よかったね、わかります、いいえ、いや
・前置き表現を用いることで、話し手の発話における唐突さを感じさせない。 （前置き表現）	おかげさまで、すみませんが、恐縮ですが、よろしかったら、つまらないものですが、お手数をおかけしますが
・比喩的な特徴のある慣用句を用いることで、聞き手に心理的な負担を感じさせない。 （慣用句）	腹をこわす、手が離せない、頭が痛い、骨が折れる、長い目で見る、足が出る、馬が合う、気が置けない
・慣習化している連語を用いることで、聞き手に心理的な負担を感じさせない。 （連語）	考えておきましょう（考えておく） いい勉強になりました（勉強になる） お力になれなくて（力になる） 都合が悪いのですが（都合が悪い） 貴重な人材を失った（人材を失う）

⑨敬語

・話題の対象への敬意を表すことで、程よい距離感を保ち、聞き手にとって好ましい印象を与える。 （尊敬語・謙譲語・謙譲語Ⅱ）	（尊敬語）いらっしゃる、おっしゃる、召し上がる、お読みになる、ご利用になる、読まれる、来られる （謙譲語）伺う、いただく、拝見する、お届けする、ご案内する （謙譲語Ⅱ）参る、いたす、おる
・丁寧な言い方をすることで、聞き手への敬意を表し、好ましい印象を与える。 （丁寧語）	読みます、食べます、高いです、静かです、学生です、ございます
・上品に美しく表現することで、聞き手に良い印象を与える。また、話し手の品格を保つ。 （美化語）	お酒、お料理、お化粧、ご祝儀

⑩その他の形式

・接尾辞を付けて間接的な意味を持たせることで、聞き手に直接的なニュアンスを感じさせない。 （接尾辞）	理想的な状態、時間的な問題、初歩的なミス／個人的には、一般的には、基本的には、将来的には

これらの機能をみていくと、まず、日本語の配慮表現は、各形式にまたがって存在していることがわかる。さらに、一つの形式に複数の機能が含まれている。

そして、実際のコミュニケーションでは、配慮表現は、「ちょっと難しいかと思う」のように、複数の形式を重ねて使われる。本研究の形式分類でいえば、「ちょっと（程度小の意味で甚だしくさせない）／難しい（間接的な意味で心理的負担を軽減する）／か（不確実な意味で断定しない）／と思う（推量の気持ちで断定しない)」のように、さまざまな機能が存在することがわかる。また、コミュニケーションの場面において、聞き手にとって適切な配慮表現となるように、話し手は各要素を組み合わせている。一方で、断る場面の「考えておきます」のような慣習化された表現は、連語であっても、各形式における部分的要素からの説明は難しい。この場合は、一連の語として捉え、その言葉の意味と機能を理解しなければならない。

本研究で示した形式分類のリストは、日本語母語話者や外国人日本語学習者が、体系的に配慮表現を理解するのに役立つものと言える。

本研究では、配慮表現の形式分類を行ってきたが、これですべてを説明できるわけではない。今後の課題としては、より多くの配慮表現の例文を収集し、配慮表現が多い副詞を中心に、本形式分類を確実にさせることである。その上で、配慮表現の本質的な機能を追求することである。または、日本語母語話者、さらには外国人日本語学者者を対象とした、実践的な指導法を考えることである。

謝辞

本稿の執筆にあたって、大学院時代の恩師である京都外国語大学外国語学部の彭飛教授に、心より感謝を申し上げます。彭先生のご研究の成果があったからこそ、本研究テーマに取り組むことが出来ました。彭先生の弟子として、配慮表現研究の発展に少しでも貢献できれば嬉しく思います。

注

1）山岡（2019）は、「一定程度以上に慣習化された言語表現」について、「当該語彙の原義から見れば派生的用法であった配慮表現の用法が定着したもの」（p. 38）と示している。

2）国文法の考えを採り入れているのは、主に、以下の分類の仕方である。形容詞（属性形容詞、感情形容詞)、名詞（普通名詞、固有名詞、形式名詞、代名詞)、副詞（情態副詞、程度副詞、陳述副詞)、助詞（格助詞、副助詞、接続助詞、終助詞）

3）主に筆者が補った例やその機能は、接続詞（なお、ちなみに、例えば)、終助詞（なあ、の、よ)、アスペクト（ておく)、敬語、接尾辞（的）などである。

4）本稿では、「大きな」、「小さな」、「おかしな」などは、連体詞ではなく、形容詞の連体形の活用の一つとして扱うこととする。
5）本論文では、「この」、「その」、「あの」などは、連体詞ではなく、指示代名詞の連体詞的用法として扱うこととする。
6）「ちょっと」は、「ちょっと出かける」のような情態副詞でも、「ちょっと多い」のような程度副詞でも確認できる。また、本来の意味を越え、「ちょっとおかしい」として、暗示的に程度大を表したり、「ちょっと手伝ってください」として、緩和的に使われたりする。
7）辻（2017）で、対人配慮の視点から、「～ておく」に関して考察した結果である。
8）「～ておく」は動きの一局面を表していないことから、厳密にはアスペクトの表現ではないとされる。
9）表現の機能のうち、挨拶表現と応答表現は、『現代日本語文法 7』（p.144）における間投表現と応答表現の分類を参考にしている。挨拶表現は、同書の間投表現の「あいさつ」からである。応答表現は、同書の応答表現の「あいづち」と「受けこたえ」からである。
10）山岡（2019：p.55）でも、敬語はネガティブポライトネスの一つの表現方法であり、配慮表現の一つと考えている。また、敬語は文法形式の交替に属すと考えており、他の分類にも部分要素として横断的に現れることから、敬語という独立区分を設けていない。本研究については、配慮表現は、横と下の相手にも用いられるが、敬語は、主に上の相手に用いられる。このことから、限定された機能として、敬語を独立させている。
11）文化審議会（2007）「敬語の指針」の敬語の分類を参考にした。

参考文献

日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 7』（くろしお出版）
高見澤孟（監修）（2019）『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』（アスク出版）
辻周吾（2017）「補助動詞の『～ておく』に関する一考察：対人配慮の視点から」『国際言語文化学会日本学研究』(2)、pp.21-40
野田尚史・高山善行・小林隆（編）（2014）『日本語の配慮表現の多様性』（くろしお出版）
原沢伊都夫（2010）『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』（スリーエーネットワーク）
彭飛（2005）『日本語の「配慮表現」に関する研究 中国語との比較研究における諸問題」（和泉書院）
山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』（明治書院）
山岡政紀（編）（2019）『日本語配慮表現の原理と諸相』（くろしお出版）
文化審議会（2007）「敬語の指針」2022 年 12 月 1 日検索
（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf）

外国人留学生における日本語の発音の問題について
Some Issues in Japanese Pronunciation of Foreign Students

山﨑　誠

Summary

This paper presents the analysis of a survey used a questionnaire about Japanese pronunciation for foreign students. The results show that the problems with pronunciation among students are alveolar "consonant sounds" In phonetics.

はじめに

外国語学習においては、「文法・読解・作文・会話」の４つの技能が重視され、授業や各検定試験においてもそれらの能力の向上がターゲットとなっている。例えば、英語教育において日本の文部科学省や英国の英語教育機関である British Council が４技能の向上を課題としていることからも、その重要さは広く認知されていると言えよう。

そして４技能の「会話」に関しては「コミュニケーション能力」として、その向上を目標としているものが多く、日本で行われている検定試験の「話す」分野において、英語検定は５級から１級まで発音に関しては触れておらず、フランス語検定では１級と２級の上位の級で発音についての判定が加わると考えられる。それぞれ「話す」分野において、以下のような記載があった。

英語検定の審査領域　「話す」
１級：社会性の高い幅広い話題についてやりとりすることができる
５級：初歩的な内容についてやりとりすることができる。

フランス語検定　「話す」
準２級：簡単な応答ができる。
１級～２級：コミュニケーション能力（中略）とフランス語力（発音・文法・語・句）を判定する。

これらを見ると、英語検定では会話を「やりとりする」コミュケーション能力を審査し、フランス語検定では上級において「発音」を判定基準の一つとしており、それ以外の級ではコミュニケーション能力が中心であると考えられる。

しかしながら、実際に新しい言語の発音を会話しながら自然に身につけようと思っても一朝一夕にはいかず、母語との音韻体系が似ていない限り、数年単位の時間が必要であろう。そして学べば学ぶほど難しく感じるのが一般的であろう。

そのため、日本語学校や大学などの語学の授業においては、現実的な問題として、就学年

数や授業数、またスケジュール的にも発音学習に多くの時間を費やすことができないのが現状である。しかも発音以外にも学習すべき学習項目は「文法、聴解、読解、語彙」など多岐にわたっている。このような状況において発音指導を望む学生は、弁論大会に出場するのでもないかぎり、ほとんどいないのが現状であろう。

そして、母語の「発音」は、私たちが生まれた時から言葉を自然と身につけてきたという経緯があるため、「学習言語」においても話しているうちに自然に身に付けることができると考えがちであるため、授業に音声教育を取り入れるハードルは高い。

そこで本稿は発音に焦点を当て、「学生が日本語発音についてどのように思っているか」という意識調査を行い、音声指導に役立てるべく考察を行った。

まず、日本に留学している大学生を対象にアンケート及びインタビュー調査を行い、日本語の発音に関する問題について考察した。

・アンケート対象者：大学の学部生　１年生～３年生　50 名
（ベトナム 20 名、中国 16 名、ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｨｼｭ７名、香港４名、ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ、韓国、台湾各 1 名）

・日本語学習歴：約２年～５年（対面授業及びオンライン授業）
母国での日本語学習歴：平均 10 ヶ月
日本での日本語学習歴：平均 23 ヶ月
日本語学習時間合計：平均 33 ヶ月

また、大学の授業だけではなく、アルバイトなどの仕事の上での会話や日本人との会話の中で、留学生の日本での生活において発音やアクセントを間違ったり正しい発音ができなかったりしたために起こったコミュニケーションの失敗などについてもまとめてみた。これはアンケート内での記述とインタビューの両方を採用して考察に応用した。

１．音声教育

1.1.「発音とは」

音に関しては諸説あるが、本発表では人間が発声器官で発した話し言葉としての音を扱い、「咳やくしゃみ、唸り声」などは対象としないこととする。先行研究や辞書をもとにして音と音声、発音の違いを比べた。

・「音」物の振動によって生じた音波を、聴覚器官が感じとったもの。
・「音声」人間が音声器官を通じて発する音、話し言葉として発する音
・「発音」音声を出すこと。言語音を出すこと。また、その音声の出し方。

これらの定義に基づいて本稿では、人間がコミュケーションを行う際の「音声」と「発音」を研究対象とし、音声学的な解釈を加えながら考察を進める。

1.2. 音声教育の難しさと日本語教員の感じる問題

大学に入学したばかりの留学生の中には、新しい環境に慣れていないこともあり、学生同士や教員とのコミュニケーションがうまくできない学生が散見される。その中には「お互いに話の内容は理解していても、留学生が話す日本語を教師が聞き取れない」、「日本語は聞いて理解できるがほとんど話せない」、また「読み書きはできるが、聞き取りも発音も悪く、通訳が必要なレベルではないかと感じる」といった学生もいる。

このような場合に文法や語彙の間違いを修正することも多いが、実際には単語がうろ覚えであるために起こる間違いもある。さらに、「発音」の間違いは「語彙」の覚え間違いだけではなく、長音や促音などの発音が正確にわからず、学生自身の問題に起因して正しく覚えられなかったり、違う音で聞き取ったりすることもある。

このようにコミュニケーションにおける問題の要因は一つではないため、学生の話す日本語のどこに問題があるのか多方面からの原因究明が必要であろう。このことがきっかけで、問題の一つであろう「発音」の問題に着目し、研究を試みた。

1.3. 現場の日本語担当教師が音声教育に感じている問題

音声教育において発音指導を行う教師が感じる問題点について先行研究および自身の経験をもとに、教師側と学生側の問題について分類した。

「教師側の問題」

1. 学生の発音の違う部分が具体的にわからなかった。
2. 具体的にどう発音指導したらいいかわからない。
3. 軟口蓋など言語学の専門用語がわからない。母語に翻訳しても理解されなかった。
4. 発音指導したが、正しい発音ができるようにはならなかった。

「学生側の問題」

１．図などで発音の説明は理解できても、正しい発音はできなかった。
２．学習者の中には何度練習しても正しい発音ができない学生がいる。
３．発音指導をすると、学習者が嫌そうにする。
４．発音指導をしても、数日後には悪い発音に戻ってしまう。
５．単語では正しい発音できても、文中ではうまく発音できない。

実際の発音指導については日本語教育能力検定試験の試験科目にもあるように、多少の音声学・音韻論の専門知識が必要であるが、言語学が専門ではない教師や学生にとっては、そ

れを母語に翻訳しても理解は難しいのが現実である。

また、授業内外にかかわらず、発音を指導するには、ある程度の時間を要し、また反復練習も必要であるため、効率よく進めることが大切であると考える。

1.4. 学生の言語学習環境

今回対象となる学生の中には、日本語学校で発音指導の授業があまりなかったか記憶にないという学生が多かった。

そこで授業前後に時間を取り、特殊音などの発音について少しずつ説明していくと興味を持って聞く学生が多くなり、このことは発音指導の良いきっかけになると感じた。さらに学生に生活状況を聞くと、日本にいながらもルームメイトやアルバイト先などで母国の留学生といる時間が長く、日本語だけを話すという環境が少ない状況であり、日本語母語話者の日本語を聞く環境が少ないことがインタビューでわかった。

現状、全体の授業時間の関係で発音指導の時間は多くとれない状況であるが、大学においては留学生であっても学年が上がるにつれて日本人の前で発言をする機会も多くなるため、できるだけ早期に発音指導すべきであると考える。

２.「間違い」とは何か

2.1.「間違い」の定義

「間違い」と一言で言っても様々な要因が考えられ、第二言語習得の分野においては先行研究の多くはいくつかの項目に分けている。また言語学の分野では、「間違い」を扱うというよりは音素、形態素、意味、語彙など広範囲の言語事象を扱うことが多く、それぞれの範疇における違いを客観的に比較し、その言語上の違いとして考察している。

しかし言語学的知識を用いて専門的な説明を加えても、いたずら難解になりかねないため、ここでは第二言語習得の分野における「間違い」を中心に述べていきたい。

2.2 第二言語習得における「間違い」

第二言語習得の分野では、「間違い」をすぐに自分で訂正できる言い間違いレベルのものを「mistake」、さらに間違いがわかっていないものを「error」と呼び区別している。

また、言語習得の段階での間違いは必要な成長と考え、母語でも目標言語でもないこの成長過程にある言語を「中間言語(interlanguage)」と呼んでいる。ここで扱う留学生の日本語は、この中間言語に相当するものであると考える。

上記の定義を踏まえて、誤用をまず「mistake」と「error」に分け、次に「error」をさらに「音」に関する「音韻単位」そして単語を中心とした「語彙単位」、「その他」の３つに分けて考察を行おうと考えている。その他の問題は適宜、説明を加えることとする。

2.3. 「間違い」の分類

本研究で扱う留学生の「間違い」の分類について「過剰般化」、「音韻における拍の間違い」、「語彙形態」に分けて考えていきたい。

・「過剰般化」：言語習得において、特定のルールを過剰に一般化させる現象のこと。
例えば、英語：go（現在形）－＊goed　（過去形 went の間違い）
日本語：静かではない－ *静かくない（形容詞の活用の間違い）

・「拍」：日本語の場合、俳句は五七五で 17 音と言われ、日本語のリズムを考える時の単位でありモーラともいうが、このリズムを間違えてしまう。
2 拍/３拍：ビル/ビール、 一緒(いっしょ）/一生(いっしょう)

・「語彙の形態」： 濁音などの間違い。
「ぱったり」を「ばったり」と間違うなど。

2.4. 学生の「間違い」によるコミュニケーションの失敗

以下は、対面でのインタビューで実際に留学生が実生活において経験した日本語の間違いを前述の間違いの分類に合わせてまとめたものである。このような間違いは、我々も日常生活において、コンビニエンスストアーやスーパーマーケットなど外国人従業員に接した際に出くわす可能性があり、また日本語母語話者として外国人日本語学習者の習得の難しい部分であろうと共感できる。さらに日本語の方言に関しては、日本人でさえその地方の方言に慣れるまでは、聞き取れなかったり、聞き間違いなどは当然起こりうる問題であると考える。

・「mistake」の例１（音韻(拍)と語彙）
アルバイトをしているときに若い女性の同僚が来て、「かわいいですね」というべきところを「コワイ(怖い)ですね」と言ってしまい、恥ずかしかった。

・「mistake」の例２（形態・音韻）
アルバイトの面接で「日本語はペラペラではありませんが…」というところを緊張して「パラパラではない…」と言ってしまい、不合格になったのはそれが原因だと思う。

・「error」の例１（音韻・拍の間違い→意味）
学生 A がアルバイトをしている時、コーヒーを数本買った客との会話で、客は「なんぼ？」と聞いたのだが関西弁がわからず、「なんぼん？」と聞かれたと思い、「コーヒーは３本です。」といったところ、「え？ちゃうよ。いくら？」と質問され、コミュニケーションがうまくいかず、もっと勉強するように客から言われた。

・「error」の例２（語彙→濁音・形態）

学生 A は、アルバイト先で後輩の留学生 B に日本語を教え、B の間違いを指摘しているが全然直らない日本語があるという。それは「またお越しください」と「まだおこしください」である。しかし教師が聞く限り、教える側の当該学生 A の日本語「また」と「まだ」の区別は全然できておらず、同じに聞こえた。

・「error」の例３（過剰般化）

学生がコンビニエンスストアでアルバイト中に買い物客にレジ袋の要不要を尋ね、敬語を使って「おふくろは必要ですか？」と聞いた。客は驚き「お袋はお母さんの意味だ」と言われた。店長にこの状況を話したところ、客に指摘された日本語が本当であることがわかり、恥ずかしかった。

・「error」の例４（音韻・アクセント）

学生がアルバイト中、ちょうど忙しい時だったため同僚が出勤しても気づかず、挨拶をしなかった時に、「ムシかよ」と言われた。学生が「私は虫じゃない。何言ってるの。」とムッとして言ってしまった。その後「虫」ではなくて「無視」だと言われて恥ずかしかった。

３．学生に対するアンケートの考察

3.1. アンケートについて

今回学生に行ったアンケートは４段階の強さの選択と文字の自由記入によって行い、日本語で答える形式で、時間は 20 分程度で行った。以下はアンケートの内容を要約したものである。

1. 「日本語の発音は難しいか」
   →日本語の発音を意識しているかどうかを問う
2. 「難しい発音は何か」（難しいと思う発音を記述）
   →日本語の五十音図+α で、どの音が難しいかを問う
3. 「アクセントを間違えた事があるか」
   →自分の発音を意識しているかを問う
4. 「長音、短音を間違えた事があるか」
   →日本語の音韻の特徴である母音の長短を意識しているかを問う
5. 「小さい「っ」を間違えた事があるか」
   →特殊拍「っ」を理解しているかを問う
6. 「上記２～４について難しいと思う順に並べる」
   自分の発音で一番気になる、または苦手な部分を問う

3.2. アンケート結果

今回のアンケートは「発音とアクセント」が中心で、それぞれを 4 段階で評価し、学習者が難しく感じているものに焦点を当てて分析を行なった。今回は特に難しい発音の具体音の記述を併せて求めたため、書面で行なった。そして具体的にわからない箇所があれば説明を加えてアンケート結果の精度を高めた。

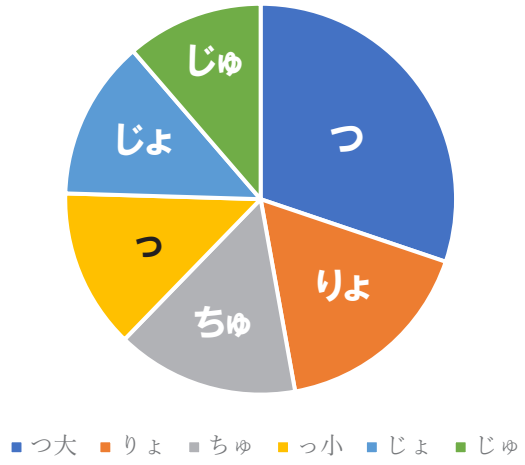
また、アンケート結果の項目について、答えの曖昧な部分はインタビューによる質問を行い、曖昧さを解消した。その結果、ほぼ全員が細部に至るまで考えながら答えを記入することができ、データーの数もある程度増やすことができた。

4．アンケート分析

4.1 難しい日本語の発音

学生が普段の会話において、難しいと思う発音について質問し、そのアンケート結果をもとに割合をまとめグラフに表した。

図 1　難しい日本語の発音



1.「つ」、2.「りょ」、3.「ちゅ」、4.「-っ」および「じょ」、5.「じゅ」の順

「 つ 」32%：無声歯茎破擦音
「りょ」18%：歯茎側面弾き音＋拗音
「ちゅ」16%：無声硬口蓋歯茎破擦音＋拗音
「 っ 」14%：促音（後続の音により-p, -t, -k と発音する）
「じょ」14%：有声硬口蓋歯茎破擦音＋拗音
「じゅ」12%：有声硬口蓋歯茎破擦音＋拗音

この結果から、今回アンケートを行った学生のうち、難しい音で一番多かったのはタ行の「つ」で、4番目が促音の「っ」であるが、それ以外は拗音が後続したものを選んでいる。そしてそれぞれの音に対して音声学的見地から解釈を加え分析を行った結果、これらの音に多く共通しているのは、音声学的に「歯茎音」および「拗音」であるということが導かれた。

この結果は、単に「つ」の音は難しいというだけでなく、具体的に「歯茎音」を持つ音を重点にした発音指導のアプローチを示唆するものであると考える。この結果は音声指導において大きな意義があると考える。

さらに今回のアンケート結果により、インフォーマントである大学生の苦手な音は「歯茎音」と「拗音」の組み合わせであることも明らかになった。そしてこの結果を多くの日本語学習者に対する音声指導に活用できれば、効率よく習得または修正ができるのではないかと考えた。そしてその他にも外国語の音を転記する「ヴ」、「ティ」なども少数ながら選ん学生がいたことから、早い段階で外来語表記に使うこれらの音についても説明が必要であろうと考える。

4.2 発音、アクセント、長短、特殊拍の難易度順について

上記の具体的な発音の他に学生の意識調査としてa.発音、b.アクセント、c.長短、d.特殊拍の難易度順についても考察していきたい。それぞれの項目について間違いの頻度をアンケートで行った。そして「よくする：４点、時々する：３点、あまりしない：２点、よくわからない：１点」の４段階に分け、点数化したところ以下のようになった。

b.アクセント 30% ＞ c.長短 25.8% ＞ a.発音 24% ＞ d.特殊拍 19.5%

その結果、学生の意識としては発音よりもアクセントが難しいという結果になった。日本語学習歴が上がるほど、アクセントが難しく感じるのは、アルバイトなどで日本人とコミュニケーションをとることが多いことも考えられるが、この点については割愛し、今後の課題として引き続き考察を続けたいと思う。

５． 発音の問題に対する解決方法

間違えた音の調音点を具体的に学生に説明しても、言語学を勉強していない学生には、すぐに理解ができない。そこで自身の発音の体験を利用したり、図などで視覚化したりすることで自分の間違いを修正できれば、今後の授業にも役立つであろうと考えた。

特に発音における調音点の指導は専門用語を使わず、調音点が近い音を利用して説明すると体験的に理解できると考えた。

以下に今回のアンケート結果の中から「つ」を取り出し「調音点」の観点から具体的な指導方法の一例を考えた。

5.1. 日本語の発音に対する具体的指導方法

「つ」は ts+u であるが、「ちゅ」ch+u と混同して発音してしまう場合が多く、舌の位置つまり調音点を修正するように促すと効果的であると考える。具体的な指導例は以下のとおりである。

①「つ」の子音である ts の音をまず体感させる。
→「た」は比較的どの言語にも共通する歯茎音であるので「タタタタ…」と連続して発音させ、歯茎の調音点を体感させる。これは調音点の近い別の歯茎音を練習することで、舌が喉の奥(軟口蓋)に向かって動かないようにするのが目的である。

② 母音 u の音を体感する
→日本語の「う」は非円唇母音なので、口が尖らないように注意する。
唇に力を入れないように「う」という練習をする

このような調音点を利用した発音指導の詳細な考察はこれからの課題とするが、できる限り専門用語を使わずに指導できる方法を確立できればと考えている。

5.2. アクセントの問題に対する解決案

次に、アクセント指導に関しては、「橋、箸、端（ハシ)」や「神、髪、紙（カミ)」などの単語の発音のアクセントの区別だけでなく、「助詞」をつけて発音することを想定して、後続の助詞のアクセントも考慮すべきであることにも注意しなければならない。

今回のアンケート結果から、アクセントについても課題を見出すことができたが、今回の考察は「発音」について焦点を当てて行ったため、単語や助詞のアクセントについては言及せず、今後の考察として考えたい。

現在のところ、先行研究でもアクセントについての厳格な法則は明らかにされていないようであるが、和語と漢語に分けるなどして、単語や助詞のアクセントのルールを見出すべく考察を続けたい。そして今後も学生のアンケート調査を中心に音声教育に活かせるように具体的な指導法を考えていきたい。

6. まとめ

留学生は、そのほとんどが日本人の学生と交流して友達になりたいと思っているが、日本語力に問題を感じている学生も少なくない。例えば、留学生が話す日本語が通じなかったり、反対に日本人の話す日本語がわからず会話が続かなかったりするなど、コミュニケーションに関して日常的に問題を抱えていることが多い。このような問題は文法や語彙の能力不足にも起因するが、発音が関係している部分もあると考え、今回、アンケートを実施して考察を行った。

そして留学生の発音に関するアンケートを分析した結果、発音に関する問題が類似しており、難しいと挙げた発音のほとんどが「つ、りょ、ちゅ、じょ、じゅ」の「歯茎音」にあることが明らかになった。さらに詳しく見ると「歯茎音」に「拗音」が加わった音を難しいとして選んだ学生が大半を占めていたこともわかった。この結果が今後の音声教育における発音指導に大きな効果をもたらすであろうと期待する。

また、個々の発音、特殊拍よりも、イントネーションが難しいと感じている学生が多かったことはもう一つの結論であり、同時に更なる研究課題へと繋ぐことができた。

音声教育を行うことでスムーズなコミュニケーションを促すことができれば、学生の日本語学習におけるモチベーションにもつながるであろう。そして今回のこの研究結果が学生に還元できれば、日本語力の向上に貢献できるであろうと考えている。

参考文献

福盛貴弘(2010)『基礎からの日本語音声学』東京堂出版

鹿島央(2021)『基礎から学ぶ音声学』第 13 刷　スリーエーネットワーク

橋本学(2006)『第二言語学習者の誤用に関する分析を第二言語教育に活かすための予備的考察』(岩手大学人文社会科学部紀要第 78 号)

松崎 寛 (2016)『日本語音声教育における韻律指導 -CALL システムを用いた教材開発の動向-』音響学会誌 72 巻 4 号 (2016) pp. 213-220

榎本正嗣(2006)『現代日本語発音の基礎知識』学文社

英語検定ホームページ　https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/criteria/
2023 年 1 月 28 日検索

フランス語検定ホームページ　https://apefdapf.org/dapf/presentation/detail
2023 年 1 月 28 日検索

日本語学習者を対象とした自己紹介シートの作成
―オンラインツールの利用の試み―

Creating a Self-Introduction Sheet for Learners of Japanese: An attempt to make use of online tools

佐古　恵里香・山内　信幸

Summary

This paper proposed the advantages of using online tools in Japanese language classes through a report on a practical class using Google Jamboard, followed by an analysis of the results of a survey. First, we asked 32 intermediate- to advanced-level learners of Japanese to write a self-introduction on Google Jamboard called “Self-introduction using the SWOT analysis” (a written sheet). After one week, we requested that they present their self-introduction in class. Following this, we conducted a survey on a 6-point Likert scale to use two analyses methods. One was a *t*-test conducted on the six questions asked in the survey, and the other was an *F*-test, for each question, based on the learners’ attributes of two native languages, Chinese and Korean. The results of these analyses indicated that the sheets provided proved to be more useful for understanding the presentations of others than for understanding one’s own since the mean evaluation value was higher for all questions and the variance in the responses was relatively small. Finally, we maintained that adopting online tools was helpful for supporting learning processes and improving mutual understanding of each other because those learners who had difficulty listening to the self-introduction presentations (auditory information) made use of the sheets provided (visual information) to supplement what they did not understand well when listening.

１．はじめに

2020 年 1 月頃から始まった新型コロナ感染症の大学講義への影響は、2023 年 1 月現在においては、徐々に解除されつつあり、この機会に、この 3 年間における遠隔授業の知見をまとめて、今後の授業にどのように活用していくのかを考えることは重要なテーマとなりうる。本稿では、筆者らがこれまでに使用してきたオンラインツールの中でも、無料で、使用汎用性が比較的高い Google Jamboard[1]（以下、Jamboard）を利用した日本語授業の実践と中上級日本語学習者のアンケート調査の分析を通じて、オンラインツールの授業における自己紹介の支援ツールとしての利用法の利点を提案する。具体的には、中上級日本語学習者を対象に、Jamboard を利用して作成した「SWOT 分析を用いた自己紹介シート」（以下、本シート）の回答と発表練習という課題を与え、その 1 週間後に、自己紹介をさせた。発表後、6 段階評価の尺度法を用いたアンケート調査を実施し、回答に関して検定を実施した。本稿では、こうして得られた結果の分析と考察を行う。

２．先行研究

これまでの 3 年の間に大学において様々なオンラインツールを利用した試みがなされてきたが、本稿では、Jamboard を採りあげる。このツールは、コロナ禍の初期の頃から、双方向コミュニケーションツールの 1 つとして、注目を集めてきた。例えば、台湾の大学における実践では、方（2022: 48）は、「Jam board［原文ママ］は、その場にいる人に Jam board［原文ママ］を共有・同時編集しながら、ディスカッションすれば、よりインタラクティブに話し合いが進められる。」と述べており、授業における Jamboard の有用性が主張されている。また、Sako & Yamauchi（2022）においては、初級日本語学習者と日本人学生との交流クラスにおける円滑なコミュニケーションのために、Jamboard を利用した実践報告や佐古（2022）においては、中上級日本語学習者における「おすすめの料理のレシピ」のオンライン上での共有などが提案されており、様々な授業実践が報告されている。

３．調査概要

3.1 調査目的

本稿では、Jamboard を利用した日本語授業の実践や中上級日本語学習者のアンケート調査結果の分析を通じて、オンラインツールの活用について提案することを目的としている。

3.2 調査対象と流れ

実践授業は、2022 年 10 月 3 日（第 1 回目授業）と 10 月 10 日（第 3 回目授業）に行った。第 1 回目の授業において、本シートの使い方や自己分析の仕方について説明した。次に、10 月 10 日までに本シートの回答を完成させることを課して、1 週間後のオンライン授業[2]で自己紹介をさせるという流れとした。また、授業後に、当授業に関するアンケート調査を行った。アンケート調査は、Google Forms を用いて、実施した。アンケートの実施期間は 2022 年 10 月 10 日～10 月 19 日とし、被験者は京都府内の大学の留学生（32 名）で、その内訳は中国（25 名）、韓国（6 名）、ベトナム（1 名）であった。授業後に、アンケート調査を実施して、学習者に 6 段階評価をさせた。それらの調査結果を基に、定量的な分析を行う。

3.3 SWOT 分析とは

SWOT 分析とは、経営学において用いられる分析方法の 1 つである。金森・荒・森口（2013: 1419）によると、「経営戦略の策定のために、その企業や個人が置かれている内外の環境に注目し、内部資源の強み（Strengths）と弱み（Weaknesses）、外部環境にある機会（Opportunities）と脅威（Threats）の 4 つの側面から評価する方法」と定義されている。

一般的に、教育において、SWOT 分析を取り入れた自己紹介はあまり採用されていないが、本稿では、この分析方法によって、学習者自身に「強み」と「弱み」を再認識させることができ、さらに、将来なりたい自分を自己実現させるための内部要因を整理させたり、自分の

力では変えようのない社会事情における「脅威」や「機会」などの外部要因を把握させたりすることで、自分自身の能力（できること）とそれらがどのように社会に役に立つかについて自己確認をさせることができる有為なツールと考えて、採用を決めた。一般的な自己紹介において得意なことや不得意なことなどを紹介するだけでなく、自分の能力がどのように社会に活かせるのかなど、客観的な自己判断を意識づけることにつながると考えられる。また、単純に「私の趣味は映画を観ることです。」という内容よりも一歩踏み込んだ自己開示につながると考えられる。一般的に、自己紹介の際に、自分の「苦手なこと」は開示しにくいが、SWOT 分析において、それらを「弱み」として、自己分析させることで、自分の苦手なところを授業の早い段階で友人と共有することができ、対人関係の形成において、不要な摩擦を抑え、友好的な関係性の構築を可能にするのではないかと考えられる。本稿では、学習者がより深い自己開示を自然な形で行えるようなクラス作りやオンライン配布物のデザインの提案を試みる。

3.4 SWOT 分析自己紹介シート

まず、荻原・斉藤・増田・伊藤（2005: 11）や鎌田・冨山・山本・ボイクマン（2012: 10-11）の中上級日本語教科書やリクナビ就職準備ガイド（2022）などの現在の就職活動関連のインターネットサイトから着想を得て、以下、図 1 のような本シートを作成した。

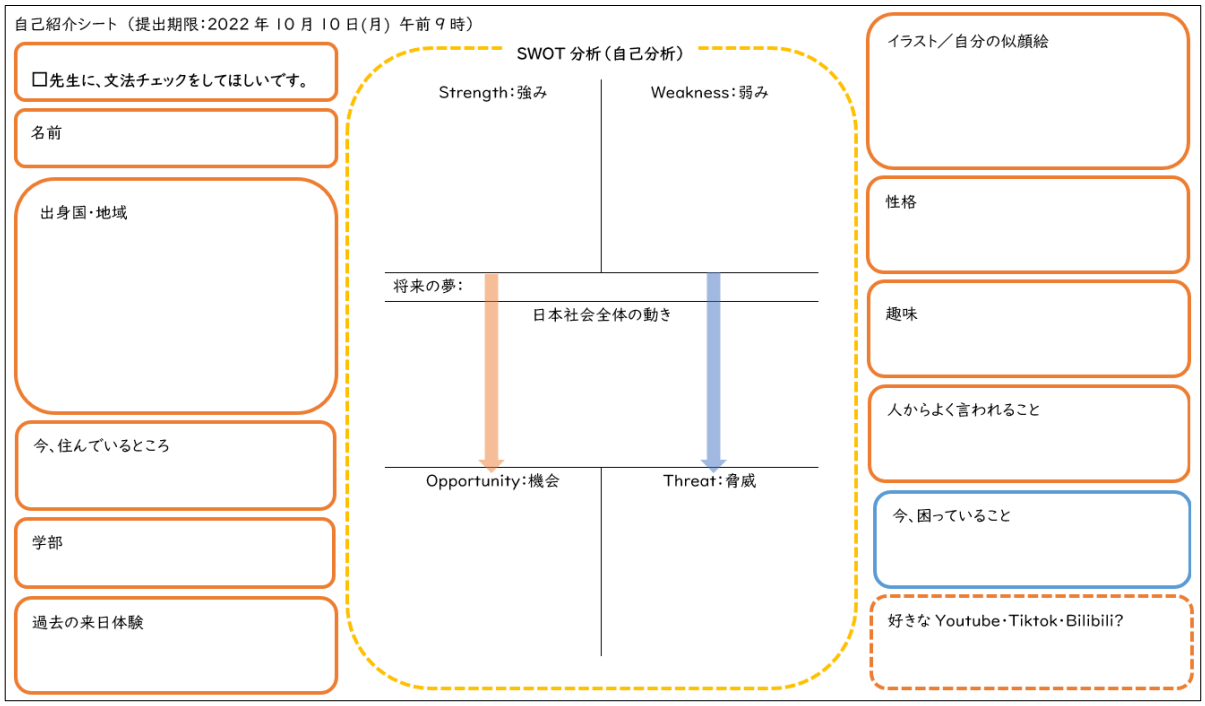


図 1　作成した本シート

以下、表 1 は、本シートにおいて使用した語彙である。

表 1　本シートに利用した人の性格を表す語彙の一覧

単語				
真面目	頑固	謙虚	行動派	飽き性
世話好き	負けず嫌い			
文				
集中力がない	人見知りしない	単純作業が苦手	デザインが得意	友達を大事にする
語学の勉強が好き	フットワークが軽い	命令されるのが嫌い	じっとしていられない	何でもはりきってしまう
コツコツとやり続けられる	難しいことに挑戦するのが好き	一人で黙々と何かをするのが苦手		

※単語や文は、日本人学生が就職活動の際に実際に使用しそうなものを筆者らが選定している。

図 2 は、Jamboard の基本的な機能である「ポストイット機能[3]」や「画像挿入機能」を活用したレイアウト見本例である。

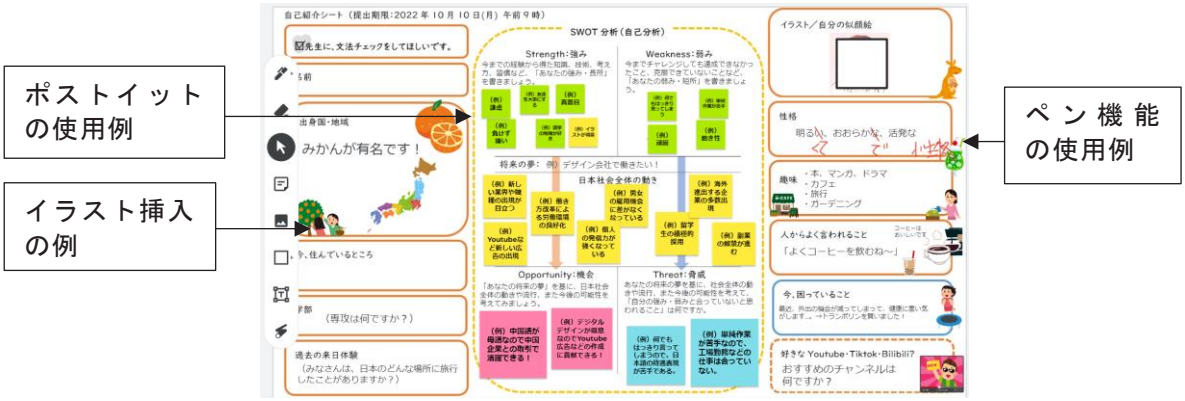


図 2　筆者らが Jamboard 上で提示した見本例

Jamboard では、画像の挿入や移動を感覚的に操作できる。図 2 のように、文字だけでなく、イラストのレイアウトも自由に操作することで、書き手は、読み手に、より具体的な内的イメージを視覚イメージ[4]として伝えることができる。

これらの単語や文を見本として、Jamboard の「ポストイット機能」を使い、あらかじめシートに例示しておいて、その中から自分の性格に合う言葉を選んだり、自由に加えたりさせながら、自分自身の「強み」と「弱み」について分析させ、それらをどのように日本社会や国際社会に活かすことができるのかについて考えさせた。まず、内部要因としての強みでは「今までの経験から得た知識、技術、考え方、習慣など『あなたの強み・長所』を書きましょう。」とし、弱みでは「今までチャレンジしても達成できなかったこと、克服できていないことなど『あなたの弱み・短所』を書きましょう。」と指示を出した。また、外部要因として、機会では「あなたの将来の夢を基に、日本社会全体の動きや流行、また今後の可能性を考えてみましょう。」とし、脅威では「あなたの将来の夢を基に、社会全体の動きや流行、また今後の可能性を考えて『自分の強み・弱みと合っていないと思われること』は何ですか。」という指示を出した。

次に、図 3 は、学習者のシートの記入例である。（シートは学習者の許諾を得て提示しているが、個人情報については、筆者らの判断により開示していない。）

学習者 1　　学習者 2



図 3　Google Jamboard を使用した「SWOT 分析自己紹介シート」の例

学習者の中には、学習者 1 のように、オンラインツールの使用に長けている者もいて、ペンタブレットで Jambaord に直接書き込んでいるものもいた。オンラインツールではあるが、学習者の好みによって、自筆に近い字を書いたり、Microsoft Word などと同じように、文字入力したりすることを選ぶことができるのは、近年のオンラインツールの強みである。

3.5 調査方法

授業後にアンケート調査を行い、各質問に 6 段階評価で回答させた。評価と数値の配分は、以下の通りである。「1. 全然そう思わない」、「2. そう思わない」、「3. あまりそう思わない」、「4. まあまあそう思う」、「5. そう思う」、「6. とてもそう思う」である。各質問には、その理由の記述も課した。表 2 は、質問をまとめたものである。

表 2　質問紙の内容

番号	質問内容
質問①	自己紹介シートは、自分の発表の理解に役に立った。
質問②	その理由を教えてください。
質問③	クラスメイトの自己紹介シートは、クラスメイトの発表の理解に役に立った。
質問④	その理由を教えてください。
質問⑤	SWOT 分析は、自分のことを理解するのに役に立った。
質問⑥	その理由を教えてください。
質問⑦	クラスメイトの SWOT 分析は、クラスメイトのことを理解するのに役に立った。
質問⑧	その理由を教えてください。
質問⑨	自己紹介シートのイラスト・写真は、自分の発表の理解に役に立った。
質問⑩	その理由を教えてください。
質問⑪	クラスメイトの自己紹介シートのイラスト・写真は、クラスメイトの発表の理解に役に立った。
質問⑫	その理由を教えてください。
質問⑬	授業の希望や感想があれば、書いてください。

４．アンケート調査結果の分析

4.1 文字情報の分析

まず、各質問項目は、学習者の自己の発表への評価と、他者への発表への評価についての対照的な質問になっている。統計解析ソフト R を用いて、質問①と③の各評価点について、*t* 検定（関数 *t.test*）を実行した。表 3 は、それらをまとめたものである。以下、小数点第 2 以下は四捨五入している。

表 3　質問①と③における *t* 検定結果（32 名）

	人数	中央値	平均値	標準偏差	分散	*p* 値	効果量
質問①自己	32	5.5	5.13	1.16	1.34	0.14	0.38 (small)
質問③他者	32	5.5	5.47	0.58	0.32		

得られた結果の *p* 値は、0.14 であった。質問①と質問③の間には差は見られなかった。また、質問③の他者の発表における回答の評価平均値は 5.47 で、分散は 0.32 と小さく、多くの学習者の回答は平均値近くに分布している。

次に、各質問内における属性の偏りの可否を推定するために、学習者の母語の属性別（中国語母語話者と韓国語母語話者）に分類し、被験者数が少数であっても、ある程度の推定が可能な *F* 検定[5]（関数 *var.test*）を実行する。表 4 は、それらをまとめたものである。

表 4　質問①と③における母語別の *F* 検定結果

	人数	中央値	平均値	標準偏差	分散	*p* 値	共分散	効果量
質問①中国	25	5	4.96	1.21	1.46	2.2e-16	Inf	0.95 (large)
質問①韓国	6	6	6.00	0	0			
質問③中国	25	5	5.36	0.57	0.32	0.48	1.94	0.87 (large)
質問③韓国	6	6	5.83	0.41	0.17			

※定量的な分析において、人数が若干不足していることは留意したい。

質問①において得られた結果の *p* 値は 2.2e-16 であり、有意な差が見られた。質問③において、*p* 値は 0.48 であり、有意な差は見られなかった。

次に、定性的な分析ではあるが、自分の発表に関する質問①に対するコメント（質問②）をいくつか紹介する[6]。「キーワードを見ながら自己紹介をすることは役に立ちます。」（コメント①）や「ただその場で思い出すのだけ（したこと）を言うとたまになにを話せばいいかわからなくなるけど、シートを見ながらしたら自分の情報がちゃんと見やすくかたずけて（整理されていて）けっこう自然にはなしやすくなる（自然に話しやすくなっている）。」（コメント②）や「シートがあったおかげで、どんなことを発表したらいいか悩むことが少なくなったからです。」（コメント③）などの本シートの使用に対して、肯定的な意見が見られた。また、クラスメイトの発表に関する質問③に対するコメント（質問④）には、「シートを見ないと何を言っているのか全然わからない状況があります。」（コメント④）や「シートを見なければ、クラスメイトが何を言っているのか理解できません」（コメント⑤）などの発話（音情報）だけでは、クラスメイトが話している意味が理解しにくかったため、シートが役に立ったという意見が見られた。クラスメイトの発話については、「文法間違ったところが多いので（わかりにくかった）。」（コメント⑥）や「（発表を）聞くより（本シ

ートの）文字を見たら（を見て）すぐわかりました。」（コメント⑦）などのコメントも見られた。これらの肯定的なコメントと両質問への回答ともに、平均値が 4 以上で、かつ、分散も小さいことから、本シートが学習者の自己の発表にも他者の発表の理解にも役立っていたと判断した。

4.2 視覚情報（イラスト・写真）の分析

次に、視覚表現を用いた効用について、質問⑨と⑪の分析を行う。表 5 は、*t* 検定結果をまとめたものである。

表 5　質問⑨と⑪における *t* 検定結果（32 名）

	中央値	平均値	標準偏差	分散	*p* 値	効果量
質問⑨自己	5	4.91	1.23	1.51	0.19	0.34 (small)
質問⑪他者	6	5.28	0.96	0.92		

得られた結果の *p* 値は、0.19 であった。質問⑨と質問⑪の間には、有意な差は見られなかった。また、質問⑪の評価平均値は 5.28 で、分散は 0.96 と小さく、多くの学習者の回答は平均値近くに分布している。表 6 は、*F* 検定結果をまとめたものである。

表 6　質問⑨と⑪における母語別の *F* 検定結果

	人数	中央値	平均値	標準偏差	分散	*p* 値	共分散	効果量
質問⑨中国	25	5	4.72	1.28	1.63	0.019	9.76	0.95 (large)
質問⑨韓国	6	6	5.83	0.41	0.17			
質問⑪中国	25	5	5.12	1.01	1.03	0.052	6.16	0.76
質問⑪韓国	6	6	5.83	0.41	0.17			

※定量的な分析において、人数が若干不足していることは留意したい。

4.1 節と同様に、学習者の母語の属性別に *F* 検定を実行すると、質問⑨において得られた結果の *p* 値は 0.019 であり、有意な差が見られたが、質問⑪においては、*p* 値は 0.052 であり、有意な差が見られなかった。

次に、定性的な分析ではあるが、質問⑨に対するコメント（質問⑩）をいくつか紹介する。「自分の性格に合わせてイラストを入れて自分をうまく表現したと思います。」（コメント⑧）がある一方で、「書いて（描いて）いなかった。」（コメント⑨）などの意見も見られた。6 つの質問項目の中で、質問⑨が最も平均値（4.91）が低いが、それでも 4（まあまあそう思う）以上であり、比較的肯定的な評価を得ていると言える。視覚表現の使用の有無や使用量には個人差があったことには留意したい。質問⑪に対するコメント（質問⑫）では、「クラスメートたちが自分をどのように表現するのか、そして自分が興味があることが何かをイラストで見た時、一度に（すぐに）理解できた。」（コメント⑩）などのコメントが見られた。このような肯定的なコメントと両質問への回答ともに、平均値が 4 以上でかつ分散も小さいことから、視覚表現（イラスト・写真）は、学習者の自己の発表にも、他者の発表の理解にも役立っていたと判断した。

4.3 SWOT 分析を用いた自己理解と他者理解についての分析

次に、質問⑤と⑦の分析を行う。表 7 は、*t* 検定結果をまとめたものである。

表 7　質問⑤と⑦における *t* 検定結果（32 名）

	中央値	平均値	標準偏差	分散	*p* 値	効果量
質問⑤自己	5	4.63	1.18	1.40	0.067	0.48 (small)
質問⑦他者	5	5.09	0.78	0.60		

得られた結果の *p* 値は、0.067 であった。両質問の間には、有意な差は見られなかった。また、質問⑦の他者理解における回答の評価平均値は 5.09 で、分散は 0.60 と小さく、こちらも学習者の多くは平均値近くに分布している。4.1 節と 4.2 節と同様に、母語別における *F* 検定を実行した結果、質問⑤も⑦においても、有意な差は見られず、母語の属性別における偏りはなかったと判断した。

次に、自己の SWOT 分析に関する質問⑤のコメント（質問⑥）を紹介する。「私は自分の将来の道に対して比較的固定し（どちらかというと決めてい）て、SWOT 分析はとてもよく私の性格の欠点（弱み）によって（を用いて）判断することができます。」（コメント⑪）や「SWOT 分析は、自分のことを主観的に理解し、将来の明確な計画を立てることができます。」（コメント⑫）や「自分の長所を分析して、現在の日本社会の動きに合うか合わないか理解できるようになりました。」（コメント⑬）などのコメントからは、SWOT 分析の趣旨を捉えて、積極的に自己分析に取り組んでいたと判断した。また、他者の SWOT 分析に関する質問⑦のコメント（質問⑧）では、「クラスメートたちの将来の夢や考えを聞くのが興味深かった。」（コメント⑭）や「みんなの（は）自分の強みと弱み、そして、将来のキャリアを明確に分析しているんです。」（コメント⑮）や「友達の性向（性格）と私の性向（性格）を対照する（比べる）ことができたので役に立った。」（コメント⑯）という意見が見られた。このような肯定的なコメントと、回答評価の平均値が 4 以上でかつ分散も小さいことから、SWOT 分析を用いたことは、学習者の自己の発表にも他者の発表の理解にも役立っていたと判断した。

4.4 性格を表す単語の使用数の分析

SWOT 分析を利用したことによる自己紹介の変化について分析する。まず、32 名の学習者が本シートに書き込んだ「強みの数」、「弱みの数」、「機会の数」、「脅威の数」の間における *t* 検定を実施する。学習者がポストイットで 4 つに分類したものを数えて作成している。表 8 は、*t* 検定の結果をまとめたものである。

表 8　本シートに書き込まれた性格を表す単語の数における *t* 検定結果（32 名）

	中央値	平均値	標準偏差	分散	*p* 値	効果量
強み	5.5	5.84	2.69	7.23	0.29	0.27 (small)
弱み	5	5.16	2.42	5.87		
機会	1	1.53	0.88	0.78	1	0 (negligible)
脅威	1	1.53	1.27	1.61		

表 8 に見られるように、強みと弱みの数における *p* 値は 0.29 であり、有意な差は見られなかったことから、本シートには、ほぼ同数（5〜6 つ前後）の「強み」と「弱み」が書き込まれたと判定した。同様に、機会の数と脅威の数にも有意な差は見られず、ほぼ同数（1〜2 つ）を書き込んでいたと判定した。

次に、SWOT 分析を用いたことが性格を表す用語の使用数に影響をするかを調べるために、統制群として、2021 年秋の同時期に実践をした SWOT 分析を採用していない Jamboard を用いた「自己紹介シート」における「性格を表す単語を使用した数（単語数）」と実験群を比較したものを表 10 にまとめた。また、実験群においては、「強み」と「弱み」の総合計数ではなく、「強み」として使用された性格を表す言葉のみの使用数（性格を表す単語における最小値の数）を比較する。統制群においては、学習者が各性格を表す単語を「強み」として使っているのか「弱み」として使っているのかは判断が難しいため、性格を表す単語として使用されたものは全て使用数に含めて、最大値の数で比較することとする。表 9 は、それらをまとめたものである。

表 9　性格を表す単語の書き込み数における *t* 検定結果

	人数	中央値	平均値	標準偏差	分散	*p* 値	効果量
統制群：性格を表す単語数（2021）	32	2	2.41	1.46	2.12	7.24 7e-08	1.59 (large)
実験群：「強み」を表す単語数（2022）	32	5.5	5.84	2.69	7.23		

2021 年の自己紹介シートにおける「性格を表す単語数」の平均値は 2.41 で、分散は 2.12 であり、若干のばらつきも見られるが、平均値近くにほぼ回答が分布している。また、「強みを表す単語数（2022 年）」と「性格を表す単語数（2021 年）」における *t* 検定で得られた結果の *p* 値は 7.247e-08 であり、有意な差が見られた。効果量も大きいことから、従来の自己紹介シートと比較して、本稿の試みにおいて、学習者は自分の性格を表す単語をより使用していると判断した。図 3 は、両者の違いを可視化したヒストグラムである。

統制群：性格を表す単語数（2021）　　実験群：「強み」を表す単語数（2022）

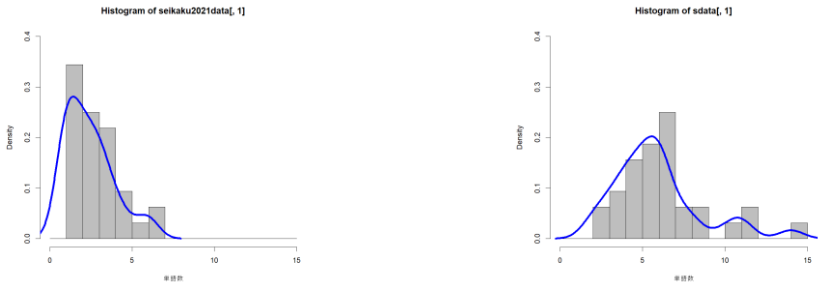


図 3 両者のヒストグラム

4.5 分析結果のまとめ

本調査の表 3、5、7 の結果より、自己の発表における回答結果が、他者の発表における回答結果よりも、3 項目全てにおいて平均値が高かったことから、本実践における一連の取り組みは、学習者が他者の発表を理解することにおいてより有用であったと判断した。また、質問①と⑨においては、母語の属性について、有意な差が見られたことから、自己の発表で使用した本シート（文字情報）やイラスト・写真（視覚情報）の利用についての回答結果は、学習者の母語の属性の影響を受けていると考えられる。一方、他の質問項目においては、母語の属性に有意な差が見られなかったことから、他者の発表を理解することにおいては、母語の属性に関係なく役立っていたと判断した。最後に、質問⑤と⑦の SWOT 分析においては、有意な差が見られなかったことから、自己の発表においても、他者の発表においても、SWOT 分析が役立っていたと判断した。

5．考察

5.1 要因の考察

統計学的な有意差が出なかった質問項目③⑤⑦⑪について、コメントや学習者の情報を参考に要因を考察する。

主な要因として、学習者の日本語リスニング力の差に起因すると考えられる。本クラスでは、中国語母語話者の学習者は約 8 割を占めているため、中国語母語話者における L1 の影響を受けた日本語発音が、韓国語母語話者の学習者にとって、聞き取りにくかった可能性は否定できないが、母語別の他者の発表における回答の評価平均点には有意な差は見られないことやコメント③を書いた中国語母語話者の学習者の意見を考慮すると、他の中国語母語話者の発表も聞き取りにくいところがあったのではないかと推察する。

これらは、「日本語能力の差」が要因の 1 つとして作用していると考察する。クラスメイトは、基本的に、大学入学基準以上の日本語能力（日本語能力試験 2 級相当以上）を有しているが、単語や知識の量の違いには個人差があったと推察される。例えば、コメント②の学習者のように、文法や動詞の使い方について誤用が見られた文もいくつかあり、学習者の日本語レベルは一定ではない。異なる母語をもつ学習者においては、文化の違いも理解しにくい面があったかもしれない。日本語母語話者である教員には、ある程度の範囲において、文

法や語彙の選択を間違えたり、難しい語彙を使用したりしても、伝わることがあるが、他のクラスメイトにおいては、難しいこともあるだろう。例えば、発表の場などの 1 対他のコミュニケーションにおいて、日本語能力試験 1 級レベルの語彙を持つ発表者と 3 級レベルの語彙力を持つ聞き手の学習者との間で、未修文法や語彙が多く使用された場合、聞き手は意味がわかりにくいことがあるということを教員は改めて留意して、解決方法を検討するべきだろう。

5.2 提案

5.2.1 オンラインツールを用いた自己紹介シートの効用

まず、各質問項目において、評価平均値が 4 以上であり、分散も小さく、学習者の各コメントから肯定的な意見が見られたことを総合的に考察すると、学習者が本シートに満足して利用していたと推察される。本稿では、自己分析や自己開示を行う際の配布物のオンライン化を試み、事前学習としての反転授業に繋がるような授業実践を行ったが、今後の対面授業においても、有意義な活用が見込まれることが期待できる。オンラインツールを使用することで、事前にクラスメイトの自己紹介を共有できる環境作りが整えられることのメリットを強調したい。

5.2.2 学習支援ツールとしての提案

次に、コメント④⑤⑥⑦から、本シートにおける文字情報が、発表（音声情報）に対する補足説明の役割を担っていたと判断する。また、授業中に確認した単語（表 1）以外で、N1 レベル程度の難しい言葉を使用している学習者が数名いたが、そのような単語に対して、ある学習者は「たまに私が聞き取れなかったのは台本の文（シートに書かれた言葉）を翻訳してちゃんとした意味を勉強することができました。また、写真などの付加的資料を使用したクラスメイトのものはより理解しやすかったです。」などの意見を残しており、本シートが学習者の反転学習としても機能していることが確認できた。多言語環境においては、共有を音声情報に限るのではなく、本シートのような文字情報は、言語理解における補完的な役割を担うものであると考察する。

5.2.3 SWOT 分析の効用

最後に、学習者の属性にかかわらず、SWOT 分析についての回答に有意な差が見られなかったことや学習者のコメント⑪⑫⑬⑭⑮⑯や表 9 と表 10 に見られる t 検定結果より、本実践を契機に、学習者の自己への理解や他者への理解が進んだと判断できよう。山内（2014: 273）において、日本人の若者に見られる自己開示のモデル化の試みとして、「現代の若者たちは、まず、私的自己の領域が大きく、他者からのその部分への干渉は極端に嫌うため、その境界線は通常よりも太い線で表すことになる。」という仮説を提案しているが、このような背景を持つ日本の若者文化では、初対面の人と話す話題として、天候などのなるべく当た

り障りのないことが適切であることを教授することは、日本文化の理解の一環として必要だと思われる。日本語教育の現場でも、山内（2014）の考えを採り入れて、日本人学生の私的自己の領域は広いことを理解させたうえで、円滑なコミュニケーションについて考えさせる必要がある。しかしながら、その前に、もう一歩踏み込んだ自己分析をさせてから、日本社会において、どのようにふるまった方がよいのかを考えさせることで、日本文化理解だけではなく、日本文化における自己理解が進むと期待できる。本調査では、日本での将来のキャリアを念頭に、内部要因と外部要因がバランスよく分析できる SWOT 分析を自己紹介に取り入れたことで、より深く自己や他者について考えさせることができたと主張する。

5.3 オンラインツール活用の提案

コロナ禍において、ICT 機器運用のノウハウが急速に広まり、比較的気軽にオンラインツールを活用することができるようになった。もちろん、本実践のようなオンラインツールを取り入れた反転授業の授業作りは日本語教育の場でも広がりを見せており、円滑なクラス運営を支援する無料のオンラインツールは、今後の対面授業においても幅広い活用が見込まれる。本実践も、その流れの中の 1 つに位置づけられる。これらの知見を取り入れて、反転授業の一環として、オンラインツールを使用することで、より理想的な授業環境を作ることができ、また、相互理解も深まり、円滑なクラス運営が実現されると期待できる。

5.4 コロナ禍における日本語授業の役割

最後に、学習者のコメントの中には、「このスピーチがないなら、みんなと話す機会は少ないので、彼たちのことわかる機会はないかもしれない」というものがあり、コロナ禍において、本実践がクラスメイトとの相互理解に貢献できたと主張できるフィードバックが得られたことは大きな収穫であった。オンライン授業においては、授業後などの関係などが持ちにくいため、授業内でのコミュニケーションの試みがより一層重要であったと総括した。

5.5 今後の課題

一般的に、人間には個人差としての個性があり、L1 においても、言語理解の発達に個人差が見られることは知られている。例えば、ある学習者は「声より文字の方が人に印象が残れる。（を残せる）」というコメントをしているように、音声よりも文字での認知が得意である学習者も存在する。このように、会話や音声における表現が得意な人もいれば、文字やイラストにおける表現が得意な人もいることから、L1 獲得と同じように、L2 習得においても、音・文字・視覚などの感性を複合的に取り入れた学習環境を構築していくことを目指すことは、日本語教育においても、喫緊に取り組むべき課題と考えられる。また、本シートをオンライン上で共有しなかった場合との対照研究の実施については、今後の課題としたい。

６．おわりに

本稿では、オンラインツールを用いた「SWOT 分析自己紹介シート」を作成し、自己紹介の授業実践を報告して、6 段階評価アンケート調査における定量的な分析とそれぞれのコメントの定性的な分析を実施して、その結果の考察と提案を述べた。とりわけ、本シートの利用においては、学習者の自己の発表よりも他者の発表への回答の評価平均値が高かったことを示すことができた。最後に、授業において、オンラインツールを採り入れることで、自己紹介の発表（音声情報）が聞き取りにくい学習者が、本シート（文字・視覚イメージ情報）にアクセスすることで、うまく聞こえなかった部分を補完することができるため、学習支援や相互理解の向上につながることを主張した。

謝辞

本稿は、2023 年 1 月 28 日に開催された第 27 回国際言語文化学会日本語・日本語教育研究会の口頭発表の原稿に、加筆修正を施したものである。発表の席で貴重なご意見を賜った方々や査読者の方々に、この場をお借りして、深く感謝申し上げる。

注

1) Jamboard は、米国企業アルファベット株式会社のインターネットサービスの一つで、オンライン上のホワイトボートである。URL を知っている人同士が、自由に文字を入力したり、イラストを挿入したり、ペンタブレットで自由に書き込むことができる。
2) 著者らの担当した日本語科目は、リアルタイム Zoom 方式の遠隔授業で行われた。
3) Jamboard の機能の 1 つに、ポストイットがある。ポストイットは、自由に追加・編集したり、配置を変えたりすることができる。
4) 視覚イメージとは、佐古・山内（2022: 186）では、「学習者が文を読んだ時に心に抱くイメージを『心的イメージ』と呼び、その心的イメージがイラストとして現出されたものを視覚器官を使って見ることができるものとして、『視覚イメージ』と呼ぶこととする」と定義されている。
5) 各属性の被験者数が少ないため、本稿では、*F* 検定を実施し、属性において偏りの可否を推定することを目的としている。
6) 以下、学習者のコメントは、同意を得て掲示している。コメントは、原文のママである。一部、わかりにくいところは筆者が下線を引き、（）で注釈を入れている。

参考文献

荻原稚佳子・斉藤真理子・増田真佐子・伊藤とく美.（2005）『日本語上級話者への道―きちんと伝える技術と表現』東京：スリーエーネットワーク.

金森久雄・荒憲治郎・森口親司.（2013）『有斐閣経済辞典第 5 版』東京：有斐閣.

鎌田修・冨山佳子・山本真知子・ボイクマン総子.（2012）『生きた素材で学ぶ新・中級から上級への日本語』東京：ジャパンタイムズ.

金明哲.「R」最終閲覧日：2022 年 7 月 10 日（https://mjin.doshisha.ac.jp/R/index.html）
佐古恵里香（2022）「中上級日本語クラスにおける視覚イメージの利用に関する一考察―Google Jamboard を用いた実践報告から―」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会誌』Vol.29, pp.76-77.
佐古恵里香・山内信幸.（2022）「中間言語における視覚イメージの果たす機能に関する一考察―中上級日本語学習者の描くイラストを手がかりに―」『比較文化研究』147 号, pp.183-196.
迫田久美子.（2020）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』東京：アルク.
方斐麗.（2022）「コロナ禍における日本語教育の変化－多文化を採り入れた遠隔授業の試み」『2022 年応用日本語国際シンポジウム予稿集』, pp.42-50.
山内信幸.（2014）「現代の若者たちの『距離感』に関する一考察―『若者ことば』から見た若者の精神的志向性を中心に―」『比較文化学の地平を拓く』日本比較文化学会関東支部編, pp. 257-275. 東京：開文社出版.
リクナビ就職準備ガイド「【自己分析のやり方】手軽にできる 6 つの方法や目的・志望動機の作り方まで」最終閲覧日：2023 年 1 月 3 日
（https://job.rikunabi.com/contents/howto/4143/）
Google Jamboard 「Google Jamboard: 共同作業に適したデジタル ホワイトボード」 最終閲覧日：2023 年 2 月 23 日（https://edu.google.com/jamboard/）
Sako, E. & Yamauchi, N. (2022) “Use of Visual Images in Remote Classes as a Teaching Method: Findings from Exchange Classes between Japanese Students and Elementary- to Beginner-Level Foreign Japanese Learners,” *The 28th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings*, pp.337-351.

参考資料

参考資料 1　日本語学習者に行ったアンケート調査（Google Forms）

アンケートのお願い

回答期間：2022 年 10 月 10 日(月)～10 月 19 日(水)

※アンケートは、日本語教育の研究目的で使用します。（名前は公表されません。）

（1）お名前（　　）

（2）ご出身国（　　）

（3）自己紹介シートに関するアンケート

表 1 を参照ください。

（4）質問があったら、書いてください。（　　）

（5）あなたのメールアドレス（　　）

（6）このアンケートを研究目的に使用することに同意しますか。はい・いいえ

中国人留学生の就職活動に関する考察
―日本語の自己 PR 文の特徴について―
A Study on the Job Hunting of Chinese Students
-About the characteristics of self-PR sentences in Japanese-

戸田 あゆみ

Summary

This study aims to clarify the characteristics of self-promotion among Chinese students. The results showed that the content was distracting or had nothing to do with self-promotion. Additionally, no significant deviation was observed even if I did not instruct the structure of self-promotion. Further, a higher Japanese language level among students did not mean less misuse.

１．はじめに

1.1.研究背景

近年、日本の就職活動は新型コロナウィルスによってさまざまな影響を受けている。就活イベントが制限され、学生が直接採用者に会うことが困難な状況である。また、スカウト型が増えているということもあり、提出資料が大きな鍵となっている。このような点を踏まえても、履歴書やエントリーシート(以下 ES)が通らなければ、いくら熱意や実力があっても企業側の採用者と会うことができない。日本の就職活動における最初のコミュニケーションの場は、書類である履歴書や ES であると言えるだろう。この就職活動の流れは時代とともに変化するものでもあるが、学生に人気の大企業であるほど応募者の数と企業の採用人数に差があると書類の段階で人数が限定されてしまう。特に留学生は大企業への就職を希望する傾向にあり、志望する学生の多くが書類選考でふるいにかけられる。企業との最初のコミュニケーションの場であり、コミュニケーションや日本語力も審査対象となる ES や履歴書がいかに重要かを知っておく必要があるだろう。

日本人の学生も苦労する ES や履歴書づくりにおいて、名前や住所、学歴などの個人情報を省いて考えると、2 点が重要な鍵となる設問である。1 点は志望動機である。志望動機は志望する会社や職種によって変える必要があり、個人によって大きく異なる。そしてもう 1 点は自己 PR である。この設問はその人の性格や資質といった人となりが一番ダイレクトに採用者側に伝えられる項目と言ってもいいだろう。特に重要だと感じる点で、日本の企業のポテンシャル採用がある。日本学生支援機構（JASSO）の「就活ガイド」によると、「ポテンシャル採用とは、採用段階において即戦力として活躍できるほどのスキルがなくても、入社後に成長が期待できる潜在的な能力をもった人材を採用すること」と説明している。また、「そのため企業は、その人に備わったコミュニケーション能力や主体性、チャレンジ精神、協調性

などを重視して採用を行う傾向にある」と明記している。この採用の特徴でも分かるとおり、ポテンシャル採用に重視されるコミュニケーション能力や主体性、チャレンジ精神、協調性などを一番ダイレクトに伝えられるのは、自分の強みなどを含めた自己 PR であると言える。よって、自己 PR は日本企業における就職活動において欠かせないものと言えるだろう。

1.2. 先行研究

留学生の就職に関する先行研究はいくつか確認できる。たとえば古沢(2020)は関西の大学・大学院で学ぶ留学生などを調査し、留学生の就職支援体制に関して、「留学生限定」での実施は少ないようであると述べている。また、留学生自体も就職活動のスタート時期が遅いことや就職活動の流れを把握していない、ES や面接などの対策講座に参加していないとの問題点があることを挙げている。そして、就職活動に成功する外国人留学生の特性について、「日本語能力」「日本的な態度・行動・コミュニケーションスタイルの体得と日本文化への適応」ということを明らかにして、教育の方向性を考えていくことが必要だということを説明している。

また、金（2020）でも、留学生が就職活動のさまざまな段階で困難を感じており、特に ES の作成段階で最も苦労していることがうかがえると述べている。そこで、中国人留学生が提出した ES 全体の合否要因を研究している。審査に通過した ES と通過しなかった ES を分析したうえで、内容及び構成の側面では有意な差があり、言語面ではそれがなかったという結果を得ている。

書類選考は日本人の就職活動で必ずと言っていいほど実施されるため、日本人に対して調査した文献を調べた。古本(2013)は自己 PR 文として「大学で力をいれたこと」を取り上げ、文章にパターンが認められ、ES の文章の一つとして、ジャンルを構成していると推定できることを説明している。崎濱(2014)の研究では日本人の大学生の自己 PR について分析しており、産出の際には、自身の物事に取り組む姿勢、自身の持つ力の実証等を示す内容（情報）を選択することが重要になると述べ、添削後の文章の方が具体的であることが考えられることを明らかにしている。しかし、就職活動に取り組む人数が多い中国人留学生の ES の自己 PR の内容自体に注目した研究は少ない。本研究では以上の点を踏まえ、中国人留学生の自己 PR にはどのような特徴が表れるのかをアンケートや実際に自己 PR 文を作成して分析した。

1.3. 対照研究の意義

本研究のリサーチクエスチョンは、「中国人留学生はどのような自己 PR を作成するのか」というものである。また、本研究の目的は「中国人留学生の作成した ES の特徴を明らかにすること」である。そして、その結果を中国人留学生の就職活動の支援に役立てていくことである。

本研究の意義は同研究結果により、中国人留学生、ひいては留学生全体の有意義な就職活動に繋げることである。ES の作成をサポートする先生の参考になるだろう。本研究では、就

職率・就職希望者が多い中国人留学生の自己 PR の特徴はなにか。どのような指導をすることが望ましいのかを明らかにする。

２．自己 PR 調査の概要

アンケート調査と記述式調査の 2 種類を用意した。具体的な内容は、以下のとおりである。

・アンケートの記入

どのようなテーマで書くか（協調性やリーダーシップなど）、何について書くかなどの自己 PR の内容について、その他日本語レベルなどを記入。

・その後、自己 PR の記入

自己 PR の定義のみ学生に伝える。用紙にも記載する。

本研究で中国人の自己 PR の特徴を明らかにするために、中国人留学生を対象に ES を作成してもらう。テーマは「自己 PR」であり、400 字詰め原稿用紙を指定した。対象者は以下の通りである。神戸市の A 大学の中国人留学生 25 名に協力いただいた。中国人留学生は就職活動の時期をむかえる 3 年生である。調査は 2021 年 12 月にアンケート調査、翌年 2022 年 12 月にサンプル数を増やすために追加調査を実施した。

表 1　アンケート対象者：中国人の男女 25 名

性別	男性　15 名	女性　10 名
日本語能力	N1　2 名、　N2　17 名、　未取得　6 名	
学年	3 年生	

その後、回収した ES を基に「内容」「構成」「言語」の 3 つの点から分析を行った。これらの分析内容については、金（2020）の分析を参考にした。下位項目や評価基準については、日本学生支援機構の「外国人留学生のための就活ガイド 2024」の ES の書き方も参考にした。今回は自己 PR に注目した研究であることを踏まえて、坂本(2021)にあるように結論から書くことやきっかけやエピソード、数字などの実績を盛り込み、できるだけ具体的に書く。自分が実際にしていたことを書くこと、なども参考にしている。なお、作文用紙を用い、書き方などの指導のない段階での記入であるため、評価基準にはレイアウトの工夫や見やすさは評価に含めていない。また、本論文の分析結果の妥当性については、日本語教師 2 名の先生に確認をお願いした。注 1）

表 2　中国人留学生のエントリーシート評価項目

側面	下位項目	評価基準
内容	根拠が妥当	アピールする内容について書かれている
	具体性がある	エピソードや体験談が書かれている
構成	結論が初めにある	採用者が分かりやすいように結論が最初に書かれている
	テーマが 1 つか	複数のことが混在、散漫していない
	仕事への貢献に繋がることが最後に書かれている	今後仕事をしていくうえでどのように活かすことができるのかが書かれている
	1 文の長さが適切である	適切な文の長さで区切っている
	余計な文がない	自己紹介などの自己 PR に関係のない内容の有無
言語	語彙・文法が正しい	語彙や文法的な間違いがない
	表記が正しい	誤字脱字がない
	文体が一致	書き言葉と話し言葉、敬語の混同 文末の「です・である」の混同がない

3.研究結果

学生が書いた自己 PR とアンケートにおいて、内容の分析を行った。結果は以下のとおりである。なお、例として記載している学生の文章は、誤字や語彙の間違いも含め記入された文章をそのまま記載する。

3.1 内容

まず、「テーマの内容が妥当か」については、12 名が条件を満たしており、13 名が条件を満たしていないと判断した。12 名の学生については、どんな強みをアピールしたいのかが明確であり、結論を始めに書くケースも見られた。ただし、説明するための字数が少ないという課題は残っている。それに対して、13 名の学生については、「テーマにおける理由や根拠の喪失」という問題が確認できた。これは、掲げた自己 PR のテーマに対し、その理由や根拠が不明確であったり、書かれていても不一致であったりするものである。以下、それを示した例を見ていく。

(例 1)「私の性格は明るくて、コミュニケーション能力も良好で、いつも積極的な態度を持って物事を扱います。」＜中略＞「生活の中で、壊れたことがあれば、まずは自分で修理してみます。スマホでもパソコンでも、壊れたら自分できちんと研究し修理します。」

上記の例では、「性格が明るい」、「コミュニケーション能力があり、いつも積極的な態度である」といったコミュニケーション能力の高さを、自己 PR のテーマとして掲げている。しかし、後半部分では、「壊れたスマホやパソコンを自分で研究し修理する」といった個人の作業の体験から、根拠を示そうとしている。性格の明るさが伝わりにくいと同時に、個人作業においてコミュニケーション能力を示す行動ではないと言えるだろう。このような学生には、テーマから理由・根拠の提示に至るまで、論理的な組み立て方を訓練させる必要がある。また、語彙理解の誤りがないかの確認が必要であろう。

続いて、「具体性がある」については、該当する学生は 25 名中 8 名であった。該当しない学生は 17 名である。内容や構成面で見ると、この項目を満たせている学生は少ない。また、具体的に書くことができている学生で、複数のテーマを用いる人は 2 名しかいなかった。具体性がある文としては、「たとえば～」を、使って行動を具体的に書いていることなどが挙げられる。以下の文を参考に挙げる。

(例 2)　テーマ：私は相手の立場に立って、物事を考える行動ができる人間です。
「たとえば、荷物が多いお客様がいたらなるべく荷物をまとめて包んだり、席まで商品を運んであげたりしました。小さなことですが、お客様から『ありがとう』と言われたときはすごくうれしかったです。」

どのような行動を取ったのかが書かれていて、テーマが合致し、理由が裏付けられている。また、お客から実際に言われた言葉が添えられているので、相手の立場に立って行動ができるというテーマに沿った内容で、状況がイメージしやすい。

次に、良くないと判断した文を参考に挙げる。

(例 3)「一方で、私も企業の責任感を取る人間です。アルバイトの時で、お客様の期待以上のサービスを行いたいという思いから、ご要望に納得いただけるように、できることはすべて行います。お客様によい感じを与えるようにします。」

ご要望に納得いただけるようにしたことはどんなことなのか。できることはすべて行いますということが書かれている以上、いくつかの行動ができていると予想されるが、その行動が書かれておらず、実証できていない。状況や行動がイメージできないため、この文章は具体性がないと判断した。

3.2 構成

では、次に構成面について述べる。

「結論が初めにある」という項目については該当者が 25 名中 12 名、該当しなかったのは 13 名であった。該当者のうち 8 名は「根拠が妥当」にも該当しており、初めに言いたいこと

を提示し、自身の意識としても書きたいことがはっきりしていると、その内容について書きやすいと言えるのではないか。該当者の 1 名の例を挙げる。

(例 4)「私は目標達成のために努力する点では誰にも負けません。私は留学生なので、日本語はあまりよくありません。この原因で、授業の内容や課題などを理解する時間が誰よりも長いです。」＜中略＞「毎日授業内容を復習して、本とニュースを読んで、日本語を習っています。」＜中略＞「それから、日本語をもっと上手になるために、学生寮や学校のイベントに参加しています。」

この文章ではマイナスのことが数行に渡り書かれているので、評価される自己 PR としては該当しない。しかし、その後の内容にどのように課題を克服したのかが書かかれている。最後には単位を落としたことがなく奨学金をもらったことがあることなどが書かれていて、文章にまとまりがあった。では、次に結論が始めにない学生の例である。

(例 5)「留学生として、日本で観光に関する仕事を勤めたいと考えております。私の強みはチームを成功に導くリーダーシップがあることです。」

最初の 1 文があることによって、強みの文章が薄れた印象になっている。自己 PR ではない余計な 1 文が最初にあるだけで、的外れの文章となっている。このほか、「〜出身です」や「名前は〜で、漢字は〜と書きます」「所属は〜です」など、自己紹介を含めて書く学生がいた。

「テーマが 1 つか」については、該当者は 10 名、該当しない学生が 15 名であった。半数以上がテーマを多数変えて書き、内容が散漫している状態であることが分かった。ある学生は「自己 PR を通して伝えたいテーマはなんですか」というアンケートの問いに対して「適応性と協調性」と答えているにも関わらず、以下のように性格がテーマとなる単語のみを羅列する人も見られた。

(例 6)「私の性格は明るくて、穏やかで、活気があって、優しくて、誠実です。真面目で責任感があり、積極的で、苦難にも耐えられる。考えることが好きで、謙虚に人とコミュニケーションが取れる。組織力、運動エネルギー力、団体協力精神が強く、応和に迅速に適応する。」

このような書き方については、テーマを 1 つにすることで空きスペースに具体的なことを書くことができると伝える必要があるだろう。ポイントを絞ることがいかに重要なことかを伝える必要がある。

「仕事への貢献に繋がることが最後に書かれている」については、該当者は 16 名で、該当しなかったのは 9 名であった。指示がなかったにも関わらず、比較的仕事をイメージしなが

ら意識して書いている学生が多かった。また、「まとめ」の部分でもあり、文章の書き方をある程度理解し書くことができている。このことは、起承転結で書くことを意識している学生が多いとも読み取れる。評価される例を挙げる。

(例 7)「アルバイトの経験でこれから就職しても自分から率先して行動すると思います。周りを観察して、自分のできることがないか常に注意して、自分から行動していきたいと考えています」

次に、仕事への貢献に繋がることが最後に書かれていない学生の例を挙げる。

(例 8)「過去の経験から私は、目標に対して全力で取り組み、失敗してもその経験バネに次の目標に挑むという自分の一面に気づくことができました。本日は、このような貴重な時間を頂きありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。」

「一面に気づくことができました」の後に、そのことをどのように仕事に活かせるのかが書かれている方が評価される自己 PR であると言えるだろう。

「1 文の長さが適切」については、該当者が 17 名であった。短くできる文を繋げて書くなど、1 文を長くする傾向がある学生は 8 名であった。その学生の特徴として、「～が」や「～て」「～で」を用いて文を繋げていた。

(例 9)「中高生時、学生会長を務めていましたが、当初は、失敗が多かったのですが、クラスメートとの交流や先生の連携を改善する必要がありましたが、その後、先生から指導して、クラスメートによく交流して、最後に支持率は 1 位になりました。」

助詞の誤用は省いても、助詞の「が」を使って文を長くする傾向にある。

「余計な文がない」については、該当者が 6 名、余計な文を書いていた人は 19 名であった。自己 PR に関係のない文が含まれていることで、大きく印象が変わるため、注意が必要である。自己紹介や所属などを始めに書いているなどである。

3.3 言語

言語に関しては大きな差が見られなかった。すべての項目を満たす該当者は 2 名で、N2 の男子学生 1 名と、同じく N2 の女子学生 1 名であった。

項目ごとの該当する学生の人数は、「語彙・文法が正しい」(4 名)、「表記が正しい」(4 名)、「文体が一致」(13 名)であった。なお、これらの該当者と日本語レベルを比較したが、日本語レベルが高ければ該当するわけではなかった。3 点の下位項目のなかでも、該当者が多かった「文体が一致」という項目の不適切な例を挙げる。

(例 10)「私はコミュニケーション力が高いです。学校でたくさんの国の学生がいます。そこで、みんなと話したり、情報を交換したり、たくさんの友達ができました」＜中略＞「私はまた行動力があります。この強みはアルバイトに 2 年間で勉強しました。飲食店の従業員として、行動力に自信があります。コロナ禍で店が不景気になった。」

文の始めは「行動力があります」など、「です・ます調」で書かれている中で、突然、文中で文体が変わっていた。

(例 11)「ゼミの班長とグループリーダーとして、日本と中国のマーケティング比較を研究し企画を立てて、一人ひとりの役割を分担して、チーム全員がお互い協力するようにしました」＜中略＞「英会話クラブで世界各国からの人と交流することによって、他の国での独特な文化を理解し、国際的な視野を広げたっことが仕事に役立つと考えております。」

文の前半部分では「です・ます調」で書かれているが、会社や仕事面に触れて書いている後半部分では「仕事に役立つと考えております」、「橋渡し役となってほしいと考えております」などより丁寧な文体に変わっていた。

４．まとめ・展望

以上のように、中国人留学生の ES の特徴をみてきた。この内容をまとめると、以下のようになる。

① 内容面

複数のアピールポイントがある学生が多い。しかし、内容が散漫になったり、自己 PR に関係のない内容を書いたりする傾向にあることが分かった。一方、具体的に書くことができていない学生が多い。書く内容としては困ることがない分、1 つのエピソードをどのように具体的に書くかを、模範回答を提示して伝える必要があるだろう。また、具体的に書けないことに、自己分析の不足も考えられる。今回は多くの学生が自己分析をしないまま書いたことで、何が 1 番のアピールポイントなのかを整理できていない状態でもあった。自己分析の結果を踏まえて、どのテーマで書くのか整理できている状態で書くことが望ましいと言える。

② 構成面

構成面では、書く順序などの指導のない状態でも大きく逸脱したものは見られなかった。起承転結で書く傾向が見られたり結論が初めに書かかれていなかったりと、ポイントを押さえていないところには指導が必要である。また、余計な文を書いている学生の ES については、この部分を省けば構成として問題のない場合がほとんどであった。履歴書や ES 全体を見せて、設問項目の記入の目的を伝える必要があるだろう。また、企業にどの段階で提出する

ものなのかということや、シートの種類によって字数などが大きく異なる点も伝えたうえで書かせると効果的ではないかと考える。

③ 言語面

日本語レベルが高ければ該当するわけではなかった。この分析から、N1 取得者だからといって、言語に関しての指導が不必要というわけではない。言語については完全にできていると言える学生がいないため、教師の見直しは必須と言える。そして、日本語力を重視する日本企業へ提出する留学生の ES において、誤字脱字の排除は必須である。

本研究ですべての項目を満たしたのは、言語面の項目を全て満たした N2 の男女の学生であった。しかし、どちらも具体的な行動を記す文が比較的長くなる傾向にあった。言語レベルや日本語理解の高い学生には、1 文を短くすることを改めて伝える必要があるだろう。また、今回はレイアウトの面での分析は省いた。添削や指導をする場合に、ES は簡潔に一目で読みやすいものにすることが求められることを伝えることも必要だろう。ビジネス文書形式での書き方や、1 文の長さをできるだけ短くするという指導は必要であると言えるのではないかと考える。

本研究では内容および構成を分析することを含むため、学生が書き慣れている原稿用紙を用いた。しかし、大学の履歴書や日本企業の ES では、自己 PR を書くスペースは枠として設けられていることが多い。実際に各企業に提出する場合は、内容を短縮したかたちで書かなければならないことがほとんどであろう。今後は、留学生が自由な形式で書いたこの自己 PR の内容を、ES に応用するにはどうすればいいのかを考える必要がある。

注

1) 関西の大学で日本語教育に従事している 40 代男性の日本語教師と 50 代の日本語教師である。

参考文献

池田伸子(2009)「留学生の就職を支援するための実践的日本語教育について」『ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要』、pp.131-142

上野惠美、趙彩尹(2022)「コロナ禍前後における『エントリーシート』の質的変化-質問項目の分析を中心に-」“Journal of Inclusive Education”, VOL.11, pp.83-93

北原泰邦(2013)「キャリア教育における文章表現―指導と実践の報告―」『信州豊南短期大学紀要』、pp.167-201

金晶晶 (2020)「就職活動中の中国人留学生が提出したエントリーシートの合否要因に関する一考察」『国際文化学』、33 巻、pp.27-48

後藤淳一(2020)『内定勝者　私たちはこう言った！こう書いた！合格実例集&セオリー2022 エントリーシート編』、PHP 研究所

齊藤仁志(2013)「就職面接で外国人留学生の受け答えに対し日本人ビジネスパーソンは何をどう捉えるのか-留学生のキャリア支援における基礎的研究-」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』、11 巻 1 号、pp.53-60

坂本直文（2021)『内定者はこう書いた！エントリーシート・履歴書・志望動機・自己 PR 完全版　2023 年度版』、高橋書店

﨑濱秀行(2015)「大学生の就職活動における自己 PR 文産出に必要な事項に関する検討」『阪南論集　人文・自然科学編』、VOL.50 No.2、pp.81-88

田中真理・阿部新（2014)『Good Writing へのパスポート－読み手と構成を意識した日本語ライティング』、くろしお出版

古沢昌之（2020)「関西の大学・大学院で学ぶ留学生の就職に関する研究」報告書(2019 年度)『アジア太平洋研究所資料』

古本裕子(2013)「就職活動における自己 PR 文の談話分析」『日本語教育方法研究会誌』、第 2 巻 1 号、pp.80-81

「留学生交流施策全般」(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1306885.htm) 、2023 年 2 月 20 日 閲覧

「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書)」(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1342726.htm)、2023 年 2 月 20 日 閲覧

「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学者数』等について」(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm)、2023 年 2 月 20 日 閲覧

「『外国人雇用状況』の届出状況まとめ（令和 4 年 10 月末現在)」(https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_30367.html)、2023 年 2 月 20 日 閲覧

「外国人留学生のための就活ガイド 2024」日本学生支援機構（JASSO)(https://www.jasso.go.jp/ryugaku/after_study_j/job/guide.html)、2023 年 2 月 20 日 閲覧

『国際言語文化学会 日本学研究』原稿執筆規定

京都外国語大学日本語・日本語教育研究会、カルチュラル・スタディーズ研究会では、年１回、研究会誌『国際言語文化学会 日本学研究』を刊行する。

１．執筆資格：
その年度の研究会において口頭発表することを原則として条件とする。
２．原稿の種類：
1)原稿の種類は以下のとおりで、編集委員会が認めたものとする。
研究論文：日本学または文化の研究および関連領域について、新規性・独創性のある研究、かつ、論証性のあるもの。
2)すべての論文は「投稿論文」として扱い、2 名の査読者による査読を行う。査読に当たった者の一覧は公開するが、個々の論文における査読者の氏名は公開しない。
3)論文は未発表のものに限る。他誌に同時に投稿していることがわかった場合は不採用とする。ただし、未公刊の修士論文、博士論文の一部は投稿できる。
4)翌年 3 月発行の会誌に掲載されるものの締め切りは 1 月の第 1 日曜日とする。
３．原稿の分量等：
1)論文は、原則として 20 ページまでとする。
2)図表などは上記の枚数に含まれるものとする。
3)締切日を過ぎた原稿は受け付けない。
４．要旨などについて：
論文の初めに英語の要旨をつけること。要旨の分量は 800 字までとする。また、タイトルは、欧文和文両方を必要とする。
５．校正：
原則として、査読以後の文章の訂正、加筆は認めない。ただし、査読者の指示があった場合に限り、その箇所を修正できる。
６．原稿の採否：
編集委員会による査読によって締切日から約１か月で決定される。
７．原稿の掲載：
当該号の投稿論文数、その他の事情により次号に繰り越す場合がある。その場合、編集委員会は投稿者に連絡し、協議するものとする。
８．その他：
必要な事項については、編集委員会の議を経て決定する。
９.著作権について：
掲載原稿の著作権は、執筆者に帰属する。ただし、編集委員会は、掲載原稿を電子化し、インターネット公開・配布するための権利を有するものとする。
10. 原稿の送付先：
r_kageura@kufs.ac.jp（影浦）

国際言語文化学会日本学研究第８号

執筆者一覧

影浦亮平　千葉商科大学 基盤教育機構 准教授
佐古恵里香　京都精華大学 非常勤講師
辻周吾　流通科学大学 商学部 経営学科 准教授
戸田あゆみ　大阪観光大学 非常勤講師
布施将夫　京都外国語大学 教授
堀口朋亨　国士館大学 経営学部 経営学科 教授
村山弘太郎　京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 准教授
山内信幸　同志社大学 教授
山崎誠　流通科学大学 商学部 マーケティング学科 特任講師

査読者

石井克　札幌大学 助教
影浦亮平　千葉商科大学 基盤教育機構 准教授
加藤登紀　武庫川女子大学
清水泰生　同志社大学 日本語・日本文化教育センター
辰巳遼　京都外国語短期大学 キャリア英語科 講師
辻周吾　流通科学大学 商学部 経営学科 准教授

『国際言語文化学会 日本学研究』第 8 号

令和 5 年 3 月 31 日　印刷
令和 5 年 3 月 31 日　発行

編　集　京都外国語大学日本語・日本語教育研究会
京都外国語大学カルチュラルスタディーズ研究会
連絡先　日本語・日本語教育研究会:r_kageura@kufs.ac.jp
カルチュラルスタディーズ研究会:r_tatsum@kufs.ac.jp
発行所　京都外国語大学国際言語文化学会事務局
〒615-8558　京都市右京区西院笠目町 6
印　刷　株式会社　北斗プリント社